ＩＳ／空の境界

姫龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ／空の境界

【Ｎコード】
Ｎ４２７３Ｕ

【作者名】
姫龍

【あらすじ】
僅か一年の昏睡は篠ノ之箒から身体以外のすべてを奪っていった。記憶の喪失と引き換えに手に入れた、あらゆるモノの本質を模倣することのできるＩＳネーム『悪平等蓮姫』。箒の刃に映る日常の世界は、非日常の世界と溶け合って存在している……！　もはや伝説となった同人小説から出発し『新伝綺』ムーブメントを打ち立てた歴史的傑作。そんな作品とハイスピード学園バトルラブコメを掛け合わせたらいったい、どんな作品が出来上がるのか。　第一章寂滅為楽、完結。第二章重複心象、執筆中。

1／寂滅為楽

世の中の何もかも受け入れたとすれば、少なくとも傷付く事はない。
気に入らない事も、嫌な事も、すべて他人事なら、傷付く事はない。
――反対に、何もかもはねのけてしまえば、もう、傷付かずにはいられない。
気に入らない事も、嫌な事も、すべてが私事なら、傷付かずにはいられない。
私は一体どっちだろう？
何もかもを受け入れて笑うのだろうか。
――それとも。
何もかもをはねのけて泣くのだろうか。

皮膜の間を行き来して、今日の私はここに到る。

／0

とある三月の夜、事前に連絡もなく篠ノ之束がやってきた。
「はろー。久し振り！　元気だったぁ？　箒ちゃんっ」
突然の来訪者は玄関口に立って、満面の笑顔で挨拶をしてくる。
「実はね、ここに来る前に邪魔してきたのがいたから、かるーく、捻り潰してきたんだ。確か『亡国機業（ファントム・タスク）』だったかな？　うん、意味不明。まず名前がナイナイアリエナイ。他人のまわしで相撲して、何を勘違いしてるんだろうね？　センスもなきゃ実力もないくせに、束さんに喧嘩売ってくるなんていいドキョーしてるよ、ホント」
玄関でブーツの靴紐をほどきながら、手に持ったビニール袋を投

げてよこす。中には、デバイス（※精密機器、ここでは電子化された情報端末）とよく解らない塊が一つ。

確認してみればＩＳネーム『アラクネ』の詳細データが記録されていた。

ただ、このＩＳ既に現存していない。その理由はこのよく解らないと称した塊に記されていた番号とアラクネのＩＳナンバーが同一の物だからだ。

親に牙を剥いた六歳児は代価として自身の命を取られたらしい。

デバイスを仰ぎ見ている隙に、束はブーツを脱ぎ終えてさっさと部屋へと歩いていった。欠片もそんな態度は見せないが疲れているのだろう。

私は特に何も言わず、束の後を追って自室へと移動する。

「うわー、相変らず片付かない部屋だねー。こんなの年頃の男の子に見られたら幻滅されちゃうよぉー？　箒ちゃん」

「一人しか住んでいない家で自重する必要なんかない。そもそも誰か招くこと自体、ありえないだろ」

「……むぅ。そう言われると束さんは何とも返し辛いなー。ぶいぶい」

可笑しな擬音語を発しながら、束は腰を下した。彼女は自分が不利になるとわざと道化を演じて誤魔化す傾向があるらしい。――最近、思い出したことだ。

束は部屋に置いてあった椅子に腰掛けた。

私は床下に散乱する荷物を適当に蹴り飛ばして道を作りながら、束の背後にあるベットに腰を下すと、そのまま身体を横にする。束は私に背中を見せたままだ。どうやら周りの設置物に興味を覚えているらしい。

その、無駄のないすらりとした女性らしい背中を、私はボウと観察する。

篠ノ之束という女性は私とは血筋を同じくする姉妹、その姉に該当する人物らしい。
――生まれついての異端児。端的に表現するならば存在不適合者。自分に適応しようとしない世界を強引に捻じ曲げて、顛覆させた『天才』
知る限りでもこんなものばかりだ。
あげく全世界から指名手配された国際テロリストというのだから性質が悪い。
格好はというと、不思議の国のアリスで主人公が着ているような青と白のワンピース。頭の上にはウサギの耳を機械化した様な装置が装着されており、一見すれば一人不思議の国のアリス。……相変らずよくわからないファッションセンスをしている。
「それにしても、箒ちゃんもとうとう高校生かー。早いね、ついこの間まで中学生だなーって思ってたのに……。それで学校はＩＳ学園に進学するんだよね？」
「ああ。とくに目標もないからね。とりあえず将来金回りのよさそうなところに――」
「もぉっ！　まだ、そんな事言ってるの？　だめダメ、もっと人生楽しまないと駄目だよ箒ちゃん！　いっくんやちーちゃんが聞いたらびっくりするよ！？」
「――知らないよ。実感が湧かないんだから。束との会話だって、違和感が付き纏うっていうのに、会った事もない他人を引き合いに出されても困る」
「……もう、お願いだからそんな風に言わないでよ、箒ちゃん。上には束さんがお話しておくから、会ってみようよ？　きっと箒ちゃんの為にも、いっくんやちーちゃんの為にもなるんだよぉ？」
まるで我侭な子供を諌めるような言い方に私は眉をひそめる。
何がどういけないというのだろう。私と、束がいう『いっくん』、『ちーちゃん』の間になんら法的な関係など存在しない。たんに友人だった私が交通事故にあって、以前の記憶を損失してしまっただ

けなのだ。ちーちゃんはともかくいっくんとはもう遭う可能性すらないのだから、今のままでも何ら問題はない筈である。
……束はいつも私の心の在り方を心配する。
そんなもの、どうでもいい事だというのに。

◆

私には何物にも変えられない三つの宝物がありました。
それぞれが異なる輝きを放つ宝石（ひとたち）。
私の好奇心を刺激してやまない唯一無二の宝物でした。
――一つは無敗の友人。私と相反する存在である、織斑千冬、『ちーちゃん』
――一つは愛せる異性。私が認め赦す存在である、織斑一夏、『いーくん』
――一つは血を繋ぐ妹。私が真に愛す存在である、篠ノ之箒、『箒ちゃん』
しかしそれはもう、昔の話。
私の宝物は、もう篠ノ之束を『お姉ちゃん』とは呼んでくれません。

◆

「亡国企業」
「――――え？」
「ファントム・タスクが束を襲撃した事に意味はあるのか？」
意味のない呟きに、何かを考えていた束は正気を取り戻す。と、馬鹿正直にも今の問いを真剣に考え出した。
「うーん、解んない。気にもしてなかった……。でも、そうだね。確かにあれって何だったのかな。まさかたった一機のＩＳごときで束さんを誘拐できるって考えてた訳じゃないと思うけど……。まあ、

箒ちゃんやいっくんやちーちゃん以外の人間が何考えてるかなんて知らないし、人間なんて莫迦な生き物だから。案外、本当にタカをくくったのかもしれないよ？」

そもそも束を狙ったＩＳ『アラクネ』自体がアメリカから強奪された機体らしい。

「束がそう言うならなら莫迦だよ、亡国企業は……。やり方は中途半端で、準備は疎か。徹底的に『悪』にもなれないくせに、手段だけは一人前」

「もともと第二次世界大戦中に生まれた秘密結社だからねー。うわ、くさっ！　組織自体は運営方針に則って幹部会と実働部隊の二つに別れてるみたいだけどぉ……。人間が五十年間も理念を護り続けられる訳ないからねー。実質、中途半端な才能の女が首領を勤めて何とか首の皮が繋がってる、とかいう状態なんじゃないかなー」

「それで私に無料でコアを提供してくれるって？　最高だね」

「こらこら、無料じゃないよ。束さんの人生を無駄に浪費したんだからね。そのＩＳコア人間一匹分の価値はあるよ。まあ、箒ちゃんにあげるけど」

……遭うたびに思うのだが、束は何というか生きるのが下手だ。

それは安息の地であったり、友人との他愛のないひと時であったり、過去の妹――私であったり……。常人以上に物事の価値を理解しているのに、本当に欲しがっているモノを彼女はけして手に入れる事ができない。

そして一度、大切だと思い込んでしまったモノはけして捨てられないのだ。

――例えば目覚めた直後の私、とか。

「……私は束のその価値観、好きじゃない」

自然、反論はきついものになる。しかし束は気を悪くした風もない。

「おぉうっ！　久し振りだね、その反論」

それどころか私が自己主張したことを喜んですらいる。

この様子だと以前の私は随分と口数が少なかったらしい。
そんなたいした意味もない会話を続けていると、束は思い出したように手を叩いた。
「ああ！　そうだ、箒ちゃん。束さんは今日、箒ちゃんのＩＳ学園入学を祝うためにここまで来たんだよ！」
「……そう」
「それで、入学祝いだけど箒ちゃん何か欲しいものある？」
「――――――」
束の言葉に思わず考え込んでしまった私は欲深いだろうか。
おそらく我が姉に用意できない物はこの地球上で数えるほどしかない。
何せ単身宇宙行動用のマルチフォーム・スーツを一人で開発するような人物なのだ。
妹が頼めば姉は何だって用意してくれるだろう。そう、例え記憶だったとしても……。
――だから私はこう言うのだ。
「別に何だっていいよ」
彼方が用意してくれる物なら文句など出る筈もない。
「そう、ならとびっきり上等なプレゼント、用意して見せるから」
――楽しみにしていてね。
束は来た時同様の満面の笑顔を浮かべた。

「そうだ」
「――――ん？」
「箒ちゃんさ、人が空を飛ぶ理由って考えた事ある？」
箒はさあ、と首をすくめる。
「――飛ぶ理由はなんとなく解るけどね。ただ、落ちる理由までは知らないよ。
だって私はまだ、片方しかやった事がないからさ」

「あはは、それ言い当て妙だよ。というより、穿ちすぎだね、過ぎた謙遜は嫌味だけど、軽すぎる自慢は逆に誰にも気づかれないよ」
「――そうだな」
「……ん？　それは肯定？　それとも否定？」
「……さあ、な」

1／篠ノ之箒

三月も終わりにさしかかった夜。気紛れに、私は散歩をする事にした。
外気は肌寒い。終電はとっくに過ぎていて、街は静まり返っていた。
雪を踏みしめ歩く。合格したＩＳ学園は都市部近くにある為、入学してしまえば向こう三年はお預けとなる感触だ。
「……永いな」
それは私にとって途方もない時間だ。この指先が凍えるような感触も目前を蔽う白い息も等しく過去に変えてしまうほどの変化。
この瞬間ですら、気を許せば何もかもが咳き込んで崩れ落ちてしまう気がする。
私がそんな感傷に浸る中、月光は青々と夜を浮き彫りにする。
全てが麻痺されたこの白い世界。月だけが生きているようで、ひどく、目が痛む。
「――ああ、病的だ」
人通りも温かみもない光景は写真みたいに人工的で、しかしだからこそ幻想的。
静かで、寒くて、廃れたこの街は不死の病を連想させる。
……間違いない。
――街とは私自身だ。

そんな真夜中でも歩けば人と出会った。
俯いて、ただ早足で進んでいく誰か。
自販機の前でぼんやりする誰か。
コンビニの明かりに集う、幾多もの誰か。
そこに何かしらの意味が在るのか探ってみたが、所詮部外者である私にはちっとも掴めなかった。当然か、そもそもこうして夜出歩くことすら意味はない。
（……私には目的がないのだから）
――とその時、視界の端にそれを見つけた。
思わず歩を止め、私はそちらの方へ振り返ってしまう。
それは一本の竹刀だった。立てかけてある建物から推測するに誰かが仕舞い忘れたのだろう。それとも朝の素振りの為にわざと置いてあるのだろうか。
少なくとも私が想像できるのはそこまでだ。けれどこれを見てしまえば思い出さずにはいられない。
かつて篠ノ之箒と呼ばれた少女の事を……。

――四年前。中学校へ進学間近だった篠ノ之箒という小学生は、交通事故にあって病院に運ばれた。自動車に撥ねられたらしい。
何でも剣道をやっていて、身体は丈夫だったらしいが、追突された影響で全身を骨折。頭も内臓もやられ、生きているのが不思議なくらいの大怪我だったそうだ。
本当ならそのまま安楽死させられてもおかしくないほどの重症。
実際、居たという両親も担当したという医師もそちらの方向で話を進めていたらしい。
しかし事実として彼女は生かされた。
諦めた日本という国家を押しのけて、篠ノ之束という天才が彼女を生かした。

その方法は明らかではない。けれどどう考えても正常なものではなかった筈だ。

何せ僅か一年足らずで彼女を目覚めさせ、その身体に何の後遺症も傷跡も残さなかったのだから。……ただ、それでも完全には救えなかった。

……目覚めた彼女は完全な『篠ノ之箒』ではなかったのだ。

簡単に言うと、私は目覚める以前の記憶が無い。これは過去の事柄が思い出せない、という記憶障害……俗にいう記憶喪失の一例だ。

記憶とは、脳が行なう銘記、保存、再生、再認の四つのシステムだという。

『銘記』は見た印象を情報として脳に書き込むこと。

『保存』はそれを録っておくこと。

『再生』は保存した情報を取り出す、つまりは思い出すこと。

『再認』は再生した情報が以前と同様か確認すること。

篠ノ之箒はこれらのプロセスの内、保存にダメージを負った。

故に現在の篠ノ之箒に過去は無い。

生活に必要な知識、理解力、身体機能は備わっている。

だけれど『私』には人間としての歴史が何一つ無い。

知人は姉だったという篠ノ之束ただ一人。

後は見た事もない、知ろうとも思えない有象無象の集まり。

一年間の空白は、篠ノ之箒を無にしてしまっていた。彼女の記憶と、彼女が持ちえていたであろう性格。その繋がりが絶望的なぐらいに断たれてしまっている。

私は以前の彼女のようには装えない。両親にも知人にも彼らの知っている篠ノ之箒としては触れ合えない。

それは我慢できない息苦しさで私を悩ませる。

まるで出来損ないだ。

私はちっとも生きていない。

生まれたばかりの赤子と同じ。何も知らないし、何も得ていない。

けれど決定的に違うのは私にはそれがおかしい事だと思えないこと

だ。
知らない事が悪だと私は知らない。
そこには感動もなければ生きているという実感も無い。
いつか、奇跡が起こって記憶が戻るとして――。
その時、私はどうなるんだろう。
この瞬間を生きている私は、必要ないのだろうか。
……不意に衝動に襲われる事がある。
それは理性や知性からくる感情じゃない。
衝動とは、感想のように自分の内側からやってくるものではなく、外側から襲いかかってくるものだ。たとえ本人がそれを拒んでいようとも、不意に襲いかかってくる暴力のような認識だ。

――生きて。

それが、このガランドウに飢えつけられたたった一つの認識。
愚かしいまでの渇望。この命令が私を今生に縛りつける。
逆らえる訳がない、抗える訳がない。
だって、それがたった一人の家族の願い、なのだから。
私を救おうとしてくれた姉の行動が無駄でなかった事の証明を篠ノ之箒は欲する。
……あぁ、そうか。
だとすれば私は、かつての私を羨んで、そして憎んでいるのかもしれない。
こんな中途半端な人生を強制した私自身を私は罰してやりたいのかもしれない。
――随分と時間が経った気がして顔をあげると、窓ガラスには雪で白くなった私が映っていた。……まるで滑稽なその姿に思わず笑ってしまう。
体温で溶け出した雪が顎をつたった。
別段寒くはない。――いや。

私はもとから何も感じてはいなかったのだ。
「……帰るか」

翌日、テレビを点けるとそこには一人の少年が映っていた。
中肉中背で普通を体現したような少年は何と、世界で始めてＩＳを動かしたらしい。
名前は――。
「……」
――名前は織斑一夏。
世界最強のＩＳ操縦者、織斑千冬の弟。
成る程、これが彼方のプレゼントか。
「……いーくん」

求めよ
さらば与えられん
――そういうことだ

2／織斑一夏

――イメージするのなら、黒金の鎧武者。

そいつはまさに悪平等の体現だ。
勝つでもなく負けるでもない、府抜けた精神が生み出した『完成された弱者』の姿。
不気味、不愉快、不平等、不誠実、不完全……。
そいつには表現するべき褒め言葉が一つも無い。
見つけられないではなく、存在しないのだ。

この世のどんな価値観を持ってしても肯定することなど到底不能。
そんな『歪』が俺に笑いかけていた。
その姿が酷く『誰か』を連想させて、言いようの無い悲しみが俺の内から産まれる。
まるで俺だけが知らない事実を知ったときのようだ。
ああ、やめてくれ。
お前は誰だ。いったい、何を望んでいるんだ。
一緒に行く事はできなくても、せめてあと少しは側にいてあげたかった。
でもそれは不可能だ。だって何も知らない俺では、立ち止まって事情を聞くことさえ、赦されなかったのだから。

◆

誰かの話し声がするので、仕方なく起きる事にした。
……瞼がかなり重い。まだ全然寝たりない証拠だ、これは……。
それでも活動しようとする俺はいじらしいな、なんて自己陶酔気味なことを思ってみれば、意識は簡単に眠気を手放した。……いや、流石に俺も初めてだぞ？　自分に引かれるなんて経験は……。
たしか俺は訓練から帰った後、我慢できなくてそのままベットに倒れこんだんだ。
ベットから身体を起こすと、やはりここはＩＳ学園の俺の部屋だった。まだ消灯の時間ではないのだろう。部屋を照らすライトの下で箒と鈴が何やら話し込んでいた。
箒は立ったまま壁にもたれかかっていて、その前でボストンバックを肩がけした鈴が仁王立ちしている。
箒は着替えたのか制服ではなく、漆黒色の着物をさらりと着流していた。
鈴はと言うと、ＩＳ学園の制服姿で、おそらく訓練の時別れたそのままの格好で部屋まできたのだろう。横目で時計を見る。……と

いうことは、箒と鈴はこうして二時間弱も話していたのだ。
それもおそらく友人同士がかわす他愛のない会話などではなく――。
「おはよう一夏」
俺が起きた事に気がついた鈴がじろりと一瞥をくれる。……何で俺を睨むんだよ、鈴。こっちは事情も解らない寝起きだぜ、飛び火なんて勘弁してくれ。
「わ、わるいな。眠っちまったみたいだ」
「……そんなの見ればわかるわよ。つまらない事言わないで」
きっぱりと言捨てて、鈴はポンとベットに腰掛ける。
「それより、一夏。起きたならお茶頂戴？　あたし喉かわいちゃった」
「は？　何で俺が……」
「いいから早く！　もう、唐変木！」
……どうしてそこまで言われなくちゃいけないのかは謎であるが、鈴は現在すごぶる機嫌が悪いらしい。身の危険を感じたので是非を問うのはやめておこうと思う。
情けないなんて言ってくれるな。鈴の背後で空間が揺らめいているんだ……。
空間の量子変換はＩＳ展開時に起こる現象だ。ある意味、機嫌のパロメーターでもあるので俺としては助かっている。まあ、相変らず理由は不明のままだが。
「箒は何か飲むか？」
「私はいい。すぐに寝るから」
そう言う箒は、どこかうんざりしている様だった。
俺が寝ている間にいったい何を話していたんだろうか。
それより寝るってまだ八時にもなってないぞ。
「なあ、鈴。どうせなら飯食いに行こうぜ？」
「……ま、まあ、そうね。たまには一夏の言う事も聞いてあげる！」
「箒は？」

「……」
「――仕方ない。私も行くよ」
「そうか。……どうした鈴？　そんな顔して」
「うるさいわね。行くわよ、一夏！」
なぜだか機嫌の悪くなった鈴に引っ張られ、俺は部屋を出た。後ろを確認すればちゃんと箒はついてきている。
「ああ、もう！　他の女を見るな！」
それにしても結局理由が解らないんだが、どうしてこんなに鈴は不機嫌なんだ？

俺こと織斑一夏がＩＳ学園に入学してもう、三週間近くが経つ。
ＩＳとは正式名称を『インフィニット・ストラトス』
元を宇宙空間での活動を想定して開発された飛行パワードスーツだ。
本来、女性にしか起動させる事のできないＩＳを俺はなぜか動かせた。
詳しい理由は解らない。
ただ、それが原因で現在、俺は自分以外に男子生徒がまったくいないここ、ＩＳ学園への召喚を余儀なくされていた。
――あー、織斑くんが手、繋いで歩いてる！
廊下を歩くたびに奇異の視線に晒される事にもいい加減なれてきていた。
けれど今日ばかりは事情が違う。
「……おい、鈴」
「なによ！　文句ある！？」
と、取り付く暇もない。自分も真っ赤になるくらい恥ずかしいくせになぜか鈴は俺の手を放そうとはしなかった。
「――まったく。羞恥心が足りないな、オオトリ」
「ファンよ！」

「……ケンカするなよ、お前ら」
——篠ノ之箒と凰鈴音。
ともに俺の幼馴染みだ。ただ、この二人に互いの面識は殆どない。幼馴染みだった時期が違うせいだ。箒は俺が小学四年生の時に引越して、鈴は俺が五年制の時に越してきた。
どちらも我が強い性格であまり愛称が良くない。……いや、正確には鈴が一方的に箒を敵視しているといったところか。おそらく箒のどうでも良さげな対応が鈴の神経を逆撫でしているのだ。
「……それで何が原因で口喧嘩なんかしてたんだよ」
いつもより少し遅い時間帯だったせいか、学食の人影は疎らだった。
箒が軽めの夕食を頼んでいたのを見習って俺も同じ物を、と言うとむすっとした鈴が私も、と結局三人とも同じ物を注文し、箒と鈴が同時に見つけた席に座る。
……こいつらなんだかんだで同じ事考えてるよな。
——と、左右の足を思いっきり踏まれた。ちなみに席順は右が箒、真ん中俺、左が鈴。はい、ごめんなさい。俺が悪かったです。……なんだかんだでポジションをとられた俺に最早人権などありはしない。余計な事は考えず、ここは事態の収拾に努めるべきだろう。
「……別にただ、部屋代わって話をしてただけよ。そしたら篠ノ之さんが嫌だって」
魚を器用に解しながら、鈴がぼやく。
「——おい、私に責任をなすりつけるなよ。誰も嫌だなんて言ってない。ただ、部屋を代わるのは面倒だから一夏を持っていけって言ったんだ」
すかさず箒の訂正が入った。——て、なんだと？
「おい、箒。俺を持ってけってどう言うことだよ？」
「だから、オオトリは一夏と一緒の部屋がいいんだとさ。なら、私をわざわざ移動させなくても一夏を自分の部屋に住まわせればいいだろうって言ってるんだ」

……ちょっと待て。お前ら俺が寝ている側で俺の今後の身の振りを二時間も話し合ってたのか。起こせよ、というより勝手に決めるなよ。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！　誤解招くような事言わないで！　あたしは篠ノ之さんも男と同室なんて嫌かなって思ったから声をかけたのよ！　気を使うし、のんびりできないし！　……そ、その辺、あたしは平気だから変わってあげようかなって思ったの」

「だからそれが余計なお世話だって言ってるだろう。私は別に構わないって言ってるのにさっきからオオトリは『あたしがこっちに住む』の一点張りなんだ。一夏も何か言ってくれ。だいたい、寮住まいするくせにあんな少量で荷物がすむ訳なんかあるもんか。どうせ一夏に買出しを手伝わせるつもりなら最初から一緒に住めばいいだろう。私はな、物持ちがいいわけじゃないが、それでも引越しとなればそれなりに時間のかかるくらいは持ち物があるんだよ。やっと整理して一段落着いたのにまたそんな面倒くさい真似ができるか」

――うん、確かに一理あるな。俺も二度手間は嫌だ。ただ、俺が買い物に付き合ったり部屋を代わったりするのは別に構わないんだな箒は……。

何か寂しいぞ。

まあ、それにしてもだいたいの事情は掴めた。

「すまん鈴。俺もできればこのままでいたいんだが」

俺の言葉に鈴は唖然とした表情を浮かべた。

まるで信じられない物を見たような顔だ。

「……なんで」

「そりゃお前、俺だって面倒なのは勘弁だよ」

そう言うと鈴はフルフルと震えはじめた。……やべ、地雷踏んだかもしれん。

いや、しかし仕方ないだろう。こっちだって色々事情があるんだ。だいたいまず、部屋を代えたいといくら鈴が言っても寮長の千冬姉や山田先生がはいそうですか、と肯く訳がないんだ。その理由はい

まいちよく解らないが、仮に鈴が部屋を代える事になれば相部屋になっている人がまた苦労するだろう。
誰かに迷惑をかけるのはよくない。
そう思っての判断だったのだが、鈴にはいま一つ上手く伝わってはいないようだった。
「この莫迦一夏――！」
振りかぶられた手に思わず身構えた。
――その時、
「――はあ、仕方ないな」
本当に迷惑そうに箒が折れた。
「えっ？　……そ、それってあたしと部屋を代わってくれるってこと？」
一転、鈴はテーブルに両手をついて箒へと迫る。
「勘違いするなよ。別に部屋を代わる訳じゃない」
「……じゃあ、どういう意味よ！」
俺もよく解らなかった。箒は何に対して妥協したんだ。――と、なぜだか急に嫌な汗が滲んできた。これまで少ない間だったが、俺は箒と寝食を共にしてきた。だから何となくではあるが、こいつの人となりは理解できているのだ。そんな俺の理性が訴えている。
この状況は不味い、と。
「あ、あのさ、箒――」
「部屋に留まるのは構わない。ただ、ベットは一夏のを使え」
「……ふぇ？」
……遅かった。
箒の発言に鈴はその動きを止めた。次の瞬間には湯沸し機みたいに顔を真っ赤にしている。いったい、何を考えてるんだか。……何を考えてるんだ？
「ば、莫迦じゃないの！？　そんな事できる訳ないじゃない！！」
「なら、諦めてくれ。私は別に誰と相部屋でも構わないし、誰が何をしてても興味ないけど、あの場所を動くのは嫌だし、面倒だ。後

は一夏とオオトリで相談して決めてくれ」
そうして箒は箸を置くと立ち上がった。
「先に部屋に戻る。そこで固まってるやつはお前が何とかしろ、一夏」
そのまま躊躇する事もなく、箒は歩いていってしまう。
――相変らず、協調性の欠片もないな。自分の撒いた種くらい刈り取っていってほしいんだが、まったく……。
けれどこれも一種の信頼のカタチなのだと思うと不思議と悪い気分はしなかった。
なんだかんだ言っても信用されているのだから。
「――それで、どうすっかな」
この微動だにしなくなった俺のセカンド幼馴染み。
まあ、真っ赤になって俯く鈴が可愛くないと言えば嘘になる。
役得と割り切ってしばし俺はその表情を観察していることにした。

結局、鈴が再始動したのはそれから五分ほど経ってからだった。
「も、もういい！　もういいから!!　その話は終わり！」
事態の収拾をはかろうとした俺に対して鈴が言った言葉である。
女性は飽きっぽいものだと知り合いの行動から学んではいたが、また随分と急だ。
「本当にいいのか？」
「いいのよ！　だからもう掘り返さないで！」
そう言われてしまえば、後はもうなんともできん。俺は鈴が食い終わるのを待って部屋に戻ることにする。……そういう趣旨を伝えると、なぜか鈴はデザートが食べたいと言い出した。
「いいから、一夏にもあげるから少し付き合いなさい」
別にモノに釣られた訳ではないのだが、部屋に帰ってもやる事など特にない。
ということで俺は食堂に残り、鈴の話に付き合うことにした。

「それにしてもビックリするような事を平然と言うわよね、篠ノ之さんって」
「まあ、箒だからな……」
「――その言葉だけで私が知らない三週間がなんとなく予想ついちゃうのが不思議よね。……ところで話は変わるけど。一夏さ、なんでクラス代表になんかなったの？」
また、唐突な話題転換だな。
……そう言いつつもやっぱり尋ねてきたかと思う俺がいた。
「何か悪いのか？」
「いや、だってさ。データ見たけど一夏、篠ノ之さんにもセシリア・オルコットって人にも試合負けたじゃん。それなのに勝者二名が代表辞退っておかしくない？　だから少し気になってたの」
鈴はつい先日、編入したばかりなのによく知っている。
確かに一週間ほど前、俺はクラス代表の座を賭けて箒とセシリアの二人と戦った。
結果は鈴の言うとおり俺の惨敗。二戦二敗の黒星だった。
けれどクラス代表になったのは俺だ。
それにはちゃんと理由がある。ただ、他のクラスの人間には惰性と慢性と話題性で俺が無理矢理その役割に押し込まれた、と見えてもおかしくはない。何せセシリアはともかくこの六年ですっかり人が変わってしまった俺のファースト幼馴染みはよく誤解されやすい態度をとるのだ。鈴の態度はその弊害と言ってもよかった。
「……まあ、自分でも役不足っていうのはよく解ってるんだ。でもさ、辞められないって言うか、辞めたくないって言えばいいのか。とにかく、俺はクラス代表でいたいんだよ」
「ふうん。けどさ、一夏解ってる？　一夏の立場って、そんなに良い訳じゃないんだよ。結果を出さないといけないの。それも一夏は特に求められる。世界で唯一の可能性だからあの織斑千冬の弟だから、何か特別なんだって思われてる。それに答えようとして一夏がどんなに頑張ってもさ、誰もがそれ以上を要求してくる世界に、そ

んな場所に一夏はいるんだよ？」
鈴はどこまでも真っ直ぐだ。
誤魔化す素振りすらみせずに、淡々と言葉を紡いでいる。
言葉の内には滲み出るやさしさがあった。
けれど同時にそれは、無智な俺を責めているようでもあった。
「そんな一夏の立場を理解していてもあたしは手を抜かない。いや、抜けないんだよ？　まさかと思うけど、昔好（むかしよしみ）だからって手加減してくれるなんて思ってないでしょ？」
「――侮るなよ、鈴。俺はそこまで腑抜けてない」
「……そう、なら努力することね。お昼ご飯の時、ＩＳの操縦見てあげるって言ったけどやっぱりあれ取り消し。一夏のやり方で、一夏の戦い方でどこまで行けるか試してみればいい。――だから負けないようにね」
少なくともあたしと当たるまでは、と最後に勝者の少し余裕なんてものを見せ付けてくれた後、鈴は食器を持って立ち上がる。
「ああ、それと部屋代わりたいっていう話はやっぱりなし！　感謝してよね」
「それに関してはいまだに理由が解らないんだが？」
「……はあ、もう病気よね。その朴念仁さって。やめた、本当は約束の話しようと想ったけどまた今度ね」
「約束？」
「ほら、予想通り。……いつか聞くからきっちり考えておきなさい」
じゃあまた明日ね。
そう言って鈴は歩いていく。

おやすみと声をかける。
「ばーか」
――と、帰ってきた。

『頑張る』と『努力する』には明確な違いがある。

『頑張れ』と言うのは一種の押し付けだ。
頑張れ、頑張るよ、頑張って、頑張った――。
そのどれもが他人行儀。自分の事なのに、親しい人の事なのに、まるで関係のない様な言い方には使い古された言葉特有の『安さ』がある。
けれど何の感情も抱かせない言葉には価値がない。
『努力する』は自己暗示に近い。
そこには目的を達成する為の力強い欲求がある。
そしてこれは常に『一』しか示さない。
誰もが当事者である事ができる言葉。
それでいてこの二つは観測する時のみ意味が反転する言葉でもある。
『頑張る』は個人の観点だが、『努力した』は他者の評価だ。
それはつまり――。
「鈴も知ってたのか……」
食堂からの帰り道。行きは三人、帰りは一人。
自動販売機でジュースを買った。昔からある炭酸飲料水。
このプルタブを開ける音にも匂いにも、もうすっかり慣れ親しんだ。
けれどそれを明確に自覚したのはいつだったろうか。
――いつから俺はプルタブを開ける事に『頑張り』も『努力』も必要としなくなったのだろうか。きっとそれは誰にも解らない。
知らない内に境界は曖昧になり、やがて意味の無い事実に代わってしまった。
鈴が言いたかったのはたぶん、そう言うことなんだろう。
いつのまにか中途半端になってしまえば、もう『争う』なんて事はできない。
競い合う事はできるだろう。
けれどそこに威信を賭けた本気の闘争は生まれる事はない。
それを鈴は危惧しているのだと思う。

「何が莫迦だよ、ばーか」
小学校、中学校と共に過したがよくもそこまで気が利くもんだ。
……ふいに、見ていた夢を思い出した。

――黒金の鎧武者。
――完成された弱者。
――笑いかけた『歪』

理由は解らないまでもそいつは確かに俺に何かを伝えようとしていた。
なんで立ち止まって理由を聞く事が赦されなかったのか。
……そんなルール、誰が定めた？
ああ、結局俺は夢の中でも逃げたのか。
――衝動的に。
「……」
そこまで考えて、自分はこんな詩的な人間だったろうかと首を傾げた。
「――まったく、お前はいつでも解らないだな、『いっくん』」
部屋に入ると先に戻っていた箒が、目覚めた時と同じ場所にもたれかかっていた。
彼女は俺の顔を見ると溜息を吐いて、首を振る。
まるで言外に駄目だと言われた気がした。
「――言葉には力がある。その瞬間、何気なく呟いた一言にさえ、世界は強制的に意味を持たせようとする。口に出せばもう取り返しなんかつかない。例え本人が意識しなくてもそれは既に誓約へと変わってしまうからだ。その点をオオトリはよく理解している。あれは間違いなく本気だぞ、一夏。次のクラス対抗戦――」
――必ず鳳（オオトリ）が来る。
爪を研ぎ澄ました天空の覇者が、織斑（えもの）一夏を狩りとろうと待ち構えてる。

それは確定だった。
過程ではない、箒は既に俺の相手が鈴だと確信しているようだった。
「……箒」
ふん、と息をついて箒は視線を泳がせている。
……そんな事、言われなくても知ってたさ。

「――盗み聞きなんて趣味悪いぞ」
「……馬に蹴られて死ね、莫迦」

不貞腐れたようにお互いベットに倒れた。

◆

空には数え切れない数の星々が瞬いている。
名前も知らないそれらは夢見のようであり現実だ。
「……違うか」

――それは無限であり、夢幻であり、無間である。

普遍性を無くし、意味を剥奪され、それらは無価値と成り果てる。
けれどそれは確かにそこにあるのだ。
「星は見えなくても光はある、きっと」

願い、信じて――。
あの空で輝くのだから。

3／篠ノ之束（前）

――うなじの骨がシン、と軋む。

震えは外気の寒さからくるものなのか、内気の寒さからくるものなのか。

判別のつかないそれを放っておいて、篠ノ之束は悠然と歩を進めた。

校舎内に人の気配はない。

午前二時、真新しい電光掲示板がＩＳ学園の廊下を照らしている。白色の壁は掲示板の光で照らされて、廊下の奥まで続いて見えた。闇を完全に払拭する人工の光は人間味がなく、払拭するべき闇より不気味だった。

束はカードチェックの玄関を素通りして、校舎内に足を踏み入れる。世界有数の精度を誇る防犯設備は、そのすべてが例外なく、無力化されていた。

「ん……ん、ん～」

鼻歌を奏でながら歩く。

子供のように、天使のように。

けれどここに鏡があれば、きっとけだるい目をした人物がそこにいる。

何事にも関心がない、呆としたその瞳。

束は突き当たりに設置されていた階段を上り始めた。

かつん、かつん――。

静かな足音と共に、束の周囲の世界が上がっていく。

わずかな時間ではあるが、校舎は巨大な箱だった。

屋上を目指す束以外、誰もいない密室。今この外で何が起きていようとも彼女には何の関わりもなく、関わりようもない。

その優越が空虚な筈の束の心にわずかにだけ染み込んだ。

ここだけが、今は彼女が実感するべき世界。

その行き先は、やはり電光掲示板が照らす屋上への勝手口。

そこを開けば――

「シュレディンガーの猫を知っているか？」

――織斑千冬が街の夜景を背後に立っていた。

「知ってるよ、フォン・ノイマンの量子力学の統計的方法を『不完全』と主張した博士の有名なパラドックスだよね、ちーちゃん」

ＩＳ学園の屋上は欧州を思わせる石畳が計画的に配置されたカフェテラスのような造りだった。余程自信があるのか、それとも何も考えていないのか、おそらく前者ではあろう女子学生さえ簡単に飛び降りることができそうな柵に束は腰掛けた。

ぶらぶらと足を揺らす。視界の右端には月の光を反射させる海が、左には人工の輝きを放つ街が、そして目前には親友――千冬の姿があった。

「そう、この矛盾を許さない世界（タナトス）で容易く夢幻（ヒプノス）を作り出す、浅ましくも壮大な実験さ」

「――箱の中に猫と放射性物質、ガイガーカウンターと青酸ガス発生装置をそれぞれ一台入れておく。もし、箱の中のラジウムがアルファ電子を出せばガイガーカウンターが反応してその先についた青酸ガス発生装置が作動、猫は死ぬ。けれどもし、ラジウムから電子が出なければ、装置は作動せず猫は死なない。一定時間経過後、密室と化した箱を開けた時、果たして猫は生きているのか――。そんなところだよね」

落ちればただではすまないその場所でも束の表情は変わることはない。

「ああ、この実験の要点は猫の生死をアルファ粒子が出たかどうかのみによって決定することにある。これを仮定とすると粒子は原子核のアルファ崩壊にともなって放出される。この時、例えば箱に入ったラジウムが一時間以内に崩壊して粒子を放出する可能性は思考する限りどんな方向性を持っても絶対的に約半分、つまり５０％でしか明言ができない。それは猫が死ぬ状況と生き延びる状況が１：

1で重なり合っているからだ。経験上、認識できているのにも関わらず、事実を確認する事が人間にはできない。それが、この理論の抱える最大の矛盾であり同時に魅力でもある」

「――観測結果に観測者の積極的な役割を取り入れるべき、それが統計的方法の示す方針だからね。つまり量子的な糸と観測装置まで含めた全糸の状態は観測されない限りもつれ合ったままの関数で記述される。……なら、観測装置自体を箱で囲い、観測できないようにしてしまえばいい。放射性原子の状態は『放射線を放出した』『放射線を放出しない』の二つで重ね合わせる事はできても、実験体である猫は『重ね合わせる』なんて事できないんだから。まあ、もっともそれがわたしの目指す理想でもあるんだけどね」

周囲の建物よりも高いＩＳ学園の屋上からの眺めは、綺麗というよりは心細かった。

暗い、光の届かない深海めいた夜の街は、たしかに美しい。

けれどその夜空は町並みと対する完全な闇だ。

――月は穴。

夜空という黒い画用紙に穿たれた、一際大きな穴としか見えない。

だから本当はアレは太陽の鏡などではなく、あちら側の風景が覗いているだけなのだ、と束のもう、表情も憶えていない両親達は言っていた。たしか家は御釈迦な幻想を祭る事で金を得る職業だったと彼女は記憶している。

「もし猫の『死んでいる』事象と『生きている』事象とを同時に観測できれば――それは私達、いやわたしの、篠ノ之束の起源を知ることに繋がるかも知れない」

「そしてインフィニット・ストラトスはまた一つ究極へと近付く訳だ。……でもな、束。シュレディンガーの猫は、状況見分けの原理と矛盾する。例えお前が観測できたとしても人間はそれを現実と受け入れる事はできない。……それほどのキャパシティ、六年前以上の衝撃を持ってしても創れるかどうか――。……いや、待て、まさかお前は」

そこで初めて束は千冬を視た。――漆黒のスーツに身を包んだその姿は、夜の闇全てを引き連れているかのような静かな威厳を他者に抱かせる。しかしそれはあくまで他者に、と限定するべきだ。少なくとも束はそんな測定不能なモノをこの身内から感じたことなどありはしないのだから。

「――うん。わたしはもう、観測してる。けどね、それはちーちゃんの考えていたような面白いものなんかじゃなかった。……久し振りだよ。悲しくて、辛くて、切ない、なんて想いを抱いたのは」

「――いったい何があったんだ、お前達は」

瞬間、春の夜に吹き上げる風が、一度強くうなりをあげた。

「――――――」

その突風の中、呟いた束は消える。

忽然と。突然と。

「……」

千冬は息を吐き出して、踵を返した。

「――――まさかな」

その口元から洩れる声は、潮風に流れて消える。

――解らないよ。

久し振りに再開した親友は最後に泣きたいような笑顔を浮かべていた。

◆

――もしも、自分の認識が世界の全てだというのなら。

確かに今、世界は変革の時を迎えようとしている。

恐らくは永劫であり、おしむらくは仮初めの変革。

その静けさはどんな寒さより心臓を締め付けて――

――痛いくらいだ。

◆

今日は月が奇麗だ。
そんな夜は不思議な事がよく起こる。
曰く、月は異界の門だという。その、神代より魔術と女と死を孕んできた月を背にしてひとつ、ＩＳが浮かんでいた。
その周囲に七体のヒトガタを飛行させて。

寂滅為楽／１

目覚めて三年、ある一時を除けば篠ノ之箒は常に独りだった。
それに疑問を持ったこともなければ後悔したこともない。
……なにせ、初めから知らなかったのだから。
異常とは自身の不幸を認識できないものをいう。
ならば篠ノ之箒は間違いなく異常で異端なのだ。

――共同生活というのを私は知らない。

速達で送られてきた私物を手に私は寮内を闊歩している。
目的地は一応、明確だ。
一年生寮の一〇二五室、それが私に割り当てられた部屋の識別番号となる。
ＩＳ学園は複数人で一つの部屋を使用するきまりとなっていた。
それは篠ノ之もまた、例外ではなく、まだ顔も知らない隣人のことを考えると少し頭が痛い。
今日をもって篠ノ之箒は高校一年生となる。
産まれてはじめて見る同級生というヤツはやはり違和感がいなめない。私には彼女達、クラスメイトというものが近親感を想像させない未知の存在であった為だろう。
何人かこちら側の人間もいたが、それでもなお、彼女達は純粋だ

った。
あの空間には居にくい。ただ黙って座っているだけのはずなのに、自分はどうしようもない異物なのだと理解させられる。
私には彼女達が笑う理由が解らない。
私には彼女達が驚く理由が解らない。
……何も知らない。たった一年のしかし致命的な欠落は私が普通に戻ることを赦してはくれない。学歴など所詮無意味だと思っていた。だから一番楽な道を私は選んだ。
けれど、それは失敗だったのかもしれない、
――窓の外に目を向ければ蜘蛛の巣にかかった一匹の蝶が在った。
不意に誰かの顔が思い出された。
ぎり、と私は奥歯を噛む。
――人はけして平等なんかじゃない。生まれついて身体の丈夫な者もいれば頭脳に優れている者もいる。マルチな才能を持つ者がいれば究極の一転突破型がいる。
スタートラインが同じだなんて嘘だ。
誰もが皆、自分だけの現実を持つ以上、そこには明確な優劣が生まれている。
圧倒的な才能を持つ天才はいつだって凡才を食い潰すのだ。
私は『篠ノ之箒』の為に用意されたプレゼントの事を思い出していた。
織斑一夏。
束から名前だけは聞かされていた私の幼馴染み。愛称はいーくん。
身長は高めで顔立ちは整っている部類だ。一日、他人との会話を拝聴していたが、どうやったらあんな人格が育つのか、彼はこの女尊男卑の世に特に疑問を持たない男子らしい。
フェミニストという訳ではない。
ただ、彼は拘っていないだけなのだ。

……成る程、束が執心する訳である。世界を変えた所で対して大きな影響を受けない、自身の気に入った人間。目掛けの弟であり、唯一の異性。

彼が極力苦しまないのなら、束は一切躊躇することなく変革を行うだろう。

既に終了しているのをみれば、その事実に辿り着くのは簡単だった。

……そうやって玩ばれた結果があの織斑一夏ということにおそらく篠ノ之束は永遠に気づかない。あれが普通だと？

嗤わせる。あんな、自身がどんな立場に置かれたのかも自覚していない人間が、普通である訳がない。半日前にあった授業風景を思い浮かべる。

織斑一夏は何も知らなかった。

比喩ではなく、本当に彼は何も自覚していない。

束に与えられた世界で唯一ＩＳを使える男、という意味もインフィニット・ストラトスという『兵器』についても彼は何も知らされてはいなかったのだ。

徹底された情報統制がどこかで行われている。

織斑一夏は束だけの傀儡では無いということだ。

……真の『人間』とは、どういう存在だろう。

知性があってけれどそれでも理窟ではなく感情を優先する――そういうモノを『人間』と呼ぶのならば、織斑一夏は確かに『人間』だろう。

しかし彼には徹底的に欠けるものがある。

それは……。

「――ん、ここか」

気づけば割り振られた部屋の前に来ていた。

パスをかざすとガチャリという音とともに扉が開く。

部屋に入ると、まず視界に映ったのは大きめのベット。同じ材質とサイズのものが二つ置いてある。机も同様だ。完全に規格化され

た無個性な部屋は私の性に合っていた。
ただ、これから来るだろう同室者にとってそれが喜ばしい事かは解らないが。
こういうものは早い者勝ちだと束が嬉しそうに言っていた事を思い出した私は入室してすぐのベットにボストンバックを投げた。
随分と柔らかそうなベットだ。
睡眠は嫌いではない。
言い争いになった場合は力で屈服させることを決め、まずはシャワーを浴びようともう一つのバックから私は代えの私服を取り出した。
なんと言うこともない、ただの和服だ。
篠ノ之箒は日本由来の物を特に好んだという。
私の場合は好みではなく惰性だが、そんな事はどうでもよかった。

シャワーノズルから温めのお湯が噴き出す。水滴は肌に当たっては弾け、身体のラインをなぞるように滑り落ちていく。このシミ一つない十代の少女の白く細いしなやかな身体が私のモノになってもう、三年が経過する。
ダメージを受けた記憶は治る気配すら見せない。
束は『記憶』の欠落はそこまで致命的ではなかったと言っていた。
――なぜ戻らないのか、解らない。
これは天才を持って理解不能と呼ばせた現象なのだ。
なら私が考えても仕方のないことだと思う。
（……いや）
もしかすれば篠ノ之箒は戻らないほうが都合がいいと思っているのではないだろうか。根底の疑問として、私は自身がどうして事故に合ったのかを知らない。
当時、政府の監視下に置かれていた私はなぜ車に撥ねられたのだ

ろうか。
どうしてすぐに病院へと運ばれたのだろうか。
それを考えると頭が痛くなる。
ギリギリとナニカが私を圧迫する。
無気力、無関心、無作法、無責任、無感動――。
そうして呆となって全てがどうでもよくなった。
温めのお湯は好きだ。
熱くもなく冷たくもないこの曖昧な温度は同じ様に曖昧な篠ノ之箒を受け入れる。
……そこには否定も肯定もない。
あるのは惰性と、慢性と――。
「――ああ。どうりで」
そこで織斑一夏に抱く感情に見当がついた。
アレは私と同類なんだ。
――その時、部屋の扉が開く音が聞えた。
……どうやら同室者がやって来たらしい。

「誰かいるのか？」

白々しいと思いながらも声を上げて私は自己を主張する。
挨拶が肝心だと束は言っていた。当の本人にそんな経験があるのかは疑問の残るところだが間違ってはいない。
「すまない、少し待て」
大雑把ではあるが髪を拭いて、私は手早く着物を身につけた。漆黒の着物に紅帯。私の数少ない拘りだ。多少の蒸れは気にはならない。ただ、髪を疎かにすると束は怒る。
だから後で手入れをしなければいけない。
面倒だとは思いつつも、従ってしまうのは、やはり私と束が姉妹だからだろうか。
そうして洗面所を出た私が見たのは、呆然とする織斑一夏の姿だ

った。
「なんだ、いーくんか」
呟きは彼を覚醒させるに至ったのか、瞼をパチクリさせた後、
「――え、篠ノ之箒？」
そんな当たり前のことをさも驚きのように彼は言った。

◆

どうやら聞くところによれば篠ノ之箒は極度の人間嫌いだったらしい。子供のころからどうしても他者と強調しあうことができなかった。――つまり好きあえなかった。
救いがない事に私もその人間なので、自分さえ彼女は嫌いだったようだ。
その名残は今現在も自身の貌に刻まれたままだ。
常に不機嫌そうに見える目元。
それが彼女の残したものの一つであり――。
そんなんだから、私は人に話しかけられてもあまり親切に相手ができない。
「なあ……いつまで怒ってるんだよ」
「――別に、そんなつもりじゃない」
「顔が不機嫌そうじゃん」
「……私の責任なのか、それ？」
――別に嫌いだから憎んでいる訳でもないのだが、まわりはそう納得しているようだ。私のそういった性質はすでに知れ渡っているのか、声をかける者はいない。
まあ、理由がそれだけでないことは知っている。それに私も静かな環境のほうが好ましいので、このままでも一向に構わないと思っていた。
「箒、これうまいな」
「……そうだな」

けれど、それでも理想は完璧ではないらしい。
入学式翌日の朝八時。右を見ても左を見ても女子しかいない一年生寮の食堂で織斑一夏は周囲にまったく遠慮することなく、和食セットの鮭をつまんでいた。
昨日はたかだか部屋が同室だったくらいで結構な動揺を見せていたが、こうして改めると意外と女慣れしているらしい。それとも自棄でも起こしているのだろうか。
「ねえねえ、彼が噂の男子だって～」
「なんでも千冬お姉様の弟らしいわよ」
「えー、姉弟揃ってＩＳ操縦者かぁ。やっぱり彼も強いのかな？」
……たぶん両方だろう。昨日からそうだが、周囲の女子が一定の距離を保ちつつも興味有り気でこちらを窺っている。関係のないはずの私でさえ落ち着かないのだから当事者にしてみれば気狂いを起こしても不思議ではない。
「お、織斑くん、隣いいかな？」
唐突に声が聞こえた。
視線の先には朝食のトレーを持った女子が三名、一夏の反応を待ちわびるように立っていた。確か全員が同じクラス。けれど私は名前を覚えてはいない。
「ああ、別にいいけど？」
一夏の反応に声をかけた女子の一人は安堵の溜息を漏らし、後ろの二人は小さくガッツポーズをとっていた。まわりからは妙なざわめきが聞こえる。
「――外そうか？」
「えっ、ううん。いいよ、全然！」
どうにも居心地が悪いのでそう一夏に話しかけたつもりだったのだが、タイミングを間違えたのか女子に返事をされてしまった。
こうなっては立ち去れない。

三人組は既にどう座るか手打ち済みなのか、非常にスムーズに席に着いた。六人掛けのテーブルはこれであと一人分を残してすべてが埋まったことになる。

「うわ、織斑くんって朝すごい食べるんだ！」

「お、男の子だね」

「俺は夜少なめに取るタイプだから、朝たくさん取らないと色々きついんだよ」

――意外なことに私と束も同じタイプだ。曰く、長年の人体実験の結果から体型と健康維持にもっとも無駄がない方式らしい。被験者はちーちゃんと言うのだからこれは信憑性がある。それを一夏も真似ているのだろう。

話題はそのまま食事の話に移った。

一夏が女子三人の食事量の少なさを指摘したり、おいしい間食（注・お菓子）の話題を女子が振ったり、聴いているだけなら私も飽きなかった。

「そういえば篠ノ之さんって織斑くんと仲がいいの？　一緒にご飯も食べてるし……」

「まさか、付き合ってるとか？」

それは丁度中継ぎのつもりで口にした冗談のようなモノだったのだと思う。

尋ねた方も尋ねられた方にも真面目さなんてこれっぽっちもなかったはずで、当然私は場を濁すように無難なことを言えば何も問題なんてなかった。

それくらいのユーモアは持ち合わせているつもりで、けれど実際、口を開いたところで私は言葉に詰まった。

――私にとって織斑一夏とはなんだ？

幼馴染みだろうか。

違う。それは篠ノ之箒の立場であって私のものではない。

ならば友達だろうか。
これも違う。私に友人などいない。
少なくとも今現在、織斑一夏は篠ノ之箒の友達ではない。
それなら家族だろうか。
……違う。篠ノ之箒にそんな事実はないし、私の家族は束だけだ。
本当に彼はいったい何なのだろう。
そこに引かれた曖昧な境界線を私は視た。
――零と一の狭間。
織斑一夏はどこまでも篠ノ之箒に近く、そして私には遠い。
在りえない関係、在りえない状況、在りえない事実――。
どれがいったい本当なのだろうか。
黙ってしまった私を見て一夏はしまったと表情を硬くした。
「……はあ。なに黙ってんだよ、箒。幼馴染みだろう、俺達は」
「――そうだな。うん、そうだ」
どうやらまだ私が不機嫌だと勘違いしたらしい。
なら都合がいい。
「……織斑、私は先に行くから」
「ん？　……ああ。また後でな」
境界線は一夏にも理解できたらしい。
食器をトレーの上に重ねて私は立ち上がった。
……大丈夫。
足取りはしっかりしている。
ただ、入り口で誰かとぶつかった。
「ん、なんだ篠ノ之か。どうした？」
「――いえ、別に」
まったく問題なんてない。
『ちーちゃん』は知っている。
けれど『織斑千冬』を私は知らない。

予定よりも大分早く来てしまった。
始業前、さらに現在が朝食時ということもあり、教室の人影は疎らだ。
名前も知らない生徒達はどれもこれもがひたすら机に向かって書き物をしており、誰も私などに気づいてはいないようだった。
それはそれで在り難い。なんだかとても頭が痛いのだ。
このまま朝礼まで何もせず呆として過すのも悪くないだろう。
「ちょっとよろしくて？」
「――――え？」
けれどそんな些細な我侭さえ私は許してはもらえないようだった。
話しかけてきた相手は、地毛の金髪が鮮やかな女子だった。白人特有の透き通った藍色の瞳が、ややつり上がった状態で私を見ていた。
わずかにロールのかかった髪、汚れ一つ見当たらない制服、目立ち過ぎない程度の自己主張がされた化粧――そして無駄のない身体に洗礼された動作。
成る程、そのどれもが不自然なまでの自然を生み出している。
……いかにも今時の女性といった振る舞いだ。
まるで男子のような女子と言うのはもう珍しくない。
この世界では既に片割れは不要とみなされているのだから。
可笑しな話だ。けれど私には関係のない話でもある。
「訊いてます？」
「――ああ、私に何か？」
そう答えると女子は少し目を細めた。まるで睨みつけているようで、それでいてどこか推し量っている――。そういう眼だった。
「――彼方、わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるのでなくて？」
「……悪いな。私はアンタの名前を知らない」
「まあ、わたくしを知らない？　このセシリア・オルコットを？
イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを？」

「――ああ」
そう言えば昨日、そんなことを長々と話しているのが一人いたが、それはどうやら彼女だったらしい。しかし――。
「その入試主席が私に何のようだ？」
「少し質問がありますの。よろしいかしら？」
「――別に、構わない」
……正直、この手合いはあまり得意ではない。
他人の領域に踏み込んでくる者は得てして粗暴だ。
無軌道な力の放出など暴力でしかないのに――。
そんなことも知らない。
「そう。……私が訊きたいことは一つです」
セシリア・オルコットがそこまで堕ちていないのを祈るばかりだ。
「――彼方、織斑一夏の味方ですの？」
「……」
「失礼、少し穿ち過ぎでしたわね。『篠ノ之』は織斑一夏の味方ですかと訊いています」
「――ああ、成る程」
……どうやら彼女は利口な部類らしい。
一方的な排他の前に力の上下関係を探るなんて普通の莫迦はまずやらない。
自身の実力に慢心していない証拠だ。
「少なくとも私は違うな」
ただ、敵対するつもりもない。
あれは現在、どんな位置にもいない。
「他のことまでは知らない。――誰かは勝手に考えろ」
「ええ、それだけ訊ければ結構です。――それにしても以外ですわ。彼方、幼馴染みではなくて？」
「よく調べてるもんだな。……ああ、それでもだ。それでも私は違

う」
「……まあ、事情は知りませんわ。聞こうとも思いません」
「そういうアンタはどうしてそんなに嫌う？」
「決まってますわ。気に喰わないからです。……大体、ＩＳについて何も知らないくせによくもこの学園に入れたものですわ。唯一男でＩＳを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけれど、期待はずれもいいとこ。精々姉の名に傷を付ける前にとっと居なくなってほしいものです」
……辛辣だ。しかし正論でもある。
「――あれは一夏以外にも要因がある。一人だけを責めるのは筋違いじゃないか？」
「それでもあれは在り得ませんわ。良い機会だからと声をかけてみましたけど、人の話は真面目に聞かない。質問したと思えば知性を疑うような馬鹿さ加減。日本人はこんなにも阿呆なのかと一瞬、間違った評価を下しそうになりましたわ」
だから先程の態度ということか。
それは流石に――私も同意してしまいそうだ。
「――ただ、彼方のことはそこまで思ってないですわ、篠ノ之さん？　やはり博士の妹、聡明ですわね。……それで話は変わりますが、彼方入試はどうだったんですの？」
「……どういうことだ？」
そこで少し、オルコットは悔しそうな表情を浮かべた。
「……いえ。織斑一夏が入試で教官のＩＳを倒したことを聞きまして……博士の妹である彼方はどうだったのか、気になったんです」
「――別に、引き分けだ」
「聞いたところ、篠ノ之箒はどの国家にも所属せず専用機を保持しているらしいですね。それでもなお、勝てないほど、彼方は弱いのですか？」
「……相性が悪かっただけだ」
「――そう、ならこれ以上は聞きません。ああ、時間も丁度いいで

すね。それではまた、篠ノ之箒さん？」
オルコットの目線の先には歩いてくる一夏の姿があった。
まだ、こちらには気づいていないようで女子達と話している。
気を逸らした刹那、振り向けば既に彼女は自身の席へと歩を進めていた。
「――油断ならないな……キンパツ」
「オルコットですわ。特別に名前を呼ぶ事を許可してあげます」
……どうにも私の周囲には目立つ人間が多い。
それが項か、不幸か――。
今のところは後者としか言いようがない。

「授業の前に今度行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める」
一時限目、教壇に立ったちーちゃんは開口一番、クラス代表者の話を始めた。
「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力の推移を測るものだ。今の時点でたいした差は無いが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変功は無いからそのつもりで」
それはつまり現時点で、事実上のクラストップを決定する、という意味にとっていいのだろうか。同じ事を皆考えるものなのか、ざわざわとクラス内が色めき立ち始めた。
私は試しに一夏の方を見てみるが、自分には関係のないことだとでも思っているのか、彼は呆としている。
「はいっ。織斑君がいいと思います！」
「私もそれがいいと思います！」
「ほう、それでいいのか？　自他推薦は問わないぞ」
さもすれば予想通り一夏に期待が集中した。
そこに在るのは純粋な好奇心と話題性が殆どだろう。

けれど直接の現場を見たわけではないが、オルコットの話から推測すれば一夏もまた、教官を倒したというのだ。

ならばそこに少しの期待感を持つ者が居ても可笑しい話ではない。

「ちょっ、ちょっと待った！　俺はそんなのやらな――」

「自他推薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

「い、いやでも――」

いーくんとちーちゃんが何やら言い争ってはいたが、興味などはなかった。

織斑一夏がクラス代表になることは悪い事ではないし、そんなものは私になんの関係もなかったから。……おそらくクラス最弱の人間が最強を名乗るのには若干の抵抗がある。

けれど仕方がない。

自身の無知と無恥が招いた結果なら当事者はその責任を担うべきだろう。

「先生、少しばかり質問があるのですが、宜しいでしょうか？」

「いいだろう、言ってみろ」

「――仮に立候補者が数名の場合、どういった基準で選別されるのでしょうか？」

「……立候補者が数名の場合は、一週間後の月曜日から放課後、第三アリーナにてクラス代表者選抜の為の模擬戦闘を行う。人数にもよるが、立候補者が十名を超えない場合は、原則として総当り戦だ。ちなみにその場合は勝者が代表決定権を持つことになる」

「……ならばわたくしは、篠ノ之箒さんを候補に推薦しますわ」

――とその時、何故か私の名前が挙がった。

声の主を探せば一夏の他に一人、女子生徒が立ち上がっている。

ちーちゃんの説明を聞いてオルコットはにやりと笑った気がした。

「――そしてこのわたくし、セシリア・オルコットもクラス代表に立候補致します」

……成る程、存外解り易い性格をしている。

束に言わせると人間には総じて二系統二属性があり、創る者と探る者、使う者と壊す者とに分けられるそうだ。オルコットの系統は知らない。

けれど奴は間違いなく私と同じ――。

……壊す者だろう。

「いい覚悟だ、キンパツ。そういうの――嫌いじゃないよ」

気付けばそんな言葉を口にしていた。

……今の私は私の意思で動いている気がしない。

篠ノ之箒という四年前の別人が、私という人形を操っている錯覚が常にあるからだ。

けれどそれは本当に錯覚なのだろう。

どんなに空虚だ、虚構だ、飯事だと罵っても、私は結局自分の意思で行動している。

そこに他人の意思が介入することはできない。

だから篠ノ之箒本人か私かなんて実際はどうでもいい事なのだ。

――私の望んだ闘争は、きっと篠ノ之箒が望む物でもあるのだから。

それを面倒なんて言わない。

「良いお返事。……よろしくて、篠ノ之箒。私の専用機『ブルー・ティアーズ』で叩きのめしてさしあげます」

「できればいいがな。――『蓮姫』は負けないぞ」

互いに啖呵を切ってしまえばもう、後戻りなどできない。そんな私達の様子を見ていた連中のざわめきが大きくなった気もするが、それでも構わないと思った。

「……あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか？」

クラスメイトの一人が唐突に質問した。

「……ああ。篠ノ之束は、篠ノ之箒の姉だ」

ちーちゃんはそう言うが私が専用機を保持しているのは篠ノ之束の妹だからでは無い。

けれどそれは他人が知っても仕方のないことだ。
「えええええーっ！　す、凄い！　このクラス有名人の身内が二人もいる！」
「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？　やっぱり天才なの！？」
「篠ノ之さんも天才だったりする！？　今度ＩＳの操縦教えてよっ」
それよりもこの群がる連中はまさか私が赤の他人だとでも思っていたのだろうか。
能天気は通り越せば無智でしかない。
敵意と向上心を持つオルコットのような生徒の一方で、未だ自身が一般人であると倒錯しているクラスメイトの姿は滑稽で私の滾り始めていた闘争心を冷ますには十分だった。
「――だ、そうだ。どうやらアンタの相手は天才の妹らしいぞ？」
「ふん、臨むところですわ。相手にして不足はないようですし」
「それを聞いて安心したよ、勝負事はお互いに本気じゃなきゃ面白くない」
――勿論、負けるつもりはないけれど。
それさえ確認できればよかった。
勝負事において、勝利に伴う感情は正しさの証明足り得るのだ。
――なら勝つしかない。
そうやって自身を誤魔化して。
はじめて、私は戦うことができる。
「――篠ノ之にオルコット、一応言っておくがこれは私闘を認めるものではないぞ」
「ええ、勿論ですわ先生。私達はただ、徹底的に戦って互いの序列をはっきりさせたいだけ。その果てに決まる勝利者に文句をつけるなど在りえませんもの」
ちーちゃんの苦言もオルコットには通用しないようだ。
すっかり乗り気になった彼女が勝手に話を進めていくのを後目に私は席に着く。

「――おい、俺はまだ戦うなんて言ってないぞ？」
「はあ？　何を言ってるんですの、織斑一夏。彼方の存在など最初から数に入っていませんわ。専用機も無いくせに厚かましいですわよ」
「いや、それに関しては問題ない。織斑の場合は状況が状況なので、データ収集を目的に専用機が用意されることになった。よってこれ以上推薦がない場合はオルコット、織斑、篠ノ之の三名でクラス代表決定戦を行うことになる」
どうやら最初から一夏の退路は塞がれていたらしい。
……けれど。
「――一週間で用意できるのか？」
織斑一夏がＩＳを操縦できると判明してまだ一ヶ月少し。その間に世界初の男性用ＩＳを開発して運用まで持っていく時間があるのかは正直疑問だ。
……たとえ、それが演出と知っていても。
そんな呟きが聞こえたのだろうか。
織斑千冬は苦笑を浮かべた。
「――何を言ってるんだ、という表情をしているな、篠ノ之。……まあ、解らなくもない。実際、普通のプロセスを踏んで専用機を開発すれば、まず今年中に完成することはないだろう。しかしだ、それはあくまで常人が常人のレベルに合わせて作った場合でしかないと言うことをお前達は失念している」
その一言でクラス内は静かなものになる。
……受け取り様によっては強烈な皮肉にも聞こえる言葉。
担任教師が差別を公言するという異常事態。
けれどここは普通の学校ではない。
外の問題など内では些細な事だ。
……差別など、この世界では当たり前のものだから。
「そもそもインフィニット・ストラトスとは宇宙という未知の空間に適応するために開発されたマルチフォーム・スーツであって断じ

て飛行パワード・スーツではない。今でこそ世界中に普及し、練習用と題された機体まで存在するが、そんなものは所詮まやかしだ。あれはな、乗り手を選ぶんだよ。だから適性ランクなんてものがある。ここに入学できた諸君らには関係のない話かもしれんが、乗れない者はたとえ女であっても一生乗れない。ＩＳとは本来、そういうものなんだ。身体を破壊せんとするＧ、並みの頭脳では対処することすら不可能なコア・ネットワークシステムによる情報処理。その二極をクリアして、初めて起動する形態移行兵器――。それがインフィニット・ストラトスだ」

世界最強のＩＳ操縦者、『ブリュンヒルデ』が紡ぐのはあくまで現実だ。

そこに綺麗事は無く、物事を誤魔化す必要もない。

気に喰わないものは全て蹴散らす。

そうして彼女は世界の頂点に立ったのだから。

「だからこそ諸君らには覚えていてほしい。ＩＳに常識など通用しない。テキストで学習はする。基礎知識も教えると言った。しかしこれらは学んだ時には既に過去でしかない。形態移行――学習能力を持つＩＳは常に進化を続けている。故に織斑一夏、という男性に対応した機体が登場した。……専用機とはつまりそういうことだ。――異端の為の異常。今回のクラス代表戦は良い勉強になるだろう。人工物と自然物、その違いを見比べながら観戦できるのだからな」

だから、と織斑千冬は言った。

「――織斑。望む望まざるにかかわらず、人は集団の中で生きていかなくてはならない。それすら放棄するのならまず、人を辞めることだな」

現実を直視しろ、逃げるな。

……一夏に対しての言葉であるはずなのに、それはまるで全員に掛けられた言葉であるような気がした。

「さて、授業をはじめるぞ。山田先生、号令」

「は、はいっ！」

――リングが朝日に反射する。
手にした力の重さをまだ私達は解ってない。
いつか知る日が来るのだろうか？
――実力なんて発揮しなくて済む方が世界は平和だ。
「……違うか、姉さん」
おそらく当事者であろう篠ノ之束の創る専用機など私には想像もできない代物に違いなかった。それが織斑一夏の為になるかも……私には解らない。
だって知らない知人なんて――。
結局、他人と変わらないだろう？

／境界式

――そこに、『白』が、いた。
白。真っ白。飾り気の無い、無の色。眩しいほどの純白を纏ったＩＳが、その装甲を開放して操縦者を待っていた。

「これが織斑くんの専用ＩＳ『白式』です」
クラス代表候補に俺の名が挙がってから三日が経った。
その日の放課後、山田先生の呼び出しを受け、第二整備室に向かうと、そこには千冬姉と『白』がいた、という訳だ。
ＩＳネーム『白式』
それが織斑一夏の為に用意された専用機の名前。
――綺麗だ。
浮かんだのは、そんな陳腐で安っぽい言葉だった。
ある意味、それは一目惚れに似ている。生憎まだ経験がないので断言はできないが……何と言うか、それ以上に相応しい感覚というのを俺は想像できない。

真っ白のそれ、無機質なそれは、けれど俺を待っているように見えたのだ。

そう、この時を、こうなることをずっと前から待っていた。

ただこの瞬間の為に生み出された存在。

そんな妄想を抱かせる相手に恋をしてないと誰が否定できるのか。

「身体を動かせ。装着してみろ。貸し切りにはしてあるが、時間は有限だ。今日の内に、フィッティングとパーソナライズは終わらせておきたい」

急かされて、俺は純白のＩＳに触れた。

……試験の時に、初めてＩＳに触れた時に感じたあの電撃のような感覚は今回はない。ただ、馴染む。理解できる。これが何か、何の為にあるか。

――解る。

「背中を預けるように、ああそうだ。形式は問わない。後はシステムが最適化するから、お前はそのままでいればいい」

俺の身体に合わせるように装甲が閉じた。空気の抜ける音、機械の駆動する音、それに心地好さを感じた。

生まれた時から我が身だったかのような一体感。適合するよう、最初から俺の為にだけ存在したのだと、事実を上塗るように――。

俺と白式は『繋がる』

「……ＩＳのハイパーセンサー機動。――問題ありません。違いなく動いています。気分はどうですか、織斑くん？」

「――大丈夫です」

キーボードを操作しながら山田先生はそう尋ねてきた。

……見えている。

背後に居るはずの山田先生を、その表情を、ディスプレイに合わ

せて動く眼鏡の向うの眼球の動きさえ、俺には知覚できる。
目前に展開された各種センサーが告げてくる値も、どれも普段から見ているかのように理解できた。
……クリアーな意識の、その裏側では白式が膨大な情報量を処理しているのが解った。千冬姉は最適処理化と自己同一化を終わらせると言ったが、その前に機体のフォーマット――初期化を、俺の身体に白式を合わせる前段階の操作が現在行われているのだ。
刹那の間にソフトとハードの書き換えを同時に行うのだ、その数値の巨大さから詳しく知らない俺でさえ、その行為がどれだけ次元違いのものか理解させられる。それを近所の幼馴染みのお姉さんが最初から一人で創ったのだと知っていれば尚更だ。
初期化の終了には三分程かかった。
「――後はフィッティングさえ終えれば一次移行完了か」
「……織斑先生、ファーストシフトってなんですか？」
聞きなれない単語が出てきたので、俺は素直に尋ねることにする。
……知ったかぶって肝心な時に失敗とか、地獄を見ること間違いなしだからな。
「一次移行を経由すると、ＩＳはその姿を搭乗者に合わせて変形させる。白式の場合は、さらに単一使用機能も同時に発現するからな。少しばかり時間がかかるという訳だ。理解したか？」
「ワンオフ・アビリティ？　よく解んないけど凄いのかな、それ？」
「凄いなんてものじゃありませんよ。単一使用機能は本来、二次移行――セカンドシフト以降に、機体と搭乗者の相性が一定値を超えた場合に発現するＩＳ独自の能力です。……例えれば織斑くんが対戦するオルコットさんが四百時間、約二年かけても未だ発現しないそんな特別な機能なんです」
山田先生の説明に唖然とさせられる。……あの妙に偉そうな外国人が言うだけの鍛錬を積んでいることに、そしてその努力を嘲笑う白式の性能に――。
「勿論、代償は在る。白式はその能力を先行して発現するという条

件上、機体の拡張領域も全て使用する為に、ただ一つの武装しか装備できない」

「……何かおそろしいことをさらりと言ってないか、千冬姉」

「仕方あるまい、白式が専用機、と言っても所詮は実験機だからな。そもそもＩＳ自体が完成されていない以上、素人のお前にあれやこれやと過多な性能を与えても扱いきれん。……安心しろ、白式に装備されてるのは刀一本。要は足場の無い、相手が飛び道具を使う剣道をするのだと思えばいい。そら、簡単だろう？」

……それ、もう剣道じゃないでしょ。

あまりに多すぎるツッコミ所に、気概を削ぎ取られる。

「しかしそれでも一夏は不満だろう。だから束に交渉して武装は最高の物を用意させた。『雪片弐型』……後はもう、お前次第だろう」

……千冬姉はずるい。

その名を聞いてしまえば、俺が文句など言えないことを知っている。

――雪片。それは、かつて千冬姉が振るっていた専用ＩＳ装備の名称だ。刀に型成した形名。それが雪片。

……ああ、まったく。つくづく思い知らされる。

「――能力名『零落白夜』自身の既存エネルギー値を搭乗者の任意により、攻撃へと転化させる単一使用能力。それを最大限発揮させるのが、雪片弐型の『バリアー無効化攻撃』……簡潔に言えば雪片は相手のバリアー残量に関係なく、敵機ＩＳ本体に直接ダメージを与えることができる。それを持ってすれば、既存ＩＳは『絶対防御』を発動させる為に、大幅にシールドエネルギーを削ぐことができるという訳だ」

三年前も、六年前も、そしておそらく十五年前だって……。

俺はいつだって守られっぱなしだ。

聞こえたのは高周波の金属音。

瞬間、白式は光の粒子になり、弾け、刹那、結集する。

「――魔弾は四つか。後は努力だな、一夏」

フィッティングは終わった。
これでやっと白式は俺専用になった。
滑らかな曲線とシャープなラインがどこか中世の鎧を思わせる。
背後には付随するように二対の双翼が浮かぶ。
……凄いぞ、この速さ。
自動車とか、飛行機とかそんなレベルじゃない。
興奮という奴は一瞬だった。
……ありえない、こんな代物が個人の手に、俺の意思に委ねられるのか？
それは寒気なんて程遠い感覚。
感じたのは恐怖だった。
……自身のあまりの認識の薄さに、手にした力の大きさに……そして世間の無知に俺は恐怖の感情を抱いた。
男だとか、女だとか、誰が特別だとか、そんなこと言ってる奴はきっと底抜けの莫迦か狂人に違いない。
過ぎた力を知っていれば正気でなんかいられない。
……その本質を理解してるのなら。

――とても立ってなんていられない。

織斑一夏という器に注ぐにはあまりに情報という水の量は多すぎた。
……力の認識はこの世界が――あやふやで脆い虚像の上に絶妙なバランスをもって存在しているという事実を教えてくれる。
そして、この瞬間を持って俺は被害者から加害者に変わった。
俺はきっと略奪者であり簒奪者だ。
世界でただ一人――俺だけが裏切った。
おそらく自身の才能ではなく、周囲の七光りで、俺は選ばれた。
――力が抜ける、意識が薄れる……。
けれど倒れることは赦されない。

白式はそんなこと、許してくれない。
「……観たか、一夏」
「――ああ、これが千冬姉の世界なのか？」
「そうだ。出来るなら、けして見せたくはなかった。ここは戦争を許容する……。そんな狂った世界さ」
……本当に、俺はいつだって千冬姉に護られていたんだな。
「ありがとう。俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」
でも、そろそろ、護られるだけの関係は終りにしよう。
これからは――。
「俺も、俺の家族を護る」
「……莫迦、そういう言葉はいつかの時の為に取っておけ。それと、お前に護られるほど私は弱くはないさ」
……まったくその通りだ。
「――なら、とりあえずは、千冬姉の名前を護ることにするよ」
元日本代表の、その弟。それが不出来では、格好が付かない。そう、格好いい千冬姉の格好が付かないなんて冗談もいいところだ。

……笑えない。

所詮クラス行事と割り切るのは簡単だった。
けれどセシリアはそこに男と女の境界線を持ち込んだ。
……勝利者がけして持ち込んではいけないものを、矜持を奴は犯したんだ。
俺はＩＳについては全然詳しくはない。むしろ千冬姉の方針に従って過していたから、普通よりも知らないくらいだろう。
だからといってこれまで全くの無関係だったのか、と聞かれればそれは違う。
そして俺以外の男はもっと悔しい思いをしていたんだ。
……俺だけが護られていた。
友達も、先生も、知り合いも、他人も、みんな何かしら苦痛を味

わう中で、俺独りだけがこれまで護られていた。
……最早、無関係などではいられない。
何より正直な話、セシリアや周囲の女子の態度に苛立ちを覚えなかったと言えば嘘になる。……性別にこだわる気は無いが、俺にも意地がある。
一生の恥を描くくらいなら、一時の恥くらいどうということはない。
「――勝つさ」
「ん？」
「……俺は、セシリアも、箒も――倒す」
「……難しいだろうな」
そんなことは解っていた。
だけど負けられない。
誰かに負けるのはいい、けれど自分から投げ出すことなんてもう、俺には赦されない。
「……アリーナの使用許可、貰ってもいいですか。織斑先生」
「……ふふ、面白い。本気だったか、織斑。――いいだろう。それくらいの便宜は図ってやろう」
「宜しいんですか、織斑先生？」
「良くはないだろうな。けれどいいじゃないか、山田君。君も見たいとは思わないか？
男の決意というものが、果たしてどれほどのものか。それがＩＳにどんな影響を与えるのか。その覚悟の価値を知りたくはないか？
私は見たいな、その可能性を」
「……もう、そんな顔しないでくださいよ。私が変みたいじゃないですか。……織斑くん私は反対しません。けれど期待もしません。全ては彼方次第です」
「ありがとうございます」
白式が一際強い輝きを放った。
光が収まると、俺の身体を纏っていた外装は霧消している。

……不意に右に重さを確認した。
見れば右手首に見慣れないガントレットが装着されている。
「――パーソナライズも滞りなく完了ですね。そうそう織斑くん。ＩＳは今、待機状態になっていますが、織斑くんが呼び出せばすぐに展開できます。待機状態の時は、操縦者の身体にアクセサリー状になって命令を待つのが一般的ですね。ちなみに織斑くんの場合もそんなに珍しいものじゃありません。中には完全に同化するなんて事態もありえますから白式は見る限りではたぶん大丈夫でしょう。安心してくれていいですよ」
……山田先生の話も何気に怖い。
同化ってどういうことだ……。
一瞬、グロテスクなナニカを想像してしまった。
相変らずニコニコと笑顔を浮かべる先生と俺の想像が一致していないことを祈りたい。
「では、決戦は四日後だ。楽しみにしてるぞ、織斑」
「――まかせてくれよ、千冬姉」
「馬鹿者、織斑先生だ」

◆

バスン、と音が出るくらいの威力で弟の頭を叩いた。
「……はい、織斑先生」
途端、静かになるあたり、そうそう態度が変わる訳ではないらしい。
――それが妙に残念でありながら、嬉しくもあった。
「さて、ではそろそろ行くことにしようか。――山田君」
「は、はい！　それじゃあ、織斑くん、これはＩＳの機動に関するルールブックですからしっかり読んでおいてくださいね」
一夏に渡されたのは、まるで電話帳のような厚さの本だった。
……行動派の弟に、あれは中々きつかろう。

というより私でもきつい。全てを憶えて守るなど、教員でも不可能なのだ。

まあ、最低限のルールさえ守っていれば、そうそう注意などされはしない。

ならば言うことなど特にはなく、私は整備室を後にした。

「――織斑くん、きっと伸びますね。織斑先生」

「……あんまり、褒めてやらないでくれ。アイツはすぐに調子に乗るんだ、山田君」

「それでもですよ。何せ、雪片ですよ、雪片。織斑先生と同じ武装でしかも！　単一使用能力まで一緒なんて、解っていてもドキドキしちゃいます！」

……それは偶然なんかじゃない。

けれどそれを他人が知る必要は今はまだ、無かった。

「さて、私はともかく織斑はどうか。……まあ、余計なことを考えて戦うより、一つの事を極める方が向いているとは思うが――」

――なにせ、私の弟だ。

そして白式は、私の唯一信頼する者が創りあげた機体だ。

信用という点においては心配する必要は皆無だろう。

……現段階では、だが。

「ふふ、楽しみですねー」

「……そうかな」

「何せ、アリーナの使用許可出しちゃうくらい期待してますもんね！」

「……山田先生、私はからかわれるのが嫌いだ」

まったく生意気な後輩だ。

「……んー！」

願うことなど多くない。

ただ、望むなら。

一夏の選んだその道が――。

間違いじゃないことを祈りたい。

「期待してるぞ、一夏」
その小さな頭を腕で挟みながら、私はポツリと呟いた。

／2

不意に音が聞こえた。
廊下の先、ビットから響いてくる振動音は、聴く者が答えるのなら、ＩＳの駆動音だと返すだろう。
ナニカがやってくる。
ほどなくして音はやみ、ゲートの開く気配がした。
軽い、乾いた音がアリーナに響いている。
その音は下駄らしき履物で、硬い床を歩くものだ。
華蘭、と足音が近づいてくる。
セシリア・オルコットは自身が通ってきた道とは対なるもう一つの入り口へ身体を――ブルー・ティアーズを向けた。
彼女は認めたのだ。じき、ここにやってくるものが誰かということを。
「待ったか、キンパツ」
それは、すぐに現れた。
ゲートからの光を背に、その姿は影しか見えない。気圧が変調しているのだろう。境界に立つ篠ノ之箒の、漆黒色をした着物ははためいていた。
「――彼方、ＩＳはどうしましたの？」
セシリアの疑問はおそらく客席で、管制室でこれから始まるであろうクラス代表決定の為の試合を見に来た者、全員の意思を代弁していた。
箒は答えない。
ただ黙ったまま、自身の目元近くまで腕を上げた。
そうして撓らせるように腕を振るえば、その腕には二メートルを

越える大型の銃器――六七口径特殊レーザーライフル『スターライトｍｋ？』が握られている。
「――えっ」
聞こえたのはいったい誰の声だったのか。
……ふわりと箒の身体が空中に浮かんだ。
その身を被うのは既に着物ではない。色合いは黒。けれどその外見は、特殊なフィン・アーマーを四枚背に従えた騎士のものへと変化していた。
それはセシリアのブルー・ティアーズによく似た、ナニカ。
それは真っ黒な贋物。その事実を箒は隠そうともしない。
セシリアは気付く。
――先程、自身が着物だと認識していたのはＩＳだったのだ。目前の機体は理屈までは知らないが、姿を変える。……そして目前の敵は自身を愚弄しているのだ、と。
「――『悪平等蓮姫』それがこいつの名前だ」
憶えておけ、と箒は続けることができなかった。
閃光は刹那、自らが在った空間を光線は薙いだ。かわせたのは技ではなく感覚。溢れる殺気から攻撃を読むのは容易い。
「……これはまた、ご挨拶だな。合図も無しか」
セシリアは答えない。
自身の周りに浮いているフィン状のパーツをただ撫でる。それだけで特殊レーザー装置の銃口は開き、分身達は、自身を侮辱する下郎の抹殺に動いた。
――それと、両義を成すように。
箒の周囲に在る黒き贋物もまた、飛翔を開始する。

――特殊装甲『彼方』
それが篠ノ之箒の専用機『蓮姫』に搭載された唯一つの武装だった。ＡＰシステム――アマルガム・ピコマシンと呼ばれる自立流体

合金とコア・ネットワークより敵対するＩＳの特徴を、ほぼ完全に再現する機能を有する。

故にそこに性能差は存在しない。

在るのはただ、互いの技量のみ。

「――ふーん、どうりで引き分ける訳ですわ。……けれど、相手が悪くてよ！」

「さあ、な――ッ！」

叫びは連動する。互いに対なる計八つのビットと二機のＩＳが、アリーナを自在に移動しながら銃弾を浴びせ合う。

全方位からの攻撃が可能な以上、求められるのは相手の死角を衝く多重思考操作能力と射撃の命中精度だ。

その点に関して篠ノ之箒は、セシリア・オルコットの足元にさえ及ばない。

元来その能力だけを求められ、訓練を積んだ者に一介の贋作者が及ぶ道理など、万が一にも存在する訳がない。

しかし闘いとはそれだけが全てではない。

――鈍い輝きが奔る。

瞬間、爆音と共に八つは七つになった。

「な――ッ、ブルー・ティアーズが……」

それは刃渡り六寸もの刀というよりは刃に近い肉厚の凶器だった。

『インターセプター』ブルー・ティアーズに装備された接近戦用のショートブレード。その贋物。

箒の振るったそれがセシリアのビットを切り裂いたのだ。

根底として銃器の使用には技術が必要とされる。

それは剣戟も同様。

セシリアが中距離射撃に特化した狙撃手だとするのなら、篠ノ之箒は近距離戦闘を得意とする贋作者だ。要は得意、不得意の違いである。

「――ふん、やっぱり奇を衒うものじゃないな。あとで束に言わないと……」

実際、篠ノ之箒は近代火器の使用を得意としない。
それはＩＳ操縦者としては致命的な欠点になりえる。
けれどそれは篠ノ之箒が凡人だったら、という仮定に過ぎない。
世界の基盤を破壊した家系が普通である理由がない。
たとえ手の届かない所に在ったとしても――。
それを創り上げてしまうのが『篠ノ之』で、それを壊してしまうのも、また『篠ノ之』なのだ。創造者であり、破壊者。その相反する系統と属性こそが『篠ノ之』の司るもの。
ならばそこに不可能など在りえない。
「――来い」
一言、発された呟きの意味は本人達のみが理解しえる。高速で飛来した二機のビットが本体に接続される。……『ブルー・ティアーズ』はなにも攻撃だけの道具ではない。同時にスラスターの役目すら果たす万能機。それがブルー・ティアーズ。
その本質を模倣する為のＡＰシステムだ。
「――――『ストライク・ガンナー』……。まだ、本国でも臨床段階だというのに」
「……愕いてくれるな」
――これが現実だ。
確実に黒の贋物はその速さを増した。
いまやスターライトを手放し、二機のビットと両手のインターセプターを持って彼女は空を奔る。……中距離戦闘用ＩＳが接近戦闘を仕掛けてくる。
ブルー・ティアーズでそんな戦い方をするなど――。
「……ふふ」
――面白いではないか。
知らずセシリアは笑みを浮かべていた。
愕きもある、恐怖の感情だって拭えない、緊張で頬に汗が伝うのを自覚している。
だというのに何だろう、この愉悦。

楽しい、面白い、興奮する――。
抑えきれない悦びが自身の内から溢れてくる。
今なら何だってできる気がした。
「……そろそろ、か」
「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あってよ！」
「知ってるよ」
……ああ、解ってる。
気に喰わないが目前の贋物は間違いなく自身の『蒼い雫』そのものなのだ。
その性能はけして劣化していない。
完璧な模倣、信じたくないような脅威の技術。
――成る程、確かに悪平等だ。
機体の有利を無くし、あくまで技量の勝負に持ち込む。
そうやって掻き乱して勝ちを拾おうとする。
……だからどうしたと言うのだろう。
隠し武器である『弾道型』ビットの存在は知られている。
（だから？）
悪平等が一方的だなんて思うな。
「――篠ノ之箒」
「なんだ？」
「教えてあげますわ」
そう言うとセシリアは、向かってきた箒に――。
スターライトを投げた。
「――ッ！？」
一瞬の動揺は、蒼い雫にとって十分な隙となりえた。
残る三機のビット、内一機の光線がｍｋ？を貫く。……問題ない。
どうせ、制御中には連携など取れないのだ。最早、脅威となりえる敵機の速度の前で大型銃器など無意味。
ならば一時的でも役に立てば後は不要。
そうして主力武装を手放したセシリアは一度距離を取り、その場

に完全に停止した。
「……へえ、それが」
――アンタの本気か。
……近づけない。確実に速くなったのに、切り落とせたはずなのに――。
セシリアのビットはそれ以上の反応速度を持って箒の死角を衝いてきた。理屈は解る。あれは一種の代償行為だ。……元来、身体の機能の一部を失った生物はその分、現存する器官の機能を向上させることがある。
それをセシリアは理詰めで行ったのだ。本来、最高位であるはずのライフルを棄てる事によって現在、極限までブルー・ティアーズに頼ろうとしている。
……不味い。
手負いの獅子が百獣の王になろうとしている。
それを見ていながら、止める術がない。
――攻めきれない。
視界の内に光が入る。無意識に機体を寄せれば、その死角にビットがあった。……まだかわせる。そう思い、急加速をかけたところでＩＳの全方位視界機能は真上から来る光線を捉えた。――けれどおかしい。
ビットは箒を狙ってはいなかった。
そのまま直進すれば当たるだろう。
けれど今更そんなミスする訳――。
「……それが狙いですわよ、篠ノ之箒！」
それは咆哮だった。
慢心する贋作者に見せる、狙撃手の警告だった。
秒数にして刹那。
篠ノ之箒の横脇を通過するはずだったビームが――凶る。
「――歪曲だと！？」
それは過たず箒の機体に直撃した。

ここにセシリアの蒼い雫のＢＴエネルギー稼働率は最大に達する。
――名を偏向射撃（フレキシブル）。
極限の演算を持ってエネルギーの屈折する軌道すら創り上げる蒼い雫の絶技。
贋作者には真似できない、本物こそに許された御業。
その開放に歓喜の笑みを漏らしたのは果たしてセシリアか、それとも箒か……。
――決まってる両方だ。
「はっ、そうだ。闘いはこうじゃないと面白くない――！」
「では、フィナーレと参りましょう！」
セシリアが右腕を横にかざす。最早、ブルー・ティアーズはその位置が意味を成さない存在へと昇華した。
簡単な話だ。どこに在ったって凶るなら、同じ事――。
浮かんでいた二機のビットが瞬きの間に落とされた。
常人の意識を超える『歪曲ノ魔弾』は、屈折を繰り返し、箒に迫る。
それを見切り、いなし、避けて、かわす。
理屈が間に合わないのなら、感覚で――。
それでも駄目ならダメージは最低限に……。
反動制御、弾道予測、一零停止、特殊無反動旋回――。
己が全てを持って、箒はセシリアに向かう。
まだ闘いは終わっていない。
ここで負けては何の為の悪平等か。
「まだ、」
方法は存在する。
篠ノ之束の実験機がただの贋作者で終わるなどあるはずがない。
ＡＰシステムの本質はあくまで物体模倣。
ならば真似事に制限などあるはずもない。

「――ッ、まだそんな小細工を！！」
セシリアの目の前で箒の駆る黒きブルー・ティアーズはその速度をさらに増した。背後に在るのは六機の強襲用高機動パッケージ――ストライク・ガンナー。
「まさか、本当に数を増やすなんて……」
けれどあれ以上は不可能だろう。あんな速さの中、まともに銃器を扱えるはずがない。ビットも同様だ。
――つまり。
後は互いの全力をぶつけるだけ。
……実にシンプルだろう。
速い者が勝つのか、上手い者が勝つのか――。
「――当然」

強い者が勝つに決まってる。

視線が合わさったような気がした。
そして信念と矜持が交錯する闘いは最高潮を迎える。
刃を両手に残像を残す速さで『黒い雫』が肉薄し――。
それを撃滅せんと蒼い雫の偏向射撃が追随する。
黒い雫の右肩が射抜かれた。
代わり、一機のビットが両断され、慣性のまま横を通り過ぎ、爆ぜる。
そんな一連の動作より速く箒はセシリアへの突撃を再開した。機体の瞬間加速度は既に音速を超越し、周囲の時は遅く、世界はモノクロームに変化していく。
最早、ハイパーセンサーによる視力矯正を持ってなお、捉えることは難しいはずなのにそれでもセシリアの光線は箒の身体を掠り、装甲を抉る。
穿たれるレーザー光よりも速く。……それくらいの気概がなければ、勝てない。

潜り抜け、一閃。重い金属を切り裂く感触が箒の手のひらに伝わった。

真っ二つにされたビットは断面に青い稲妻を奔らせ、過ぎ去る景色の中で爆散し、消滅する。――その代償にインターセプターを一本持っていかれた。

模倣の時間は――あるはずもない。

最後の一機になってもブルー・ティアーズは執拗な攻撃を止めようとしない。

その歪曲を超えた先にセシリア・オルコットは在る。

「――――、――――――！」

「インター、セプター！」

全身が砕けるかと思うほどの速度を上乗せした渾身の一撃は、咄嗟の刃を容易く砕く。しかし不可視のシールドの残量は零にはならない。

「お生憎、インターセプターは二本ありましてよ！」

ここにきてまさかの接近戦闘。

ドックファイトをセシリアがこなす理由はやはり、残るビットの存在が大きかった。

そうして幾度かの剣戟が響き――。

彼女達の物語は終幕を迎える。

「――こいつ――！」

叩きつけるように振るわれた箒の刃がついに最後のビットを砕いた。

――爆発。

最後の輝きとでも言うつもりか、それはいままでのどれよりも大きかった。

爆風は二人の手からインターセプターを掠め取る。

視界の端で爆発に飲まれた箒の刃が消滅した。

視認からの行動はセシリアの方が早い。

――けれど移動は箒の方が速い。

セシリアが掴むより一瞬早く、箒がインターセプターを掴んだ。
逆手持ちになった刃がそのままセシリアの肩装甲に突き刺さる。
……まだ致命傷にならない。
引き抜こうとした箒の腕をセシリアは掴んだ。
短い刃は彼女の身体を傷つけはしなかったのだ。
「――あーあ、引き分けですわ」
心底残念そうな顔でセシリア・オルコットは言った。青い雫の腹部から広がるスカート状のアーマー。その突起が外れ、左右にスライドする。
――それは黒い雫も同様で。
超至近距離のミサイル同士の炸裂は、互いのシールドエネルギーの残量を残してはくれないだろう。幸いなのは絶対防御があるので致命的な怪我はしないことか。
「――畜生」
「ですわ」
悔しさを含んだ声が、どちらともなく洩れた。
閃光、爆炎。
一拍の間を置いてブザーが鳴り響く。
――かくして惰性と慢性の日々は終りを告げる。
クラス代表決定戦は始まったばかりだ。

／3

零れた溜息はいったい、何に対してだろうか。アリーナの片隅でモニターを注視していた織斑一夏は画面を閉じ、現実に意識を戻した。
「……」
そこは四日前から彼に使用許可が出されている第二アリーナだっ

た。もっとも自身以外にも人影はいる。貸切にしてくれると姉は言ったが、流石に素人風情がそこまでするのは厚かましいと思ったので遠慮した。

勿論、先輩達の技術を盗むという目的もあったが、それは言わなくても解っているだろうから問題なかった。

……ただ、どうも自分は勘違いしていたらしい。

「――勝つ、か」

先日何気なく口にした言葉の意味を、その難題さを一夏は認識として現在、叩きつけられているところだった。

ＩＳを『乗れる』と『使える』とでは、天と地の差がある。

自身が未だ使い手でないことは、織斑一夏にも自覚できていた。

既にファースト・シフトは完了させている。しかしそれでは駄目なのだ。幾ら最初からワンオフ・アビュリティが使用できるといっても、白式は言わば第一段階。次のステップであるセカンド・シフトに移行して初めて白式は真の意味で織斑一夏専用の機体となる。

その条件は単純にして明確。

一定以上の運用時間を持ってハードとソフトは進化する。それを効率よく運用できる為の訓練であり、それを成す為の練習だ。

長期的に視るのなら、一夏のやっている事は間違いではない。

――けれど現状で言えば決定的に遅い。

「……。駄目だ、何も思いつかん」

暫しの黙考の後、一際大きな溜息を一夏は溢した。天上を仰いでみるが、まったく名案というやつは浮かんでくれなかった。

元々、物覚えは悪くない方だ。

けれどそれは裏を返せば、然るべき手段と明確な答えが用意されてやっとはじめて進むことができる。――詰まるところ、織斑一夏はそういうタイプの人間なのだった。

ＩＳには『答』がない。

未だ完成の糸口を見せぬ、極限進化するモンスターマシン。

起源を同じくしながら、その辿る導はけして交わらない。

それがインフィニット・ストラトスであるという。
相性など最初から解り切っていた。
しかしそれを理由に投げ出すという選択肢は織斑一夏には既に存在しない。そんな惰弱な精神は――ついこの間、捨ててしまったのだから。
「……まあ、考えても仕方ないか」
幸いまだ時間というやつは有限ではあるが存在した。それなら、何か良いアイディアが浮かぶまでただひたすらに訓練するというのも悪くない。
――それが今の所、唯一得た答えだから。
白式を纏う一夏の身体が空に浮かんだ。

――『空』は異界だ。
ここは地上とは根本を違える別世界である。

『飛行』する違和感はこの数日でどうにか払拭した。
けれどここは未だ、織斑一夏に心開かない世界だった。
落ちる、堕ちる、墜ちる――。
飛行という言葉と落下という言葉は連結している。そしてその先にあるのは確実に死、という概念だ。ならばＩＳを使うということは同時に死を了解するという意味でもある。
だと言うのにＩＳは搭乗者に死ぬことを赦さない。
先程の戦闘だってそうだ。あれほどの爆発と重力を持っても、ＩＳは対象の命を殺める術を持たないと完全に設定されていた。
急停止してそのまま一回転してみる。胃が競り返るような感覚と嘔吐しそうな気持ちの悪さは瞬間に矯正され、その後は逆さまになっても頭に血が上らなかった。
これが織斑一夏の感じる世界だった。
物理法則は逆転し、地面もなければ上も下も存在しえないこの世界が一夏が現在認めるべき現実なのだ。

そして『使い手』達はそこからさらに一歩を踏み出した先に在る――。

先程、眺めた映像を思い出す。

篠ノ之箒の見せたあの剣戟。

出鱈目な速さの中に魅せたあの剣捌きこそが――。

――織斑一夏が覚えるべき技術。

『雪片』の顕現まで一秒弱――遅い。これではあの闘いに挑む間もなく切り伏せられる。もしくは全身蜂の巣だ。新たな課題を認めつつ、雪片を構えた。

ずっしりとした鉄特有の重さは間違いなくこれが真剣であることを教えてくれる。

おそらくＩＳの補助がなければまともに支えることさえ難しいだろうそれは素人目に見ても使用者を選ぶ業物に違いなかった。

まずは竹刀のように振る。

千冬姉も言ったが、それが一夏の基本戦術。

『足場もなく、飛び道具さえ使う剣道』

既に手放して三年と経つが一夏もまた剣道家の端くれだった。

――故に視れた。

箒のあの動きもまた自身と道を同じくする技だと。要はそれをどのタイミングで形作りどこに打ちこむかが、違っているのだ。

この六年ですっかり言葉遣いが変わってしまった幼馴染みのそれでも変わらない共通点を見つけた気がして一夏は少し嬉しくなった。

表情を改める。

ならばまずそれを思い出せ。

イメージするのは幼き日の自分。

そして共に検算を積んだ篠ノ之箒。

丁寧にその身体捌きをトレースしていく。
使うのは手首ではなく腕全体。
力任せにするのではなく、ただ目標を、在ると定めた位置に雪片を振り下ろす。
切り返し、突き、袈裟懸け――。
基本に忠実に、ただ正確に――そして徐々に速く。ブレを修正して、白式にその軌道を覚えさせる。オートマチックではなくシステマチックに記録し、蓄積させる。
成る程、これがすべきこと――。
「……なんだ、見つかったじゃないか」
流れに任せるのも案外悪くない。
そんなことを考えながら一夏は雪片を振るった。

「ねえ。キミって噂のコでしょ？」
その声は足元から、聞こえた。素振りを中断して天上を覗き込むように見ると、そこに一機のＩＳが浮かんでいた。
逆光のせいでその表情までは判断できないが、声からしておそらく笑っている。癖毛なのか、やや外側に撥ねた髪が特徴的で、どこか小動物を思わせる女子生徒だった。
「はあ、たぶん」
ＩＳを纏う姿から一瞬ハリネズミを一夏は幻視したが、すぐに声の女子生徒が先輩だということに思い至った。理由は単純で一年生はまだ、彼以外にアリーナの使用許可が出ていないからだ。その先輩は一夏の返事を聞くと機体を彼の元へと寄せた。
「代表候補生のコと勝負するって聞いたけど、ほんと？」
「はい、そうですけど」
上級生にまで今回のクラス代表戦の話は伝わっているようだった。
「でもキミ、素人だよね？　ＩＳ稼動時間いくつくらい？」
「いくつって……十時間くらいだと思いますけど」

自分で言ってゾッとする話だと一夏は思った。――まだ、足りない。そんな程度では、二人には挑めない。もっと練習が必要だ。

「それじゃあ無理だよ。ＩＳって稼働時間がものをいうの。その対戦相手、代表候補生達なんでしょ？　だったら軽く三百時間はやってるわよ」

（単純比較で三十倍、か）

それも最低、と頭に付いてしまう。

それ程の鍛錬を積んだからこそのあの機動。

自身の敵がどれだけ強大かを再認識させられる。

――そして、それでもなお、負けられないと思う織斑一夏がいた。

「でさ、わたしが教えてあげようか？　ＩＳについて」

言いながら、先輩が身を寄せてきた。

柔らかい膨らみが一夏の腕に当たる。……一瞬、身体がビクリと震えたが、先輩はどうやら一夏の動揺に気付いていないようだった。まるで子供が玩具をねだるように彼女は彼の手を取って顔を近づけてくる。

「どう？　とってもいい案だと思わない？　キミはより良い作戦が作れるかもしれないしわたしは自己満足できる。――誰も幸せだよ？」

その言葉に少しだけ、一夏は黙考した。

「……すいません。自分の力を試したいので」

結論として出た言葉は否定だった。

これは柄でもない意地というやつなのかも知れなかった。普段の一夏ならにべもなく、誘いに乗っていただろう。けれど今の彼は普段とは違った。

「まだ、何もしてないうちから頼る訳にはいかないんです。――すいません！」

それは初めて抱いた決意を放すまいと抱え込む小さな男のほんの

小さな意地だった。
「ふーん……そう。まあ、それなら……仕方ないね」
先輩はまるで面白そうな話を聞いた、とばかりに笑う。――もしかすればそこで初めて織斑一夏はこの名も知らない女子生徒に『人間』として認識されたのかもしれない。
昨今の関係からすれば『男子が女子に断りを入れる』など許されない世界だから。
「なら、今日のところはこれでお仕舞いだよ」
だからこそ、その態度に彼女は好奇心を抱いたのかもしれない。
――けど諦めないから。
『田端野埜ノ子』と名乗った先輩はそう囁くと、何処かへと飛んでいった。
その時見えた紅色の瞳があの人を思わせたから――。
「――――――、か」
覚えておこう、そう一夏は思った。

◆

「……」
「……」
かれこれ一時間はこうしているだろうか。私と目の前の男子――織斑一夏との間には、妙な緊張感があった。
――変化を感じたのは、キンパツとの試合が終わって部屋で再開した時から。
他人より一足早く戻った私よりも先に一夏が部屋にいたことが気になって、好奇心から声をかけた。聞けば今日は観客席にはおらず、ずっと隣のアリーナで訓練をしていたとのことだ。
それと現在の状況にいったい何の関係があるのかは疑問だが、こうなってしまったからには確かに因果の一つがあるのだろう。
珍しいと思ったから、暫く考えてみたが結局、解らなかった。

だからそれ以上の詮索を止めて黙って食堂で箸を動かしていたのだが、一夏が席を立つのと時を同じくして――。

「だめだよぅ……、ケンカしちゃー」

可笑しな奴に絡まれた。

そいつは袖丈が異常に長い制服を着ていた。――同じクラスの人間。最近一緒に朝食を共にした女子生徒。名前は知らない。

目元はいつも眠たげに細められていて、どこかそう、のほほんと雰囲気を醸している。

だと言うのにそいつには隙がない。服装が乱れていたとして、行動が緩慢だとしても、彼女の身体はけして軸がずれていなかった。

表現するなら、だらしない武人。

それがそいつに抱いた印象だった。

「……」

「聞いてるかー、しののん」

「――お前、誰だ」

尋ねるとそれまで在った食堂の喧騒が途絶えた。それはまるで空気が凍ったとでもいうべき静寂だった。……ただ、名前を尋ねただけでどうしてこうなるのだろう。

観ればそいつは放心してどこか泣きそうになっている。

「なあ、お前――」

「はあ。そこまででしてよ、篠ノ之箒。せめて誤解を解いてから話を進めなさいな」

ポンと置かれた手には小さな絆創膏が張られていた。セシリア・オルコットは厭きれたような顔をして私を見ていた。

「どうかしたのか？」

「どうかじゃ、ありませんわ。名前が解らないと言うのなら、きちんとそう言いなさい」

「――ふぇ？」

「最初からそう言ってるじゃないか」

「彼方の言い方はそうは聞こえません。現に布仏さんはそう受け取

っていませんわ」
そうなのか、と『布仏』を仰げば、彼女は小さく肯いた。――どうやら、私と彼女達の間には重大な認識のズレが発生していたようだ。
「悪かったな。それで――何か話があるんじゃないのか」
「――彼方ねえ……」
「い、いいよ。それよりおりむーと何かあったのかなぁと思って。……どうなのぉ？」
どうやら立て直しは効いたようで、布仏は再び間延びした口調で尋ねてきた。ついでに雰囲気も元に戻っている。
「さあ、それが私にも解らないんだ。どうして一夏はあんなになってるんだ？」
「ん……、解らないで話してたんだ」
「ああ、解らないから話してたんだ」
それとも布仏は理由を知っているのだろうか。――促すとなぜかキンパツも席に着いたがまあ、いいだろう。
「それで知ってるなら教えてくれ」
そう言うと布仏は少し視線を宙に泳がせた後、隣に座っているキンパツを見た。
「理由はたぶん、せっしーの方が解ると思うけど……おりむーは、しののんとどうやって接すればいいのか解らないんだと思うよぉ？」
ちなみに『おりむー』とは織斑一夏、『せっしー』はキンパツ、『しののん』は私だ。
「それは理解できる。――けどなぜだ？　理由が知れない」
「篠ノ之箒……。彼方、それ本気で言ってますの？」
「冗談でこんなこと言わないよ、キンパツ。それとフルネームで呼ぶのはやめろ。箒で構わない」
「なら、わたくしもセシリアで構いませんわ。――話を戻しますけど、織斑一夏は私達とまだ対戦していません。そして今日のわたくしと彼方との試合を観て、流石に何か思う事があるでしょう。……

もしかすると無いのかもしれませんけど。そんな時、次々回の対戦相手である彼方と同室では気まずくなるのも肯けますわ」

「――ああ、そういうことか」

セシリアの説明は理路整然としていて、理屈臭くはあったが道理には適っていた。……成る程、そこまで聞かされれば私にも理解できる。

つまり織斑一夏は――。

「なんだ、あれだけ面倒そうに見せておいて、フェイクだったか」

「……」

「……」

「つまりあれだ。一夏は相手である私に策を勘繰られたくなかったから、あれだけ無口を貫いていたんだろ？　――ふん、ということは思い至ったのか」

セシリアや私を攻略する方法に――。

「……まあ、そういう解釈の仕方もありますわね。ただ――」

「ははぁー、しののん実は私と同じような娘でしょー。お仲間だぁっ」

言外にどこかずれてると言われるのはあまり良い気分ではなかった。けれどこれ以外の正解がどこにある。

「――それより、セシリア。お前ＩＳ大丈夫か？」

「ん、問題はありませんわ。次の織斑一夏との対戦前には余裕で修復が終わります」

「そうか」

多少強引に話題を変えた。

結局、私とセシリアの対戦は引き分けで終わった。これが仮に公式の試合だったなら、どんな手段を使ってでも勝敗が明らかになったのだろうが、クラス代表決定の為の模擬戦ごときにそんな大仰な方法を使う人間はいない。

私もセシリアもそれに関して異論はなかった。

話はこれくらいでいいだろう。私は席を立つ。――精々、一時間

くらいは時間を潰してから部屋に戻ってやるつもりだ。
「……余計なお世話だが、頑張れよ」
「ええ、言われなくても。叩き潰しても構わないんでしょう？」
ニヤリと笑みを浮かべて私は食堂を後にした。

◆

「――せしりー、しののんといつ仲良くなったのぉ？」
「……仲好しなどではありませんわよ、布仏本音」
「うそだぁー、じゃあなんでそんなに嬉しそうなのぉ」
「――さあ？」
何の事か、とセシリアは笑う。――ただ、自覚は在った。
悪くない。男などと馴れ合っているからには、骨の無い駄目な人間だと思っていたが、箒は想像以上にできる相手だった。
だから期待してしまった。
もしかすれば――織斑一夏も私を楽しませてくれるのではないか、と。
そんなファンタズムを思い描いてしまったのだ。
熱く激しく、高ぶる感情の濁流の――。
その名前をまだ、私は知らない。

／4

――起動。戦闘待機状態の敵性ＩＳを感知。操縦者セシリア・オルコット。ＩＳネーム『ブルー・ティアーズ』戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り――
本音を吐露することが許されるのなら、織斑一夏はまだ本当の意味でＩＳを理解してはいない。それは周知の事実であり、そして自

身の認識でもある。
――だってそうだろう？
誰が思うだろうか。あの日、あの時、あの場所で、ただ一つの誤認を起点に織斑一夏は六十億分の一を手に入れた。それは誰かの幸福であり、誰かの不幸であった。
――ゲート開放まで二・〇五七一八四二二秒――
白式が規定事項を伝えてくる。白銀の相棒は必要なことしか喋らない。けれど、それで良かった。余計な真実などいらない。
信じるものは、ただ己の内にある。
――不意に幻想を見た。

暗い部屋の中、少し幼い自分はテレビに釘付けだった。
画面の向うに在るのは、黄金に輝く剣を構え、一刀の元に敵機を跪かせる剣姫。
それは現実だった。
何者にも負けず、逆境に屈せず、彼女は前を見据えている――その光景に俺は泣いた。ただ美しいその姿に、涙が溢れて止まらなかった。その原因は俺で、そのせいで孤独で、いつも一人で、普段は文句しか出なかったのに、そんなことは全部どうでもよくなってしまった。――だから願ったのだ。
その勇姿を自らの手で握りつぶしてしまった――その時に。
強くありたい、と。
そう、願ったのだった。
その償いを、今、始めないといけない。
座り込んだままではいられない。
もう、涙は流さない。
泣いていたのは、そう。悲しかったから泣いていたんじゃない。悔しいから――肉親の未来を潰してしまったという事実が重すぎるから、織斑一夏は、涙を流したのだ。……それは六年経ってやっと理解した、後悔の認識。

「……ああ、俺は」
――いつも知るのが遅すぎる。
でもそれもここまで。いつまでも、こんな寄り道はしていられない。
織斑一夏はようやく、スタートラインに立ったのだから。
――白式、出撃――

「あら、逃げずに来ましたのね」
高高度から一夏を見下ろすセシリアは、その尊大な態度とは裏腹に一切、油断や慢心を抱いてはいなかった。少女は差別はするが、無能ではない。
ハイパーセンサー越しに見えるその眼はけして、木偶のモノではなかった。それ故に、距離を取り、合図も先にブルー・ティアーズを起動させていた。
主を取り巻くように周囲を旋廻する四体のファンは、篠ノ之箒との対戦から僅か数日で完全に修復されていた。しかしその手に握るライフルはその限りではない。
五一口径アサルトライフル『レッドバレット』
アメリカのクラウス社製実弾銃器で、その実用性と信頼性の高さから多くの国々で正式採用されるメジャー・モデルである。
結局、スターライトｍｋ?は修復が間に合わなかった。――いや、正確を記すのなら、別に間に合わせる必要がなかったと言うべきか。最早手に持つ銃器が何かなどセシリアにはどうでもいい話なのだ。
どこにいて、何をしようと、歪曲する魔弾は敵機を逃しはしない。
それだけに頼るつもりはないが、言ってしまえばそれだけの話なのだ。
「最後のチャンスをあげますわ」
「……チャンスって？」
「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るというのなら、許

してあげないこともなくってよ」
――警戒、敵ＩＳ操縦者が戦闘モードに移行。セーフティの解除を確認――
そう言って彼女は眼を細めた。――仮にここで少年が降参の声を上げるなら、セシリアは織斑一夏を躊躇無く撃墜しただろう。
けれどそれが有り得ないことは解っていた。
それくらいにはこの男を信用していた。
「そういうのはチャンスとは言わないな」
「莫迦な男。大人しく家に帰っていれば良かったのに。……彼方が努力して何か成せる程世界は優しくない。ずっと護られたまま、笑っていればよかったのに」
「……ああ、そうできたらどんなに良かったんだろうな」
――一つ教えてやる。
織斑一夏は、セシリアを凝視する。そこにあるのは決意と覚悟。
右手に握る雪片弐型を彼は彼女へと向けた。
「男にはやらなきゃいけない時がある」
「――そう」

――呆れた。
そんな言葉を私に言うなんて。
そんな想いで俺を見るなんて。
いいよ。
なら、先ず。
そのふざけた認識を――。
『完膚なきまでに叩き潰す』

一夏の疾走が始まった。
用意された戦場。今、二人だけのアリーナで、白式は見惚れるほどの速さだった。
たとえ何百メートル離れていようとも、距離を詰めるのにはおそ

らく五秒かかるまい。セシリアの細い身体に雪片を叩きつけ、そのシールドエネルギーを喰らい尽くすには十分な時間だ。

しかし、その驚異的な速度も視力やまして光線には及ばない。接近して切り付けなければならない一夏と。

ただ、その両目で目標を捉えるだけのセシリアとの差は、五秒では遅すぎた。

「――――」

青い雫が動く。ライフルは軌道予測点に、ブルー・ティアーズは目標の直接的撃墜に。白式の頭部と左スラスターに光線が奔る。

異変はすぐに現れた。

観測してからでは間に合わない。だというのに素人は瞬間、横に跳んだ。

弾けるような真横への跳躍。しかし、玄人の一撃はそんな生易しいものではない。

ブルー・ティアーズは飛び道具だ。その場所から離れていたとしても、彼女の視界に納まり思考が続くかぎり、逃げることなど不可能。

「うおっ！？」

白式のオートガードがどうにか一夏の身体を守った。直撃は避けたものの、左脚部装甲をビームが掠る。直後、遅れてやってきた衝撃波に左足が捻じ切られる様に引っ張られ、神経情報として痛みが稲妻のように走った。

それに追随するようにレッドバレットの弾丸が装甲を叩く。今度の衝撃はそれ程強くはない。けれど問題としてシールドエネルギーはその総量を減らした。

内心で一夏は舌を鳴らす。セシリアの青い雫の実力は、考えていた以上に、観た以上に強力だと実感して。

――バリアー貫通。ダメージ四六。シールドエネルギー残量、五二一。実弾ダメージ、レベル低――

一夏はなお奔った。セシリアの視界から逃れるように、彼女を中

心に円に奔る。
「そんなことで――」
逃げられるものですか、とセシリアは呟き、絶句した。
あっさりと逃げられた。
信じられない事に、セシリアのブルーティアーズはその光線を枉げてなお、一夏を捉えられなかった。
「――嘘」
……何故だ。この攻撃は篠ノ之箒を持ってすら完全回避を不能とした一撃。織斑一夏に避けきる術など――！
「なんて――出鱈目」
そこでセシリアは気付いた。
呟くその口元は笑っている。
確かに避けられた。その秘密は白式の機体コンセプトにある。かの機体は超絶な威力の一撃必殺武器と単一使用能力の運用を前提に創られている。だから、白式は速いのだ。
どんな攻撃も当らなければ価値はない。
事実、機動力だけならば、スペック上白式は、高機動型ＩＳに引けを取らない。
だがそれだけならばまだ、セシリアの攻撃は当る。しかし一夏はそれに加えて不定期な加減速を行うことで、歪むビームの雨を回避していたのだ。
ならばそれは本当に織斑一夏の実力なのだろう。
「――サークル・ロンド」
円状制御飛翔。一夏は知らないだろう。なぜなら、それは射撃型――つまりセシリアの攻撃動作なのだから。
だからこそ侮れない。
それは高度なマニュアル機体制御を必要とする技術だ。機体制御のＰＩＣ（※パッシブ・イナーシャル・キャンセラー。ＩＳの浮遊・加減速を行うＩＳの基本システム）は本来、オート制御になっている。それを態々、機体制御などという面倒な処理を行ってまで使う

価値を見出したのだとすれば――。
「――流石はブリュンヒルデの血族ということですか」
「ふざけんな、その言い方！」
裂帛が轟く。セシリアの油断を衝く様に、雪片の一閃が一翼のファンを切断する。剣道で言うなら胴打ち、簡潔に伝えるのならば袈裟懸け。
織斑一夏が吼えた。
けれどそれはセシリアの計算内だということを一夏は知らない。
彼女は代表候補生だ。だから万人よりはＩＳの闘いというものを理解している。
それは母国の騎士道が通じるような『誇り』の世界ではないのだ。

勝利こそ全て。
勝者こそ絶対。

ならば必要最低限の被害で勝とうとする――その考え方、それ自体が温い。
無論、一時の激情に動きを緩めるなど、未熟以外の何者であろうか。
「閉幕と参りましょう」
左手を天へとかざす。
上前方に一機、中斜方に一機、下後方に一機――。
けして逃げ出せぬ三次元の包囲網。
壊されたビットが未満ならば、壊した一夏もまた未満。
「初見にしては、まあ――やりましてよ」
笑みと共にセシリアの手が振り下ろされた。
――五口の鉄器が火を噴く。
まさに暴力のごとき弾雨が織斑一夏に降り注ぐ。

◆

「はぁぁ……。すごいですねぇ、織斑くん」
ビットでリアルタイムモニターを見ていた山田真耶が溜息混じりに呟く。確かに一夏のＩＳは代表候補生を前に信じられないほどの時間、健闘している。
あの弾雨を白式は防ぎきった。
信じられないようなイグニッション・ブーストの連続。瞬間加速中に無理に機動を変えれば、空気抵抗や圧力の関係で骨折の危険性すらある。だというのに一夏の身体には現在異常はない。
骨格の差。性別の差と言ってしまえばそれまでの事象が、不思議と真耶には悔しく思えた。――それは元代表候補生の嫉妬と羨望というやつなのかもしれない。
ただ、隣の織斑千冬は対照的に忌々しい表情をしているが。
「あの馬鹿者。浮かれているな」
「えっ？　どうして解るんですか？」
「さっきから左手を閉じたり開いたりしているだろう。あれは、あいつの昔からの癖だ。あれが出るときは、大抵簡単なミスをする」
「へぇぇぇ……。さすがはご姉弟ですねー。そんな細かい事まで解るなんて」
「当たり前だ。弟だぞ」
当然だと千冬は言い切った。
「はー、愛されてますねー。織斑くん」
そう言って真耶も画面に視線を戻す。
試合はそろそろ佳境を迎えようとしている。
「……油断するな、一夏」
モニターには一撃を喰らいながらもビットを落とす一夏の姿が在った。

◆

――シールドエネルギー、残量二六七。実態ダメージ中破――
「……笑えねえな、こりゃ」
「滅茶苦茶ですわ、彼方」
思わず自嘲が毀れる。落としたビットは弾道型を含めて四機。
しかしまだセシリア本人へのダメージは皆無という状況。未だ周囲には二機のビットが飛翔し、彼女の手にはレッドバレットが握られている。
満身創痍の結果がこれではあまりに惨めだ。
――やはり、自分ではまだ、彼女達と戦うことすらできないのか。
苦い想像が脳裏を奔る。
「――ねえ、彼方はどうして」
「えっ？」
そんな一夏の考えを遮る様にセシリアが声をかけた。
――彼女には不思議でならなかった。
善戦しているとは言え、結果はもう見えている。このまま時間を消費した所で、一夏に勝ち目などありはしない。
だというのに――。
なぜ、この男はこんなにも真っ直ぐに前を見つめているのか。
他者に媚びることのない眼差しは、セシリアの父親を逆連想させた。

父親は母親の顔色ばかり伺う人間だった。
名家に婿入りした父は母に多くの引け目を感じていたのだろう。
幼少の頃からそんな姿を見て、セシリアは『将来情けない男とは結婚しない』という思いを幼いながらに抱かずにはいられなかった。
そうしてＩＳが発表されてからは父親の態度は益々弱いものになった。母親は、どこかそれを鬱陶しそうで、父との会話自体を拒んでるきらいがあった。
母親は強い人だった。女尊男卑社会以前から女性でありながら幾つもの会社を経営し、成功を収めた人だった。厳しい人だった。け

れど憧れの人だった。

――そんな人と、どうして織斑一夏は重なるのか。

「どうして、諦めないんですの？」

問いかけに一夏は答えない。沈黙を守り、再び飛行を開始する。

その姿は――どこか篠ノ之箒と似ていた。

（――やっと、機動が読めた）

一夏はまるで猟犬のようにその時を待っていた。

ブルー・ティアーズは、高確率で一夏の反応が一番遠い角度を狙ってくる。セシリアはその語り口からも解るが、結構な合理主義者だ。だからこそ、その戦術は理に適っていて容赦ない。けれど――。

それはつまり、ベストポジションさえ判れば、その後の動きは一定ということだ。

そして歪曲は――かわした後、必ず自身に向かって跳んでくるというのなら……。

「――――そこ！」

命名するなら多重瞬時加速。

初めて、ビットの一撃を一夏は完全に回避した。

ＩＳの全方位視界接続は完璧だ。けれど、それを使っているのは人間、真後ろや真下、真上からの攻撃はどうしても直感的に『見る』ことはできない。

送られてくる情報を脳内で理解する間に発生する一瞬の遅れをセシリアが衝いていると言うのなら――織斑一夏は、その隙を誘導する。

「――っ……！」

上段打突の構えのまま、瞬時加速で一気にセシリアの懐まで潜り込む。

ライフルの弾が白式の装甲を叩くが、ビットから放たれる光線が掠る事はもう、ない。――これならば。

「そんなもので――」

一夏はさらに加速する。
ここにセシリアの青い雫のアドバンテージは崩壊した。
手の中でエネルギーがその密度を増していくのを織斑一夏は感じる。

そして想いは溢れ出し、
ついに雪片弐型はその真の姿を曝け出す。

――零落白夜、発動――
それは黄金の刀だった。
光り輝く刀身は、その姿は――かつて憧れた剣姫そのもの。
――当然だ。
これはそういうモノだ。
ただ一振りの剣で世界の頂点に立った生ける伝説の象徴だ。
振りぬき、切り返した刃はまるで当然といった具合にセシリアのレッドバレットを切断し、青い雫の装甲に斜めの傷を刻んだ。
刹那、その煌きが贄を、喰らう。
――警告！　バリアー貫通。ダメージ四〇〇。シールドエネルギー残量、一四三。実弾ダメージ、レベル中！――
「――なんて――」
攻撃、とセシリアは漏らす。
呼吸が荒い。それはたった今、受けた衝撃もそうだが――。
それ以上に原因不明の感情が自身の内から湧き上がっているのだ。
織斑一夏を見ると、それは顕著になる。
――アレは敵だ。
軽蔑すべき男性であり、自身の前に立ちふさがる障害であり、そして――。

――そして理想の、強い瞳をした男だ。

「……あのさ」
不意に織斑一夏が話しかけてくる。
「――――――」
無言でブルー・ティアーズをけしかける彼女に、それでも彼は言葉を紡ぐ事を止めようとしない。
「さっきの質問の答えだけど、俺は――」
護りたいから闘うんだ。
そう彼は言った。
「――どうして」
止まらないの、と。その疑問からくる感情に耐えられず、セシリアは呟いていた。
熱いのに甘く、切ないのに嬉しい。
――なんだろう、この気持ちは。
今の一瞬が、忘れられない。
全身に弾丸を受けてもなお、足を止めなかった一夏の眼が。
楽しんでいた。この、絶対的に有利な自分でさえ緊張ではちきれそうな状況を、この男は楽しんでいた。
意識をすると途端に胸をいっぱいにする、感情の奔流を感じる。
――知りたい。
その正体を。その向こう側にあるものを。
――知りたい。一夏の、ことを。
その先に最後まで解らなかったあの人の想いがあるような気がしたから。
「――インターセプター」
だから彼方を倒す。
奇しくも展開は、篠ノ之束の時と同じ様相を呈す。
即ち接近武装を用いたドックファイト。
ただ、二機のビットはまだ健在だ。
――零落白夜、機動。エネルギー七〇使用。残量六八――
白式の伝達に一夏は焦りを感じていた。

ついに発動した単一使用機能・零落白夜。それを持ってしても、一刀の元にセシリアを下すにはエネルギーが不足していた。
全てを廻していれば、もしかすれば勝ったのかもしれない。
けれどそんな博打に出る訳にはいかなかった。
結果として現状の接近戦闘とは笑えない冗談だと思う。
遜色なく伝えるのなら、セシリアはけして下手ではない。
その事実は、一夏の背筋を震わせた。
「中距離射撃型じゃなかったのかよ……！」
「甘いですわ、織斑一夏――！」
それは剣道ではなく剣術だった。
セシリアにとってはあくまで術。故に型にとらわれないその動きは一夏を翻弄する。
目の前に集中すれば、光線が飛び、近すぎれば猛攻を受ける。
徐々に減っていく自身のエネルギー値。それはセシリアも同じはずだが、やはり序盤の差がここで顕著になる。
――そんなこと始めから知っていたじゃないか。
勝ち目なんて元々ありはしない闘いだった。
けれどそれを認めたくなくて、だからここに立ったというのに……。
（――――俺は、）
莫迦だな。そうやってすぐ、保身に奔る。――悪い癖だ。
目の前の彼女はこんなにも――こんなにも一生懸命なのに。
「――俺が頑張らなくて、どうするんだ」
無茶をしなくて、どうするんだ――。
その瞬間に織斑一夏はルールを破った。
打ち込んでくるセシリアに力任せに雪片を叩き込む。それはここ数日白式に覚えさせていた綺麗な剣道とは違う――。
――織斑一夏、本来の剣道。
「え、きゃあ――！」
思わず、後退した彼女を確認すると同時に無重力機動を白式に要

求する。常識では在り得ない回し蹴りが、影響で停止していたビットを蹴り壊した。
そのまま、イグニッション・ブースト。
余計な茶々などもう、いれさせない。セシリアが機動を調節し終えた時を同じく、雪片が奔った。――一拍の後、最後の一機が爆ぜる。
……これで余計な飛び道具は墜ちた。
「おおおおっ！」
瞬間加速度、センサー解析度はさっきまでの比ではない。
再びエネルギーが集中し始める。
零落白夜の煌きが再び雪片弐型に黄金の輝きを燈した。
「織斑、一夏――――！」
雪片の逆袈裟払いとインターセプターの突きが交錯する。
直線軌道と曲線軌道。
勝敗を分けたのは、ただそれだけの差だった。
「わたくしの勝利ですわ」
「――ああ、俺の負けだ」
『――試合終了。勝者――セシリア・オルコット』

／5

――一人部屋はいい。
誰かに邪魔される事もなく感傷に浸れるから――。

いつも別々に過ごしていた両親が、どうしてその日に限って一緒にいたのか、それは未だに解らない。
もしかすれば関係を修復しようとしたのかもしれないし――。

もしかすれば関係を終りにしようとしたのかもしれない。
結局、どっちが正しいのかをセシリア・オルコットが知ることはない。
両親はもういない。
三年前に、事故で他界した。
一度は陰謀説さえ囁かれた。けれど、事故の状況はとてもあっさりとそれを否定した。越境鉄道の横転事故。死傷者は百人を超える大規模な事故だった。
とてもあっさりと、両親は帰らぬ人になった。
「――――それからは、」
それからはあっという間に時間が過ぎたと思う。
手元には莫大な遺産が残った。――毎日、気まずい思いだったことは否定しない。
でも、セシリアが望んだのはこんな静寂ではなかった。
――こんなモノの為に、わたくしは救われたかったのではない。
両親からの贈り物を金の亡者から守る為にあらゆる勉強をした。
その一環で受けたＩＳ適性テストでＡ＋が出た。おかげで政府から国籍保持のために様々な好条件が出された。……セシリアに拒否権などあるものか。
決断するしかなかった。
第三世代装備ブルー・ティアーズの第一次運用試験者に選抜された。稼動データと戦闘経験値を得るため日本へやってきた。そして――。

出会ってしまった。

思い返せば、他人と『競い合う』などという行為は初めてだった。
世界で唯一信じられるのはセシリア・オルコットだけで、その自分こそが一番なのだと信じていたのに。
彼は、彼女は――あんなにもあっさりと、セシリアの境界を越え

てきた。
「――織斑、一夏」
篠ノ之箒。その名前を口にすると不思議と、胸が熱くなるのがセシリアにはわかった。
どうしようもなくドキドキとして、彼女はそっと自分の唇を撫でてみる。……先程まで紅茶を嗜んでいたそこは、触れられることを望んでいたかのように不思議な興奮を生み出した。
「……ああ、わたくしは」
――知りたいのだ。
彼と彼女を、もっと理解したいと思ってる。
いつだって勝利への確信と向上への欲求を抱き続けていたセシリアにとって、その想いは公と私を完全に一致させるにふさわしい命題となった。
それはまるでシュレディンガーの猫。
その事実に彼女は気付いていない。
けれどそれでいいのだ。
「――――ふふ」
彼女は笑った。
豪奢なベットの上で、独り抱いた希望を放すまいと、泣きそうな顔をして。
その身の内から溢れる想いに――ただ、笑った。

◆

「――無駄に広いもんだ」
俺専用ということになっているロッカールームは、ただただ静かで落ち着かない。
俺はＩＳスーツから制服に着替えると、白式のコンソールを呼び出して調整を始めた。
それはここ最近、日課になった行為だ。ＩＳには自動学習機能が

存在するのだが、全てをオートモードで記憶させておけばいいと言う訳ではないのだ。

ＩＳ基礎理論に『蓄積経験』というものがある。――ＩＳは戦闘経験を含む全ての経験を蓄積することで、より進化した状態へと自らを移行させる。その蓄積経験には損傷時の稼動も含まれ、ＩＳのダメージがレベルＣを超えた状態で起動させるとその不完全な状態での特殊エネルギーバイパスを構築してしまうため、それらは逆に平常時での稼動に悪い影響を及ぼすことがある。

つまり何でもかんでも正直に伝えることが必ずしも良いということではない。

人間だって情操教育を始めるにはまず、それを理解できる年齢まで育てなければいけない。それと一緒だ。

今日のセシリアとの対戦で受けた白式の総合ダメージはレベルＣとまでは言わないが、それでもけして『安心して自己回復に任せられる』ようなものではなかった。

それに、俺には後ろ楯――ＩＳの整備や調整などをしてくれるバックアップ専門の技師がいない。だからたとえ素人の浅知恵だろうが、俺がやるしかないのだ。

（……雪片弐型のエネルギー変換効率は約三倍か、有り得ん武器だよな。やっぱ……）

零落白夜のおかげもあり、俺の使用武器はまさに一撃必殺の威力を誇る。しかし、そのために容量には万一の隙間もなく、さもすれば俺はどうしても接近戦闘を挑むしかない。それをより効率よく行うためには、まずエネルギー循環量を各部分によって随時調整しなければいけないのだが……。

そんなことを考えていると、突然目の前が真っ暗になった。――比喩でなく、本当に。

「……っ！？」

「さて、わたしは誰だろう？」

背後から聞こえた声は同級生よりも大人びている。そのくせ、楽

しさが滲み出しているような笑みを言葉には含んでいて、イタズラを楽しむ子供のようにも聞こえる。
　目をふさいでいる指はなんだかさらさらとしていて、しかも少し冷たい。それがひどく気持ちよくて、俺は数秒間だが呆としてしまった。
「残念、時間切れだね」
　そう言って開放してくれた手の持ち主を確認しようと、俺は振り向く。
「やあ、幾日振り。元気だったかい」
　――噂のコ。
　確か彼女は俺をそう表現した。
「聞いたよ、負けたんだって？」
　田端野埜ノ子がそこに立っていた。

「キミがわたしを覚えてくれているなんて光栄だね、織斑一夏。やっぱりあの自己紹介は正解だった。もし普通に――たとえば食堂なんかで声を掛けていたとしたなら、わたしもまた、その他大勢の『女子生徒の一人』に仲間入りするハメに陥っていたわけだ」
「……は、はあ？」
　さも当然のように先輩はすらすらと言葉を紡ぐ。この間とはまったく違う、まるで別人の口調で彼女は話を続けている。
「ん？　どうしたんだい。さっきからキミはどうも曖昧だよ、織斑一夏。ほら、もっと噂のようにわたしを楽しませてくれないか。聞くところによればキミは幼馴染みと同棲中というらしいじゃないか。いいね、そういうの。わたしの学年には生憎同性しかいないから、まったく未知の体験なんだろうね。男女七歳にして同衾せず、という諺が確かこの国にはあるが、そんなモノを気にする必要はない。何せここはＩＳ学園なんだからね」
　何も答えられず、俺は先輩の姿を再確認した。
　先輩の姿に変化はない。

小柄な体型や癖毛なのかやや外側に跳ねた特徴的な髪も変わりない。ただ、前回はＩＳスーツの為に判らなかったが、制服には黄色のリボンが付いていることからどうやら先輩は二年生のようだった。

「なんだ、もしかして着替えを覗かれて怒ってるのか。あんがい狭量だな、キミは」

紅い瞳で先輩はこちらをのぞき見る。

小さい顔に大きな瞳は、そのどちらもが綺麗な輪郭をしていた。好機に満ちた鮮やかなクリムゾンレッドは、織斑一夏の姿を映しながらもっと遠くを見つめているようだった。

「えっ……と、田端野先輩……ですよね、彼方？」

ああ、と先輩は笑った。口元の端をつりあげる、どこか不適な形で。

「キミにこの口調で話しかけるのは初めてだったかな？　いや、失敬。どうもガラになく興奮しているようだ。何せ、男子と密室に二人きりなんてわたしの短い人生でも余りない経験だからね。――けれどそれは、この瞬間においては限りなくどうでもいいことだよ、織斑一夏。そうだね、うん。じゃあ時間が勿体無いから、本題に入ろうか」

そう言って先輩は強引にこちらの手を取ると顔を近づけてくる。

「では、改めて。……わたしからＩＳを習う気はないかい？　織斑一夏」

まるで何かを確信しているかのように力強く、先輩はそう提案してきた。

「理解していると思うがキミが今日、オルコット嬢に敗北したのは偶然ではなく必然だ。まあ、これは前回も言ったから薄々、感付いているのだろうけど、キミと彼女では地力に大きな差が存在している。それを補う為に円状制御飛翔に至ったあたりは賞賛に値するがそれでもなお、キミの操縦は荒い。だから、今日の試合でも完全にビットを避けきることができなかった」

「――いきなりそんなこと言われても、」
「なんだ、私に見せたあの決意はそんなものだったのかい。だったら失望だ、織斑一夏。キミは今後、オルコット嬢に報いることもできなければ、次回の篠ノ之箒との試合すら、何もできずに敗北するだろう。うん、これは宣言してもいい」
先輩はよく喋った。
俺の勘違いでなければ、先輩は精神的にかなり高揚しているようだった。ハイになっている、という状況だろう。話の中身は俺への悪口も多大に含まれていたが、そのすべてに一応の筋道があり、支離滅裂ではなかったことも手伝って、俺はすこしの間この先輩の話を聞いてみようという気になっていた。
「俺が何もできないってどういうことですか？」
「知らなかったのかい？　彼女、剣道の有段者だよ。どんな経緯があってあんな奇天烈な機体に乗っているのかはしれないけど、本来は接近戦専用の――キミの白式や打鉄のような機体こそが、彼女のもっとも得意とするＩＳなんだ」
箒が剣道を続けていることはセシリアとの試合でなんとなく解っていた。
しかし有段者とは……。
意を決して、俺はその先を促すことにした。
「先輩はなんで、そんなことを知ってるんですか」
「うん？　ああ、こんな程度の情報、調べればすぐに手に入る。わたしはね、専用機持ちのパーソナルデータを収集して研究することを糧として生きるモノなんだよ」
だから、この学校に入学した時点でのデータはすべて回収しているし、今後どんな戦術で公式戦に望むのかも大体理解できている、と先輩は続けた。
「まあ、現実的な話、調べるだけの才しかないわたしでは、今後対戦することがあっても正面から叩き潰されるのがオチなのでね。だからこうして未だ誰のバックアップも受けていない専用機持ち――

つまりキミのような存在にわたしは情報と戦術を売ってその正しさを証明したいんだ。ほら、最初に言っただろう？　『キミはより良い作戦が作れるかもしれないし、わたしは自己満足できる』ってね。……つまりはそういうことなんだ」

解ったかい、と尋ねる先輩に俺は肯いた。

「――言っていることは、なんとか」

心許なく返答する。

けれど、先輩の言っていることはかなり実感してもいたのだ。

箒の剣道の強さは幼い頃の実感として身にしみて理解できている。たとえ、新聞や雑誌などに載らなくても日々、鍛え上げた腕と操縦技術は俺の追随など許すはずもないということを。……いや、そんなことは関係ない。

先輩も言ったが、俺は自分自身の宣言に対して背くつもりはない。なら、相手がどれだけ強かろうが、挑むだけだ。

そのために先輩の『技』を盗むのは、悪いことでもルール違反でもない……筈だ。

――本当に？

そうだろうか。

解らない。今日の敗北は確かに重い。けれどそれは決意を投げ出すほどに絶望した闘いだったろうか。……終了後に残ったのは、後悔よりも爽快感だった。

なら、俺はあの対戦に満足していたんじゃないか？

「なに、まだ悩むというのなら、無理にとは言わない。けれど、わたしには諦めるという選択しはないから、そのつもりで頼むよ」

先輩は胸ポケットから取り出したナニカを俺に投げ渡した。

キャッチしてみるとそれはＩＳ用のメモリーチップ。

「その中にはオルコット嬢との試合で観測できた蓮姫についてのデータを記録してある。使用の有無はキミ次第だ、織斑一夏」

そう言って先輩は踵を返す。

「――話は変わるが、キミは蓮姫についてどう思う？」

そこで、まるで思い出したかのように先輩は呟いた。
「奇天烈と表現したが、正直わたしはアレを好きになれそうもない。開発者は篠ノ之博士だそうだが、随分とまた姑息な真似をするものじゃないか。――アレは建前上、操縦者である篠ノ之箒の実力向上を謳っているが、実際にやっていることは略奪行為だ。思わないかい？　機体を完全に模倣できるとしたら、それはデータを完全に盗み取っているのと同じだと。……他人の努力に何も思わないのかね、博士は」
じゃあね、と今度こそ振り向かずに田端野埜ノ子は自動ドアの向うに行ってしまった。
まるで狐に包まれたような気分だ。
自身のことは何一つ言わないまま、去っていた先輩を果たして俺は信用していいのか。
「……」
手にあるチップを見つめてみる。
それは最近の規格でありながら、まるで使い込まれたかのように所々が薄汚れていた。表面に記録されている文字はもう、殆ど読み取ることができない。
おそらく中身は別のモノなのだろうが……。
「――■■ル■■■・■■■ス■シ■■ム？
……これ、本当に使えるのかよ」
疑問に答えてくれる人はいない。

◆

――窓の外に目を向ければ蜘蛛の巣にかかった一匹の蝶が在った。
それを捕食しようと蜘蛛が糸を吐く。
……だんだんと蝶は絡め採られていった。
だというのに――。
それでも力強く羽ばたき続けることを止めようとしない。

己の失策に気付き、死を前にして蝶は諦めなかった。
そして、いかなる奇跡か――逃れた。
落下し、地面に叩きつけられて。
それでも蝶は生きていた。
……翅の速度は上がらない。
いつしか墜ちて、今度は本当に死んでしまうかもしれない。
だというのにかの蝶は羽ばたき続ける。

それがあまりに美しかったから――。
捕まえてしまいたい、と思ってしまったのでした。

／6

しゃらん、と何所かで鈴の音がなった。
それは合図だったのか、気付けば彼の前に彼女はいた。
まるで月影を束ねたかのような闇糸の髪は後頭部で一つに括られ、背中から腰辺りまでながされている。それなのに瞳は背反するような蒼穹で、白皙の肌の中で唇だけが魔的なまでに紅かった。
両手の手首と下駄らしき履物を引っ掛けている足首には白銀の連環がはめられていて、彼女が動くたびに僅かに光り、また音を立てている。
光沢のある漆黒の着物に紅い帯を花魁のように前で結んで佇むその姿は確かに美しい。
ソレが形通りの羽織り物だったら、という話だが。
織斑一夏は知っている。ＩＳを稼働時間が全てと言うのなら、彼女に勝てる者などこの学園のどこにも存在しないということを――。
「――前から聞きたかったんだけど、どうしてその着物って柄が変わるんだ？」
「何言ってんだ？　毎日同じものを着れる訳がないだろう」

……つまりそういう事なのだ。篠ノ之箒にとってソレは兵器であり、部屋着でもあり、寝巻きでもある。それだけの話なのだ。
それが彼女の認識なら、文句を言いはすまい。
そう、今はそんな事どうでもいい。
これから始まるモノに置いて、そんな些細な事情など気に留める必要も余裕すらもありはしないのだから。
「――さて、じゃあ始めるか」
「……ああ」
右腕を突き出し、左手でガントレットを掴む。
「――来い」

イメージするのは器。
『わたし』と言う電源の入っていないハード。
そこに白式というソフトウェアを入れる。
刹那、法則は組み変わる。
遡り織斑一夏という系統樹は『白式』という名に変わる。
秩序を組み替えることなんて簡単だ。
行うのはただ、新しい世界で古い世界を握り潰す。
それをもって――。
真っ白な方程式が産み落とされる。

一夏の身体から光の粒子が開放されるように溢れて、そして再結晶するように纏まり、ＩＳ本体として形成される。
ふわりと身体が軽くなる。各種センサーが意識に接続され、世界の解像度が上がった。一度瞬きすると、一夏はＩＳ白式を装備した状態で地面から数十センチ浮遊していた。
それと時を同じくして、篠ノ之箒もまた、空へ上がる。
――そこに、『黒』が、いた。
黒。真っ黒。飾り気の無い、無の色。全てを飲み込みながら拒絶する漆黒を纏うＩＳが織斑一夏の前に在った。

「――――『黒式』、か」
それ以上の表現を一夏は知らなかった。
それは篠ノ之箒も同じで――。
「――ああ、黒式だ」
重ねるように復唱した。
互いに笑みを浮かべて。
時を同じくして雪片弐型を抜き、同じく構える。
まさに重複。
目の前にいるのは、確かに『自分』だった。
「面白れぇ……」
普段はけして浮かべない獰猛なケモノの感情が一夏の内で渦巻く。
「知ってるぞ、おまえは――――」
一夏は呟き――
瞬間、箒は吹っ飛んだ。

――何が起こったのか。
篠ノ之箒には理解できなかった。
思考が追いつかない。――確か、織斑一夏の白式を模倣し、刀を構えた所で……そう、突然、衝撃が――。……しかし、何故？
地面をバウンドしながら、箒は考え続ける。
一夏が行ったのは、何と言う事もない小細工だった。
通常、ＩＳはその状況に合わせて装備と設定を変える必要がある。例えば、ＩＳ学園で毎年行われる『キャノンボール・ファスト』ではＩＳに高機動型パーツを付けたレース用の機体が必要となるし、その為にリミッター等の基準も変わる。
しかし第四世代である白式にはそれがない。
故に白式は設定だけを調節すれば仮説上、どんな状況にも対応できる万能機なのだ。
その前提を持って一夏が行った事、それはスラスターと反動抑制

に全出力を調整した、『仮想高速機動型突撃装備』――つまり特攻だった。

通常装備の状態から目視操作のみで設定を変更できる現状、白式のみに許された特権をフル活用した織斑一夏の策である。

たとえ装備を完全に解析できたとしても、運用できるかは別問題――。

――ならば慣れる前に一撃加えてやれ。

渡されたチップの最後の一文を思い出し、一夏はにやりと笑った。

転がった箒もそれを理解する。

「なんで」

けれど、聞こえた声は涼やかで――。

「なんで、本気でやらないんだ」

一拍の間を持って、一夏を衝撃で吹き飛ばす。

それは全く同じ行為だった。

織斑一夏が事前に思考し、たった今、実行した行為を容易く篠ノ之箒は模倣した。その行為の稚拙さに呆れながら、それでも借りを返すために一撃を加えた。

それが蓮姫。

すべてを模倣するＩＳの力。

「――それじゃあ、困る。せめてコレに『零落白夜』でも付かなきゃ、戦術にならない。打ち込んだ後にすかさず、体勢を整えてトドメを刺せないようじゃ、こいつは失敗だよ」

黒式は走り出す。

箒は『偽・雪片』を片手に、地面を這うような腰の低さで疾走する。

一直線。自身の言葉通り、一夏にトドメを刺すために。

彼は即座に白式を通常形態に戻し、雪片を構えて――驚きに眉をひそめた。

迫りくる影は、人間の動きをしていなかった。

――当然、か。

生身ならまだしも、これはＩＳを用いた戦闘。ならば常識で測るほうが間違っている。非常識を打ち破るのは、やはり非常識なのだから。

影は蛇のように蛇行する。それはマニュアル操作が可能にする絶技。

アリーナは、篠ノ之箒にとって広すぎる狩場だった。

一夏の眼と白式のセンサーが感じとる包囲網を、影はケモノのように素早く擦り抜けてくる。――見えているのに、その動きが捉えられない。

一夏にとってはまだ遠く、箒にとっては必殺の間合いにまで距離が縮まった時。

蛇は、その動きを猛獣のモノへと変えた。

爆ぜる火花のような迸り。

切り結んだ偽・雪片をくるりと回すように動かして、雪片を流し、それが自身の武器の下になったところで一気に振り上げる。

「なっ……！」

一夏は得物を弾かれそうになるのを飛翔することで保持した。しかしその致命的な隙を箒が逃すことはない。

黒式の蹴りが白式に叩き込まれる。

衝撃は一夏の身体まで届いた。シールドバリアーでも相殺できず、絶対防御は発動しない。――はたしてセンサーがイカレているのか、それとも期待されているのか……。

ケモノは雪片を振り下ろすことで答えることにした。

ギィン、と雪片と偽・雪片が衝突した。

箒のボディを狙った雪片と、防ぎに入った彼女の偽・雪片が衝突する。

一瞬――己の『雪片』と共通するように、二人は視線を交錯させた。

敵意に満ちた一夏の瞳と、歓びに満ちた箒の瞳。

これで借りは零だと、にやりと笑って、箒は大きく跳ねた。

一度の跳躍でかなりの距離を離れた彼女は、すとんと綺麗に着地する。
「――で、誰に習ったか知らないが、考え無しに実行した結果はどうだった？」
「……解るのか？　俺のじゃないって」
「当たり前だ」
そうか、と一夏はいつもの顔に戻った。
「なら、今度会った時はせいぜい弄るさ」
――先輩、を。
少女は答えず、少年も何も言わずに三度、疾走は再開された。
（……とは言え――）
このままでは勝てないことは、一夏にも判っていた。
技術と経験で勝る篠ノ之箒に織斑一夏が追従できる方法が在るとすれば、それは筋力差と骨格の大きさ――つまりガタイの違いを利用するしかない。
セシリアの時もそうだった。
綺麗に勝とうなどと考えること事態、おこがましいのだ。
だからこそ――出力にモノを言わせ、一夏は雪片を箒に叩きつける。
剣道において力任せが可能なのは、本当に実力のある者だけだ。
織斑一夏は有段者ではない。
けれど、素人かと言われればそれは違う。
少なくとも、過去に積んだ経験は本物だ。ならばあとは、それをＩＳで――白式で補正すればいい。
憶えさせた型の通りにできるだけ高速で振り下ろさせる――。オートマチックというのはこんな時に役に立つ。
虚構と自我の狭間、完全なランダムを持って箒を翻弄する。
それが第二の策だった。
――しかしそれでは篠ノ之箒には勝てない。

田端野埜ノ子の策は本人が言うだけはある。
人の道理と心理をよく解っている優秀な策だ。――けれどそれだけでは足りないのだ。……足りない、圧倒的に足りない。そこには情理が足りていない――。
それでは織斑一夏が勝ったと言えないではないか。
誓ったはずだった。
誰かに負けるのはいい。
けれど自分から投げ出すことなんてもう、織斑一夏には赦されない。
自分が『直接的に関わらない』勝利にいったい、何の価値があるというのか。
――止めだ。
これでは箒に失礼ではないか。
（まあ、ただでやられる気はないけどな）

いきなり人間らしい動きになった一夏に、箒はほんの少したじろいだ。
しかしこれは何だろう。
――むしろ、攻め辛くなってる？
（……面白い）
単純に速度を上げてみた。――途端に一夏は対応できない部分が増える。けれど致命的な部分だけはどうしても――入れさせてくれない。
常に何があっても防ぎきっている。
それは勝つという言葉の体現だった。
シールドエネルギーは刻々と減っているのに、それでも一夏には勝負を捨てる気配が一切ない。まるで負けるつもりがないとでもいうように果敢に白式は切り結んでくる。

それが可笑しくて――嬉しくて。
だからあんな単純なモノに引っかかってしまったのだと篠ノ之箒は思う。
「――ッ！？　がぁっ……」
異変は幾度目かの鍔迫り合いで起こった。
雪片と偽・雪片が触れ合った瞬間に箒のエネルギーはごっそりと――喰われた。
……油断した。
神経情報としてやってくる痛みは尋常ではない。
それが白式の単一使用機能・零落白夜――その瞬間展開と認識するのに数秒。
「――――畜生」
ただ、それだけの合間に全体の約半分を持っていかれた。
（……気付いたのか？）
織斑一夏は、この蓮姫の弱点に――。
――蓮姫は単一使用機能を模倣できない。
それはワンオフ・アビュリティが既存の概念を上回る人外の発明である事に由来する。そう、篠ノ之束が創り出せるのは本人が想像するものだけ。
ならばＩＳがコア・ネットワークを介し、操縦者のために発現し、創作したモノを人間が真似できるはずがないのだ。
他人の心を理解できない者に、真心が理解できるはずがない。
異常と異端の差がここに現れる。
篠ノ之箒の蓮姫――もとい黒式は、現状に対する脅威にしか対応できない。
ＩＳとしては完全な失敗作。
その対ＩＳ専用という根源から乖離する異常性が、白式には裏目に出た。
しかしまだ、負けてはいない。
この身は悪平等。

ならば、負けることだけは許されない――。
「――は。やるな、一夏」
「そりゃ光栄だな、箒」
仕掛けたのは箒だった。
戦術は既に頭の中で組みあがっている。――零落白夜はそう、乱発はできまい。なら、懐に入り込んで、早々に片をつける――！
疾走してくる箒に向かっていく一夏。
彼は箒の予測通りに蓮姫の秘密に気が付いていた。
だからこそ正面からの誘いに合えて乗ったのだ。油断や慢心が零だとは言い切れない。しかしその差し引きを持ってなお、彼の単一使用機能は圧倒的だった。
ならば多少の損害を受けようと、勝利の目は此方にある。
少年の刀が黄金の輝きを放つ。
再び刃はその本性を曝け出す。
――零落白夜。
仇なすモノを喰らい尽くす、暴虐にして最強の力――その再誕。
けれど一夏は大切なことを忘れてる。

奇襲は二度目が効かない。

雪片と偽・雪片が交錯する。
だが、呆気ないほどあっさりと偽・雪片は宙に待った。
――当たり前だ。
篠ノ之箒はソレを掴んですらいなかったのだから……。
一度深く身を沈めた彼女はがら空きになった少年の胴に潜り込む。
瞬間加速による衝撃が一夏を襲った。そのままアリーナの壁に向けて自ら諸共叩きつける。
振動は狭間に白式があった為、それ程ではなかった。
引き剥がすように転がる。マウントポジションが取れれば良かったのだが、流石にそこまでは不可能だった。

「――調子に乗りすぎなんだよ、お前」
「……だからってこんなのありか。ほとんど喧嘩じゃねえか」
それでも白式は立っていた。
目立つ損傷はない。おそるべき防御の硬さだ。
……責めきれなかった。
せめて数発、拳を打ち込んでおけば状況は変わったかもしれないのに。
意外な事に対ＩＳ戦闘において未だ拳による打撃は有効な手段だ。
プロフェッショナルならばそれだけで相手ＩＳを機体維持警告域から操縦者生命危険域に陥れることも可能。
だからこそあれだけで終わってしまったのは失策だったのだ。
「――あーあ。こりゃ不味いな」
これでは討つ手段がない。
戦闘が停滞してしまう。
惰性に慢性を重ねたやりとりなど面白くないだろう。
「仕方ない」
そして少女は一歩だけ前に出た。
その足裁きはあまりに自然で、織斑一夏は反応することを忘れてしまう。
何かが違う、と彼は篠ノ之箒を見つめる。
散歩するように気負いのない、自然な足取り。それをＩＳで行うことの難しさを一夏はよく知っていた。――故に彼女が何かをしようとしていることを彼は悟ったのだ。
「いっくん」
彼女は穏やかな、しかし力強い眼差しで一夏を見た。

「――行くぞ」

かちゃり、と一夏の持つ雪片弐型が鳴る。
ゆるく握っていた雪片の柄を強く握り直した音。

歩み寄る箒を見ながら、一夏は静かに雪片を前に……腰の位置にまで持っていく。
それを見た箒は笑みを浮かべ――同じように偽・雪片を動かす。
その刀身が輝き始めた。
それは白式の単一使用能力・零落白夜によく似ている。
「おいおい。ワンオフ・アビュリティまで模倣とか。それは出来ないんじゃないのかよ」
「さて、どうかな」
それがフェイクかどうか一夏に判断する術はない。
けれど、その白銀の輝きを見過ごせるほど彼は日和見主義者ではなかった。
「――くそ」
「はは、どうする？　――織斑一夏」
一夏の言葉に答えながらも、箒は歩みを止めない。
二人の間合いは段々と狭まっていく。
そこは既に互いのＩＳにとって必殺の間合いだった。
それを視界に納めながら、後退するかどうかを織斑一夏は考えていた。
篠ノ之箒の思考は読めない。
確かに白式の零落白夜を黒式は使用できないはずなのだ。
それは先程の箒の戦い方からほぼ確証が取れている。
（でも、ならあの光は――）
あまりにも怪しい。
――あれは何なのだ。
……判らない。
解らないから、思考を止めた。
どちらだろうと少しだけ考えて、すぐに飽きた。そんなものどちらだって一夏には関係のない事だ。
前回はここで躊躇した。――だから負けた。
なら、今回は――。

一夏は片手で持っていた雪片の柄に、もう一つの手を重ねた。
重心は僅かに低く、目前に構えた雪片の柄は腹の前で固定して、刀身はゆるりと前方の箒へと傾いている。
構えは正眼――数ある『剣』の流派で最も多く扱われ、基本にして最強と称される戦いの体勢。経験者であっただけ、それは中々見れるものになっていた。
そして三度、輝く黄金の刃。

それが僅か一瞬だけの攻防となる闘いの合図だ。

カッ、と織斑一夏は両目を開く。
篠ノ之箒が偽・雪片を振り被った。
ほぼ同時の瞬時加速。
接触まで〇・一秒以下。
その姿、まさしく閃光。ＩＳでなければありえない。人間の常識と認識を外れた世界で一夏と箒はぶつかった。
刀を持った両腕が跳ね上がる。
意識された最速の一撃を穿つ。
上段掲げられた雪片がそれ以上の早さを持って振り下ろされた。

斬、という刃音――。

「――なんで」
驚きに声を漏らす。
「言ったろう。悪平等って――」
ケモノは哂った。
ブザーは鳴り響き、
此度の闘いは終了を告げる。
敗者は地に転がり――。
勝者は悔しさに拳を握り締める。

『――試合終了。勝者――篠ノ之箒』

織斑一夏は敗北したのだった。

その理由も解らぬまま――。

／7

その日、誰にも言わずに街に出た。

自分にしては珍しい、ほんの好奇心だ。

見慣れぬビル街を眺めながら歩いていると、

不意に誰かとぶつかった。

――あれ、■？

――■■……！

それは見知った幼馴染みで。

泣きそうな顔で名前を呼ぶと――。

壊れかけた笑みを■■■■に見せたのだった。

「う……」

全身の痛みに呼び起こされて、俺は目を覚ました。

何だか状況がわからず周囲を見渡すと、どうやら保健室らしい。

俺は備え付けのベットに寝ていたのだ。

カーテンで仕切られた空間は狭いゆえに息苦しさと安堵の両方を感じる。――ソレを、いつかどこかで体験したような気がしたが、思い出せなかった。

一見矛盾しているような感覚をぼんやりと体感しながら、俺は情報の整理をはじめる。

――クラス代表決定戦。最終日程。篠ノ之箒。黒式。零落白夜。

交錯。崩れた白式。
それが示す答えは……。
「ああ、俺はまた――」
「気が付いたか」
カーテンが引かれた。了解を得る以前のこの行動。――千冬姉だ。
「致命的な損傷はないが、全身に軽い打撲はある。数日は地獄だろうが、まあ慣れろ」
「はは、いきなりそんなこと言われても解んないよ」
「――む。そうか、すまん……。どうやら少し取り乱していたようだ」
「珍しいな、千冬姉が……。もしかして心配した？」
「当たり前だ、馬鹿者」
トンと軽い音と共に俺の頭をさわったのは、出席簿ではなく女性にしては大きな千冬姉の手だった。それがワシャリと髪を乱す。なんだかそれだけで安心した。
ただ、少しこそばゆくって俺はその手を除ける。なんとなく視線をやった窓の外はもう暗闇に変わっていた。――どうやら、随分な時間を眠っていたらしい。
……なら、丁度いい。
「なあ、千冬姉」
「……なんだ？」
「――俺は、負けたのか？」
返ってきたのは肯定の意。ただ首を振るというそれだけの動作で――俺は自分が二度も約束をやぶったことを教えられた。
「――情けねえや」
「……別に、恥じることはない。二人はお前の何十倍、訓練を積んだ操縦者だ。たかだか数十時間の運用であそこまで闘えるのなら上出来だろう。なにも悔やむ必要はないんだ」
そこまで言って千冬姉はふと微笑んだ。

「……よくがんばったな、一夏」

千冬姉の声は――優しかった。いつもはけして甘やかしたりしないくせに……。

家族は、優しかったのだ。

それが嬉しくて……だから、悔しい。

「――っ――畜生、……畜生ぉっ！　勝った……勝てたはずだった！　セシリアの時も、今日の箒だって！　俺は勝てたはずだったんだ！　……白式なら……、零落白夜もあって……雪片だってあったのに！　俺は、俺はぁっ……！」

零れる涙を堪えることができなかった。――最近、本当にこんなことばかりだ。

高校の受験会場を間違えて、ＩＳ動かして、学園に来てからは、よく知りもしない奴の口車に乗っかって……そして無様に負けた。

――どこに『織斑』がいるというのか。

ここに居るのは『一夏』だけだ。思慮が浅くて、どうしようもなく駄目で、大馬鹿者な『一夏』しかいない。

何が世界で唯一の男だ。

何がブリュンヒルデの肉親だ。

何が専用機持ちだ。

何が――織斑千冬の弟だ。

疎んでいる、蔑んでいる、軽んじている――。

そんな権利、俺は一つだって持ち合わせちゃいない。

「……強くなれ、一夏。誰にも、私にも負けないほどに――強くなるんだ」

そう告げる千冬姉の表情は、いつもよりずっと柔らかだった。世界で二人だけの家族。その俺にしか見せない顔だった。

……まだ、千冬姉はその顔を見せてくれるのか。

こんな俺に、一夏に――織斑になるチャンスを与えてくれるのか。
「――千冬姉。俺、頑張るから。もっと、もっと強くなるから……！」
だから見捨てないで。
「ああ、お前なら大丈夫だ。なにせ、私の弟なんだからな」
もう一度だけ、俺の頭を撫でるともう、そこに千冬姉はいなかった。
「では、私は後片付けがあるので仕事に戻る。織斑も少し休んだら部屋に戻っていいぞ」
それだけ言い残すと、織斑先生は保健室を出て行った。
仕事には真面目な先生だ。
それが俺の理想の大人像であることは間違いなかった。
「あー、コホンコホン！」
――と、先生と入れ違いに誰かが入ってきたようだ。
「……誰だ？　保健室には俺しかいないぞ」
慌てて涙を拭って声を掛けた。涙声にならなくて良かった。
……けれどいったい、誰だろう？
「失礼しますわ」
声の主はそう言うとカーテンを両手で開けた。半分だけ開いていたのが、全開となる。
「御加減どう？　――一夏さん」
「……」
「ん？　織斑一夏さん」
「……。お、おう……もう大丈夫だぞ」
「そう、それは良かったですわ。クラス一同心配してましてよ？」
そこに立っていたのはセシリア・オルコットだった。……あまりに予想外な人物に片言になってしまった。――な、なんの用だろう。
思わずまじまじとセシリアの顔を見つめてしまう。そこに浮かんでいたのは、文字通り絵になりそうな完璧な微笑だった。
入学からここ最近までを軽く思い返してみるが、彼女のこんな笑

顔を俺は初めて見る。というか理由がわからん。
なぜ、セシリアはこんなにも上機嫌なのだ――？
「――クラス代表の件でお話に来ましたの」
あくまでにこやかにセシリアは話を始めた。――クラス代表決定戦は今日の試合で一応の終了となる。
結果は言うまでもないが、セシリア一勝一引き分け、箒一勝一引き分け、俺の〇勝二敗だ。つまりこの時点で、彼女と箒は勝数が並び、本当は明日以降に再戦となるのだが。
「先程、篠ノ之さんが山田先生に辞退の旨を進言し、正式に受理されました。よって此度の勝者はわたくし、セシリア・オルコットという事になります」
「そうか……」
終わってしまえば不思議なことに悔しさは消えていた。これは踏ん切りが付いたというやつだろうか。なんにせよ、これで俺の戦いは終わる。少なくとも――今回の、は……。
「しかし、これはあくまで権利を譲渡されたというだけであり、わたくしはまだ、正式なクラス代表という訳ではありません」
「……なんだ、俺の了解でもいるのか？」
随分律儀だなと思いつつ、それもセシリアらしいかと俺は勝手に納得した。
彼女はどうも委員長というイメージが強い。
「いいえ、それは必要ありませんわ。ただ、わたくしが言いたいのは――」
けれど事はそう簡単な話ではなかったようだ。
「――一夏さん。わたくしは彼方こそ代表に相応しいと思い、御話に来たのですわ」
真面目な顔をして、セシリアはそんな、とんでもない事を言った。
「おいおい。そりゃどんな心変わりだよ。あんな大判振る舞いして

おいて、結局は面倒になったとでも言うつもりか？　候補三人の内の二人が？　身勝手も過ぎるだろう……」

「そうではありません。確かに、戦闘自体はわたくしと篠ノ之さんの勝利でした。しかしそれは考えてみれば当然のこと。なにせわたくしはセシリア・オルコットであり、そして代表候補生。篠ノ之さんは専用機持ちであり、あの篠ノ之博士の妹なのですから。それは仕方のないことだったのです」

……これは、あれか。俺、実は今莫迦にされてるのか。反論できないのが悔しいけれど凄いムカつくぞ。……負けたけどさ。

「――それで？」

務めて、冷静に俺はその先を促した。

シーツで見えない拳を握り締めたのはまだ、秘密だ。

「ただ、ここで一つ問題が挙がりましたの。おわかりになられる？」

「……いや？」

「それはわたくしと篠ノ之さんが勝利したのは、相手が彼方だったからですわ。本当は、少し反省致しましたの。大人げなく怒るなんてレディーのする行為ではありませんもの。それに青い雫と蓮姫の勝利はあくまで戦術的なもの。より広域に、様々なタイプと相手をすると仮定した時、真に戦いぬける機体――それは白式しかないのです」

「そんな事はないだろう？　二人とも十分に強いじゃないか」

「それでは、一夏さんはどう思います？　ＢＴ兵器とリーチの短い接近武器二本しか装備のない実験機と、同じくあくまで自身の実力でしか勝負に望めない実験機。それで本当に万全と言えますの。誰とでも、どんな機体とでも対等に闘えると？」

それは……無理だろう。ＩＳは乗り手に合わせて姿と能力を変えるモノだ。ならそれはまさしく千差万別。全対応なんて不可能だ。

「けど、それは俺の白式だって――――」

言いかけて、ある考えが俺の頭に浮かんだ。

「……まさか」

――白式ならば。

俺の機体ならば可能なのではないか？

「そう、白式にはそれが可能なのですわ。――単一使用能力・零落白夜。その力を持ってすれば事実上、どんな相手でも一撃で下す事が可能ですもの。シールド・バリアーを無視する絶対的なまでの貫通力。これならば相手がどんなタイプだろうが関係ありませんわ。ただ、接近して切りつけるだけ……。戦略的に考えた時、これ程のＩＳが他に在って？」

――そう言われれば俺には返す言葉などなかった。

まさか、これ程……こんなにも早くチャンスが巡ってくるなんて。

「も、勿論。勝手にやれなどとは言いませんわ。一夏さんに任せると言ったからにはこのわたくし、セシリア・オルコットが優雅かつエレガントにそして華麗にしてパーフェクトな訓練で彼方を最高のクラス代表にしてみせましょう！」

「――ああ。頼むよ、セシリア」

これを逃す訳にはいかない。

俺は思わずセシリアの手を取って顔を近づけていた。――不思議と赤い頬。

そして潤んだ瞳。……そうだろう。実際、こんな事を頼むなんて、屈辱以外の何物でもないはずだ。だというのに彼女はクラスメイトのため、俺に頼むと言っている。

セシリアという人間を俺は誤解していた。――彼女はけして嫌味な現代女子ではない。慈しみの心を持った貴族だ。

「側にいて、俺を支えてくれないか？」

「い、いい一夏さんっ！？」

……おっと危ない。

いくらセシリアでも男性にこんな本気の態度で凄まれたら、身の危険を感じるだろう。これから師と仰ぐ人に粗相などあってはいけない。

悪いと一声掛けて、俺は彼女の手を放した。

「――――――」

どうやら機嫌を損ねてしまったのか、セシリアは俯いている。……これは何か、話題を変えないと……。

「そ、そうだ。そういえばなんで箒は辞めるなんて言い出したんだ？　あいつの性格じゃ『むしろ私が！』って意気込むくらいだろう？」

尋ねるとセシリアは少し驚いたような顔をした。

「し、篠ノ之さんはそんなに積極的な方でしたの？」

「ああ、割とな」

「なら……残念でしたわね。彼女、一夏さんとの試合の後、すぐ部屋に戻ってしまいましたの。それで心配した山田先生が様子を見に行ってそこで辞退の話をされたそうですわ」

「なっ……。大丈夫なのかよ、箒」

あっさりと言うセシリアに俺は余計に不安を掻き立てられた。当の彼女は手招きをして俺にこっちへ寄れと合図を送っている。……なんだ、何を警戒している。

「……おそらくですけど、篠ノ之さんのはワンオフ・アビュリティーを使用した反動なのだと思いますの。一夏さんはどうです？」

「単一使用機能ってあの、最後にやった銀色の零落白夜か？」

「違いますわ。……彼方、覚えてなくて」

その問いかけに肯く。気絶した反動かどうかは解らないが、俺は箒に負けた直後の記憶がどうも曖昧だった。

「最後、一夏さんと篠ノ之さんが正面で向き合って、突撃しあったとき、本当に接触する直前だけ――彼女、さらに加速しましたの」

それはＩＳのセンサーで確認しなければ解らないほどのモノだったとセシリアは言う。彼女が早口に言葉を紡ぐと空中にモニターが現れた。

そこには白式と黒式の姿が映されている。

二機のＩＳは互いに突撃し、そして切られた白式が倒れた。

映像が止まる。捲き戻しが始まって……そこで表現できない違和感を俺は覚えた。

「では、次はゆっくりと再生します」

再び、映像が始まる。

ゆっくりと――二機のＩＳは互いに突撃し、上段に掲げられた白式の雪片が振り下ろされる。その直前――。

その腹部に黒式の拳がめり込んだ。

そのまま流れるように白式の懐に入った黒式が、俺の顎を手の平で打つ。最後に白式を軸に黒式はくるりと半回転し、その胴を偽・雪片で薙いだ。

その間、僅か〇・〇〇一秒弱。

人間が知覚できるはずもない世界で起こった出来事に俺は言葉もなかった。

「こ、これが箒の単一使用能力なのか？」

「――解りません。これだけでは断定しかねますが、見る限りでは彼女の能力は『加速』としか言いようがありませんわ。直前に出ていた銀色の粒子はおそらく……身体保護用の特殊ナノマシンか何かでしょう」

成る程、これならば身体の調子が悪くなってもおかしくない。

……なら、急いで様子を見に行ってやらないと。

俺は幼馴染みで、ルームメイトだからな。

「セシリア、話はこれくらいにしよう。箒の様子が心配だ」

「……む。それはどういう意味ですの、一夏さん」

「ん？　なんだ。もしかして心配してくれるのか？」

「そ、そんな訳ありませんわ！　だ、誰が一夏さんを……」

……何だか凄い言われ様だ。

ただ、それが照れ隠しってのは何となく解った。

「ありがとう、セシリア。――じゃあ、明日から訓練頼む！」
「ま、待ってください！　わたくしも一緒に行きますわ」
　箒のためにと言ってくれる女子生徒が居たことが俺には嬉しかった。
　そのまま保健室を後にする。
　理想を失った俺は――かわりに目標を手に入れたのかもしれない。

「あの……一夏さん。闘ってる彼方……か、かか、格好良かったですわよ」
「――そうか」
　みんなが期待するというのなら応えてやろう。
　この身を持って全力で。
　――それが『織斑一夏』の誓いだ。

3／篠ノ之束（後）

　夜空に浮かび上がる白い姿は織斑千冬がよく見知ったモノだった。
　一点の染みもない白銀の装甲と、追随するように浮遊する左右対称の六枚羽根。
　装束から素肌が露顕する事はなく、武骨なその手にはひとつ、業物が握られている。
　フルフェイスのバイザーの奥に在るのはガランドウ。
　西洋兜は、寿命から解放された、不滅の騎士だった。もっとも、かの存在がその雄姿を世界に見せ付けたのは今から僅か、六年前の話だが。
「そうか、白式は『暮桜』だったか」
　千冬はそう洩らさずにはいられなかった。
　因果な話だ。嘗てこの世あらゆる凡てを己が手の内にした最強の

騎士が唯一、護りきれなかった者。自身を終焉へと導いた存在を、その力で守る。この矛盾。

――何と誉れなことか。

「それでは、眼の前に立つのは亡霊か？」

白銀の騎士は、けれど亡霊というほど不確かではない。現実にそこにいる。亡霊と言うなら、それは騎士を中心にして夜空を徘徊しているヒトガタの方だろう。

それは、全身装甲を施された『鉄の巨人』だった。七機総てが漆黒色をしている彼らは千冬の準備が整うのを、ただ待っている。

その姿は不確かで、時おり形そのものが夜空に溶けた。

千冬の頭上に在るのは白き騎士と、それを運びに来た黒の巨人達。

一連の光景はおぞましくない。

むしろそれは――。

「ふん――たしかに、こいつは魔的だ」

嘲るように千冬は呟く。

学園内に侵入者がいるというのに、この静寂。

無力な一般人ならともかく、あの生徒会長すら気付かない、この異常。

「結局、すべては盤上の駒――ゲームということか」

退路などありはしない。

勝負の行方など、彼女が決めた時点で決まっているのだ。――だと言うのに先程のあの取り乱しよう。

「――互いに弱くなったものだな、束」

幼馴染みの名を千冬は呼ぶ。

親しみを込めるように、ゆっくりと。

そうして、その瞳が開かれた時――。

世界は、変革を迎えた。

それは二つの月だった。

在り場所は学園の屋上、宿り主はそこに立つ――ただ独りの超越者。

ヴォーダン・オージェの輝きがそこに在る。
騎士と、見上げる千冬の瞳が交錯する。
交わす言葉なく、通じる必要さえない。
「――来い、『白騎士』」
ただ、当たり前のように千冬は騎士の真名を呼び、
当然の如く、究極は、伸ばした腕の中に納まった。

そこにインフィニット・ストラトスがいた。
起源にして、頂点。
完全にして、究極。
『越界』の王者が、そこに立っていた。

――聞き慣れた警告音が耳に響く。
見上げれば巨人達は皆、それぞれに得物を構えている。――ランスや、大型ブレード。どうやら騒ぎを大きくするつもりはないらしい。しかし――。
「随分と侮ってくれるな」
織斑千冬を前にして接近戦闘だと？
……嗤わせる。
白騎士がその手に握るのは一本の刀剣だった。刀身は裕に一メートルを越す、西洋剣。織斑一夏の刀剣型接近武器・雪片、その原型。
名を『雪片零ノ型』
つい、と黒髪が揺れた。
バイザー越しにある黄金が愉悦に歪む。
その、瞳に映るのは闘いなどではない。
「――腕試し、か」
風のない夜、声は長く中空に残響した。

巨人達の名は『ゴーレム』といった。

篠ノ之束が創り上げた無人稼動ＩＳシリーズ。
その特徴は人間では到底不可能な動作と、任務完了の為にはいかなる事柄も躊躇しない鋼の心。――此度の任務は『織斑千冬との接近戦闘。可能ならばその排除』
最低限の誓約は在る。
器物破損は最小限に、一般人への危害は赦さず、戦闘は対象がＩＳを装備し終えたのを確認してから――。
けれどそんなものだ。
たとえＩＳを纏っていようが彼らにとって人間を仕留めるなど容易く、この程度の誓約はそれこそ、何の意味もない。
マスターの下した命令の真意は図りかねるが、基より勝手な思考を許す機能など彼らに具わってはいなかった。――故に疑問を持たず、ゴーレムはその身を千冬の前に晒す。
差し向けた指先に殺意が籠もる。
異常を感知することも出来ず、気付けば内一機の胸元に白騎士の腕は置かれた。
ぐらり、と頭部が揺れる。既存ＩＳの身の丈を優に超える巨躯が震えた。
わずか、一撃。
「――――――」
それだけでスクラップに変わる。
ずぶり、と千冬は胸部から白騎士の左手を引き抜いた。行ったことは極めて単純。
ただ、力任せに装甲を握り潰したのだ。
手の内で輝きを放つＩＳコアを千冬は呆と見つめる。
力無く、落下するゴーレムを白銀の竜尾が『喰った』
「ああ、処理はどうするのかと思ったが、勝手にやってくれるのだな」
それは白騎士の背後に位置していた筈の一つだった。銀翼はまるで融解するように形を失うとゴーレムを包み込み、そのまま己が一

部としてしまった。
ディスプレイの端に情報が流れる。――ＡＰシステムを応用した『強制融解結合能力』それが第四世代型として蘇った白騎士の実験機能の名前らしい。
「また悪趣味な真似を、」
これだけの事態を目にしても、巨人達は止まらなかった。人間には到底不可能な演算をすぐに行い、結果、出た戦術を迷うこともなく実行に移した。

――だが。
それよりも早く、千冬は動いた。

大型ブレードを保持する一機を武装ごと雪片の一閃が粉砕する。西洋剣の『切り裂く』ではなく『叩き潰す』理念を余すところなく発揮した攻撃だった。
「――ほら、追加だ」
また別の銀翼が捕食を開始する。それに興味を示すこともなく、次の獲物へと、千冬は移った。――狙うのならとりわけ胸の辺りがいい。
ＩＳコアを潰してしまえば即死だ。
このヒトガタが無人であろうと何であろうと、立ちはだかるのなら、誰であろうと打倒し尽くすのみ。
千冬は右手だけで雪片を掲げた。かの剣は剛剣であり重剣である。本来は両手で始めて運用できる業物である。
それをまるで容易く、白騎士は振るった。
鍔迫り合いになどならない。先程と同じようにブレードは折れる。武装を放棄し、殴りかかるゴーレムの拳を千冬は鬱陶しそうに払った。
「そんな粗末なものが当たるか馬鹿者」
そのまま右の肩から袈裟斬りにするように、左の腰まで白騎士の

マニプレーターが突き立てられた。片手でゴーレムを引き裂く。
だらり、と操っていた糸が切れたように巨人は音もなく落下していった。
それは深海の海に沈んでいく、玩具の人形のようだった。
――機体正面と後方左斜めより、ランスとブレードを持ったＩＳが接近してくる。
全方位視界より二機の姿を確認した瞬間、千冬は雪片を破棄した。
諸手が自由になった白騎士が彼らを迎え討つ。
追憶が許されるのなら、この先はゴーレムの稼働時間上でも初めてだったはずだ。迫る刃を白騎士は片手二本指で掴んだ。
そのまま刀身を逆間接に回し、ついでにと胴に蹴りを入れる。腕から零れたブレードを柄を逆手持ちにすることで保持した。
その次にはもう、ブレードは千冬の手を離れている
一拍を置いて――斬、と乾いた音がした。見ればランスを持っていた巨人の首が無い。メインカメラをやられたゴーレムの標準がずれる。そのランスの切っ先に千冬は自身の隣にいた巨人を叩き付けた。
「――雪片」
量子は刹那を待たず、雪片零ノ型を彼女の手元に呼び寄せる。
――戯け。
一言そう吐き捨てて、無用な鉄塊は他の三機と同じ運命を辿った。
あまりに弱い。実際、白騎士のスペックが高過ぎるだけなのかもしれないし、それとも織斑千冬が強過ぎただけなのかもしれない。
けれどそんなことは関係ない。
「ああ、退屈だ」
――それは唄うような呟き。
生きる事についてまわる悲喜交々、大小様々な束縛を常に千冬は感じている。
だからこそ、苦しみからの解放なんてものにも魅力を感じるのだ。
――フィッティングとファーストシフトが完了。確認ボタンを押

してください――

今更な事に思わず苦笑が洩れる。

直接意識に送られたデータを確認すれば白騎士はより洗練された形へと進化を遂げた。と、言っても見た目に大きな変化はない。

挙げるとすれば、羽根が六ではなく、七へと変わっていた。

そして武装も一つ増えている。

「――喰らえ」

それだけの号令で、背中にあった七枚の銀翼は視界に入った目標へと奔った。

BT兵器『白銀ノ魔弾』

自動支援プログラムによってエネルギーソード、エネルギーシールド、スラスターへの切り替えと独立した稼動が可能な白騎士の副兵装。扱いはビットとなる。

射撃を避けようとしたゴーレムの脚部を接近した銀翼が捻り切った。バランスを崩したところに光線が突き刺さる。最後の足掻きとばかりに振るったブレードさえ、エネルギーシールドに阻まれ、無意味。

そして残機を置いて唯一の例外も無く、白騎士に取り込まれた。

回収したコアは六つ。

それが白騎士の中で溶け合い、結合して唯のコアへと変貌する。

……単純にして七倍。

それ程のキャパシティを保有するコアが誕生した。

――成る程、これが最初から目的か。

自身の腕を確かめ、不要なら排除し、必要なら更なる力を与える。

幼馴染みと言えども容赦しないその頭脳。

「――前言撤回だな、弱くなったのは私だけだ」

今も昔も自分は束を頼りすぎる。そんな想いを漠然と千冬は抱いた。喜んでくれたから利用した。頼めばくれるから利用した。生きるために利用した。目的のために利用した。

相も変わらず、自分は借りっぱなしである。

――けれど、
その分の期待に応え続けたのもまた、事実。

篠ノ之束が織斑千冬を知るように。
織斑千冬も篠ノ之束を知っている。
――故に。
これが三度の目覚めを迎えたのは必然だった。

終幕を望むのならば一方的だ。
最後に残った巨人に白騎士を打倒する術は無く、あとはただ敗れ去るのみ。
――ならばこそ。
ここに七体のゴーレムが用意された意味に、織斑千冬は応えなければならない。
不意に、静寂が辺りを支配した。
それが殺気による無音だと巨人は最後まで理解できないだろう。
無機質だからこその無自覚。
知らないのなら幸せだ。
生身の人間だったら耐え切れない。――現在ここはそういう空間なのだから。
ゆっくりと、努めてゆっくりと……千冬は雪片零ノ型を構えた。
七対の銀翼がその形状を変える。
機は、満ちたり。
この戦の意味はこの瞬間の為に在った。
それをゴーレムさえも理解した。
柄を握る両腕に渾身の力を込める。
光が集う。輝きはさらなる輝きを呼び集め、眩く束ね上げていく。
雪片に結集したエネルギーはやがてその刀身を包み込み、一降り

の業物を創り出す。
輝けるかの剣こそ、ブリュンヒルデが証。
白銀の輝きが夜空を白夜に染めた。
白式と対を成すこれこそが、真の光。
ありとあらゆる敵を無へと還した必殺の剣。
基を――

「零落白夜」

ＩＳのイグニッション・ブーストは、後部スラスター翼からエネルギーを放出。
それを内部に取り込み、圧縮して再放出する事で、
莫大な速度を発揮する。
残光はまるで流星のようだった。
光の尾を描き、ただ真っ直ぐに通り抜けた先に。
ゴーレムの姿は無い。
いや、すでに存在しないと言った方が正確か。
白騎士が全力を持って発動した零落白夜は――既に対人の域を超えている。
ただの一撃はゴーレムの全身装甲を焼き尽くし、コアさえ残さず消滅させてしまったのだから。
「まったく――こんな力を私に持たせて、どういうつもりだ」
そのあまりの威力に呆然としていたのは実の所、ゴーレムだけだったのはどうでも良いことだ。白騎士が待機状態に移行する。
瞬間、周囲で何かが割れる音を千冬は聞いた。途端に虫の合唱が聞こえる辺り、防音は完璧だったのだろう。
「……寄生型か。まあ、いい」
千冬は屋上から立ち去った。
天上にはいまだ月がその口を大きく開けている。

とある少女の話をしよう。
誰よりも自分に忠実で、それ故に背反する彼女の物語を。

元来、『少女』は他人と調子を合わせるというのが得意ではなかった。
――天上天下唯我独尊。かの宗教に仲間入りをしたつもりなど毛頭無いのだが、当時、離婚間近で険悪な間柄だった両親ですら口を揃えて少女の人となりをそう、表現したことは記憶に新しい。
若輩ながら少女は失望したものだ。
そうやって理解したつもりになって――いったい、何様なのかと。
だから住んでいた国を離れるのと時を同じく、少女は祖国の軍に入隊した。
それは寄り添って生きてきた半身を引き離された子供のささやかな復讐であり、そんなふざけた大人の事情に自分を巻き込んだ半身の思慮の浅さに対する反逆だった。
昔から『歳をとっているだけで偉そうにしている大人』というのが少女は嫌いだった。
それは今現実に生きて、目の前に立つ大人達であり、国という存在でさえも、少女には例外ではなかったのだ。――少女にとって日本は第二の故郷であり、思い出の地であり、因縁の場所である。『人に歴史あり』とはよく言ったものだ。
容姿は日本人に似ているがよく見ると違う。この鋭角的でありながらもどこか艶やかさを感じさせる瞳は――中国人。
けれどその心の中には間違いなくジャパニーズとチャイニーズの両方が存在していた。
それを原因にからかうのはどこの国でも一緒だった。
そこに不満を抱いた事はあまりない。からかわれた経験ならある。

そしてそういう時の対処法は既に構築済みで、ところ一年程の短い帰国となったが、対処に追われたのは内の一週間ほどだった。もっとも、要因となったのはそれだけではないのだが。

――ＩＳランクＡＡ――

それが新兵入隊の一週間後に行われた適正試験で少女が叩き出した結果であり、以上を記した一枚の紙が少女の人生を大きく変えたと言っていい。

大人達が自分を前に頭を下げる光景は、けして気分の悪いものではなかった。

後もテストで高得点を重ね、年明け前には専用機が与えられる事になる。

ＩＳネーム『甲龍』

それが少女の力の顕現だった。渾名が持つ意味に少女が狂喜したのは言うまでもない。事象の概要、本質を言い当てたとすれば――。

『甲』は守りであり護り。守護の概念である。

『龍』は神獣であり霊獣。史記における中国皇帝の象徴である。

まだ十代の少女に祖国は守護者の役割を与えたのだ。

――彼方の威信を守り、侵略から御身を護る。

それは奪われた少女が望んだ、たった一つの願望。

特別であったが為に平凡な幸せさえ掴めず、特別であったが為に龍という至高の真名を与えられた少女の誉であり、咎であった。

――それだけ在ればいいと思っていた。

――それさえ有れば自分はもう失わなくてすむと想っていたから。

最早、適わぬ願いだからと諦めていた。

そんな少女を『天』は笑ったのかもしれない。

ある冬の日のことだった。

目覚めてみればどうも周囲が騒がしい。それは怒気とも驚喜とも聞こえた。――一瞬、戦争でも始まったのかと少女は考えた。少女

は既にこの世界がとても拙いバランスの上に存在する事を知っていたから。……確認してみれば、確かにそれは事件だった。
まさしく、世界を揺るがす――そんな規模の大事件。
男性がＩＳを動かした。
話がそれだけだったなら、きっと少女は愕かなかった。
それだけなら、『いつか来ると解っていた』事実でしかなかったから。

――ブリュンヒルデの弟がＩＳを動かした。
――織斑一夏がＩＳを動かした。

命に卑賤が無いことを少女は知っている。老いも若きも問う必要はない。全ては均しくひとつの単位で、そこには後付けの使用価値があるだけだ。
守護者となった少女は、少なくともそう思っていて――だからこそ分け隔てなく人々を救う事を絶対の価値観としていた。
だが、その男だけは違ったのだ。
『彼女』にとってそれは万人にも劣らぬ重さを持っていた。
とある男子のことを思い出す。お調子者のくせに、自分の信念だけは貫き通す底意地の熱い、今時珍しいくらいの気質を持つ幼馴染みを。
彼の歓喜する笑顔は彼女の心を満たし、彼の慟哭する声は彼女の心を震わせた。
彼はいつだって彼女の理由だった。だというのに彼はどこまでも鈍感で――誰かの為に一生懸命になれるのに、自分のことになると途端に目を逸らす。
そんな少年の一つの命と、赤の他人の無数の命が、天秤の左右に乗った時――彼女は、過った。その命を他者と等価のものとして、平等に尊び、平等に諦める。
守護者となった筈なのに、彼女にはその決断ができない。

気付けば、司令室へと走っていた。
風で髪型が崩れようが、汗で化粧が台無しになろうが、そんな事はどうでもよかった。
奔りぬき、力技で、この身を再び学生へと堕とした時――。
彼女は軍人ではなくなっていた。
現代において果報は寝て待ってなどいられない。
女尊男卑の世の中は心地いい。男の腕力は児戯。女のＩＳこそ正義。
それはかつて『男っていうだけで偉そうにしている子供』が大嫌いだった彼女にとって都合がいい世界だった。
こんな世界だからこそ、自分で走って行って首に縄を捲いてでも果報というやつは引き摺ってこなければいけないのだ。
それを理解し、行動に移した彼女に守護者は名乗れない。
そこには独りの凰鈴音しかいなかった。
たとえ誰かに罵られ、蔑まれても、これ以外は考えられない少女しかいなかった。どうしようもない想いに身を焦がし、ただ一人の彼の為に生きようとする彼女しかいなかった。

――ああ、こんなにも。
こんなにもあたしは……

織斑一夏が好きなのだ。
話はつまりそういう事で……それ以上などたぶん、ない。

◆

鈴音は今、ここにいる。
ここは用意された戦場。始まるのは殺し合いなどではない。
言うなれば代理戦争。あと少しの時を持って開始されるのは、そういうものだ。

国家の威信の為に行われる模擬的な戦闘。
将来、凰鈴音が立つであろう守護者の最上級――代表操縦者を目指すための道標。
そこで彼女は織斑一夏を待っている。
試合当日、第二アリーナの第一試合。噂の新入生同士の対戦とあって、アリーナは全席満員。会場入りできなかった生徒や関係者はリアルタイムモニターまで持ち出している。
それだけの価値が一夏と自分に在るというのが彼女には純粋に嬉しい。
――一夏さぁ、やっぱ私がいないと寂しかった？
――まあ、遊び相手が減るのは大なり小なり寂しいだろ。
――そうじゃなくってさぁ。
久し振りに会った彼は、最後にあった時よりも逞しくなっていた。根本の部分は変わらないのに、その表情には覚悟というものが増えていた。……もう少し、心が理解できれば言うことなしだが、それは高望みというものなのだろう。
思うならここから変えていけばいいのだ。
変わらないものなんてないのだから。
意識せず非固定浮遊部位――アンロック・ユニットを彼女は撫でた。立ち塞がる障害を悉く薙ぎ払う甲龍最強の武装はここに収納されている。
願わくば、これを使用せざるをえない状況を彼には望みたい。
おそらくは最初であり、最後であろう闘いを最高のモノにしたい。
「――待たせたな、鈴」
「別に」
唇から零れた言葉は存外、素っ気無いものだった。
普段なら感情が高ぶって、思っている事の半分も伝えられない自分に憤っているというのに、今日に限ってはこれでいいのだという無根拠な確信がある。
「一夏、どうしてもって言うなら少しくらいレベルを下げてあげる

わよ？」
「……そんなのいらねえよ。全力で来い」
――安心した。これは、強がりでも何でもない。セシリア・オルコットや篠ノ之箒との試合でもそうだったが、一夏は真剣勝負で手を抜くのも抜かれるのも嫌う。
勝負とはそういうものだ、と彼は言う。
全力でやって初めてそこに意味が生まれると。
「一応言っておくけど、ＩＳの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられるんだから」
それは脅しでも何でもなく、本当の事だった。ＩＳ操縦者に直接ダメージを与えるだけの装備は実際に存在している。勿論、それは協議規定違反だし、何より人命に危険が及ぶのを彼女は嫌っていたが。今一度、認識してくれれば良いと思った。
自分が立つ場所の意味を一夏に……。
その価値を共有したかった。
「――それでも、俺はここにいる」
たったそれだけ彼は答えた。
「そう……、相変わらず莫迦ね」
「うるせえ」
後に言葉はない。
甲龍と白式はただ、開始の時を静かに待っていた。オープン・チャンネル越しに聞えるのは互いの呼吸音。それが何故か心地好かった。
『それでは両者、規定の位置まで移動してください』
アナウンスに促され、彼と彼女は空中で向かい合う。その距離は約五メートル。既に、互いにとって必殺の間合いだった。
「そうだ……鈴」
「ん？」
思い出したように一夏は口を開く。

「お前に言われてから約束についてずっと考えてたんだけどさ」
「え、ちょっ……ま、待って！」
慌てて回線をプライベートモードに切り替えた。
「……どうしたんだよ、そんなに慌てて。顔、真っ赤だぞ？」
「だ、誰のせいよ馬鹿！　……それでどうなのよ？」
「ああ、言葉自体は思い出したんだ。けどさ、あれってそのままの意味じゃないだろう？　たぶんだけど。箒に言っても教えてくれなかったんだ」
――なんだと。
頬が引き攣る感覚を彼女は自覚できた。――それと共に猛然とした怒りが湧いてくる。危うく怒鳴りつけそうになるのをどうにか彼女は堪えた。
冷静に。……あくまで冷静に。一夏が鈍感なことなど、知っていたではないか。ソレに気付かない可能性など在り過ぎて困るくらいだった。
解らないのならまだいい。
曲解していないのなら及第点。
「――そう。なら、こうしましょう。この試合で一夏が勝ったら、あたしの言葉の意味、説明してあげる。だからあたしが勝った時には言うこと一つ聞きなさい」
「……なんで、そうなるんだ？　考えたんだから、教えてくれよ」
「煩いわね。だいたい女の子との約束をちゃんと憶えてないなんて失礼なのよ。分かる？　今の一夏、男の風上にも置けない奴って言われても仕方ないんだから」
「随分な言われようだな。まあ、箒にも『犬に噛まれて死ね』って言われたからな……。俺がやっぱり悪いんだろうか？　……分からん。まあ、いいさ。交渉成立だな。俺が勝ったらちゃんと教えてくれよ、鈴」
どうやら謀は上手く行ったようだった。
勝っても負けても悪くない条件に彼女は笑みを浮かべる。――け

れど、どうせ美味しい思いをするのなら。自分優位で進めた方が都合が良いに決まってる。

アナウンスを待たず、大型青龍刀――近接戦闘武装『双天牙月』を手元に呼び出した。それを見た一夏が慌てて、雪片弐型を抜き放つ。

様々な思いが交錯する試合が始まろうとしていた。

彼は自分の為に。

彼女はそんな彼の為に。

『それでは両者、試合を開始してください』

鳴り響く音は遅れて聞えた。それがＩＳの補助機能によって超感覚とも形容すべき状態になった二人が『ブザーの音だった』と認識する頃には、状況は既に余談を許さぬモノに変貌していた。

物理的な衝撃をもって白式が後退させられる。雪片による受け流しを間に置いてなお、ＩＳが後ろに下げられるという事実が、鈴音の双天牙月の威力を物語っていた。

状況は瞬時加速を駆使した接近戦闘。余計な小細工を労する暇など与えられず、剣戟のみが交錯する。この状況を望んだのは一夏であり、鈴音でもあった。

零落白夜が当代で最強の戦術武装であることは否定のしようがない。圧倒的な変換効率を持って相手のシールドエネルギーを喰らう。

ならばこそ、甲龍は最上の相手のはずだった。一夏は自身の単一使用能力を防ぐ方法を知らない、思い当たらない。

事実にして対エネルギー消滅能力の対策など鈴音の甲龍は有していない。――しかし、それが一方的な一夏のアドバンテージになるのかと言えば、答えは否だ。

必殺を除けば接近武器しか装備しえぬ甲龍でも白式と対等に討ち合う方法くらい彼女は思いつく。

――すなわち、思考を赦さぬ超高速接近戦闘。

本能が支配する状況で活きるのは経験と反射のみ。
そしてそれだけであれば、鈴音は一夏を凌駕する。
異形の青龍刀が舞う。両端に刃の付いた……いや、刃に持ち手が付いているそれは、縦横斜めと彼女の手によって自在に角度を変えながら切り込んでくる。
それを寸前で避けるのは単に一夏の才覚によるところが大きい。
織斑千冬は言葉でもって『一つのことを極める方が、お前には向いている』と織斑一夏を表現した。その答えがここで示される。
横殴りで振られた双天牙月と雪片弐型が接触した。物体は横からの衝撃に弱い。まして日本刀を模して造られた雪片では折れても不思議ではない。
それ程を思わせる鈴音の一撃が放たれた。しかし次の瞬間に警告が発信されたのは白式ではなく、甲龍。意味も解らずに距離を取れば、下腹部を雪片の刃先が薙いでいった。
「――へえ」
その意味を理解し、鈴音の背筋が冷える。
雪片は確かに双天牙月と接触していた。ならばこの攻撃はその後、甲龍の一撃を完全にいなしきった後に放たれたのだ。
どんな道理があれば横からの衝撃を零へと還せるのか、剣術の専門家ではない鈴音には判別できない。けれど一夏がそこまでの剣道家ではない事を彼女は知っていた。
向こう三年、全く剣に触れていなかった人間が、たかだか一ヶ月程度で取り戻せる勘ではない。――織斑一夏はこの点において間違いなく、天才なのだ。
姉の千冬がそうであったように。
驚嘆すべき遺伝子の差を見せつけられた。しかし、これでこそと鈴音は笑った。
そんな彼方だからこそ、甲龍の全力を見せるに相応しい。
「やっと距離が開いたな、鈴。――なら、決めさせてもらうぜ」
雪片の刀身に黄金の粒子が結集する。――単一使用能力・零落白

夜の輝きは予想以上に美しかった。そういえばと鈴音は思い出す。
今後のデータ解析の為、一撃アレを受けてきてほしいと言った技術者が何人か居た。
「冗談。装甲どころか、パーソナルデータまで吹っ飛んじゃうわよ」
――あんな高密エネルギーの塊を回路に受けたら。
ＩＳは量子分解を可能としているが、展開時には擬似動力回路を装甲裏に発生させて、エネルギーを循環させている。それを断ち切られてしまえば、少なくともこの試合中に回復することはない。
可能性がある以上、何があってもダメージを負う訳にはいかなかった。
たとえどんな手段を使っても、だ。
スパイク・アーマーがスライドする。中心に在る球体がキチキチと妙な音を鳴らした。
それが光る時、闘いは第二ラウンドを迎える。

切りかかる白式を前に、
甲龍の咆哮が轟いた。

眼に見えない衝撃に一夏は『殴り』とばされる。
一瞬ぐらりと暗闇に傾きかけた意識を寸前で取り戻し、回避行動をとろうとするが――遅い。牽制の後に来るのは、本命と決まっている。
眼に見えないナニカに殴られ、一夏は地表に叩きつけられた。
そこに容赦のない鈴音の連弾が加わっていく。

◆

「――また、随分と面白いものを持ち出すな、オオトリ」
ビットからリアルタイムモニターを見ていた箒が呟いた。
服装はいつもと変わらぬ和服姿。それがＩＳだと知る者はまだ少

ない。
「どういうことですか、篠ノ之さん」
その呟きに反応したのは、同じくモニターを見ていたセシリアだった。
「『衝撃砲』――」
「――ああ、成る程。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して打ち出す……ブルー・ティアーズと同じ第三世代型兵器ですか」
理論だけはセシリアも知っていた。しかし、実物はやはり違う。見ているだけでも十分に脅威だが、現在闘っている一夏はそれ以上のモノを感じているだろう。
「――くそ。約束さえなけりゃ、私があそこに立ってたはずなのに」
惜しいことをした、と続いた言葉にセシリアは苦笑を洩らした。最近付きあいはじめて判ったのだが、彼女は見た目や言動とは裏腹に意外と子供のような一面を持っている。
部屋に異性がいても気にしないのはその為だ。
あの篠ノ之博士にしては珍しいと表現すべきなのか、篠ノ之箒は男女間に於ける知識、というのものをまったく与えられていない。
会話をしていて気が付いたのだ。彼女は人を好き、嫌いと思うことがあっても、そこで思考が終わってしまう。――まるで小学生のように、それ以上を知らないのだ。
その結果があの戦闘方法なのだとすれば、蓮姫は間違いなく篠ノ之箒専用なのだろう。
カタチが決まらなければ、どんなモノでも許容できる。
自分が無ければ、誰であっても構わない。
そういう自論を元に創られたのなら、この少女とＩＳは均しく同体なのだ。
もしも仮に、あそこに立っているのが一夏でなく彼女だったら、いったいどんな試合をするだろう。――もしも自分だったら、どうやって攻略するだろうか。

視線を再びモニターに戻しながら、在り得る筈もない想像をセシリアは巡らせていた。

◆

「よくかわすじゃない。『龍咆』は砲身も砲弾も眼に見えないのが特徴なのに」

鈴音はそう言って笑った。……そう、一夏はよく避けている。砲弾が見えないタイプの兵器はさして珍しくない。しかしこの機体は距離を測るための基準である砲身そのものを見えなくすることで相手に間合いを計らせない、新理論が起用された実験兵器なのだ。

――無制限式空間圧縮砲『不可視ノ魔弾』

元々が篠ノ之博士の残した研究から始まった龍砲は、砲身斜角にほぼ制限を持たない。

射線自体はあくまで直線だが、上下左右、真後ろまで展開が可能なこの兵器に、死角は存在しなかった。それに鈴音の高い操縦技術が加わる時、兵器は『龍』へと変わる。

凰鈴音は才能に恵まれている訳ではない。一夏のような剣技も持たなければ、セシリアのような超射撃といった一点突破の才覚を彼女は保持していなかった。

しかしそれこそが甲龍に搭乗する条件なのだ。燃費と安全性を第一に開発され、あらゆる戦場を想定し、どんな局面にも対応できることを求められた究極の凡庸人型兵器。

無制限機動と全方位への軸回転、基礎のすべてを高いレベルで習得したからこそ、甲龍は鈴音の専用機としてここに在る。

（ハイパーセンサーに空間の歪み値と大気の流れを探らせてはいるが、これじゃ遅い！　撃たれてから解っているようなものだ。どこかで先手を打たなくては……）

「何考えてんのか知らないけど、防戦ばっかじゃ勝てないわよ、一夏！」

既に何度目かとなる甲龍の疾走。瞬時に振りかぶった雪片と双天牙月が接触する。刃と刀身が重なり、金属特有の鈍い摩擦音が周囲に響く。一打、二打、三打――。

火花が散り、視線が交錯する。

そんな中、鈴音を襲った衝撃は白式の蹴りによるものだった。…一夏は二本の腕では足りず、三つ目の武器を――足技を使い始めたのだ。

それは今回のクラス対抗戦において、一夏が練習していた技術だった。

――白式には雪片しかない。

自他共にあったその認識を、一夏は利用したのだ。

それは錬度こそ低いが、まったく無意味という訳ではなかった。

剣戟に合わせ、繰り出される蹴りはたいした威力こそ無いものの、確実に甲龍のシールドエネルギーを削ることに成功していた。

……しかし鈴音は少女である。幾ら試合だから、幾ら相手が好いている一夏だから、と言ってその暴挙を許せるものか。――否、道理として彼女は怒り狂った。

打ち合いを続けながらも、龍砲は再び、紅き輝きをその砲門に燈した。

それを視認し、慌てて回避しようと一夏の腕を咄嗟に鈴音は掴む。にこりと笑ったその表情は、けして聖女の微笑みなどではなく、怒るケモノの猛りだった。

悪寒が奔る。

衝撃が左肩と右膝を撃ち抜いた。上半身と下半身がそれぞれ逆の方向に回転する。ＩＳの操縦者保護機能がなければ捻じ切られていた――。

その事実に根源的な恐怖を感じ、一夏は無理矢理に距離を取った。

「――ふん。次なんてないからね！」

……もう一度同じ事をすれば今度は容赦なくやられる。

言葉に出さずともそれは理解できる。もし鈴音が本気ならば一夏

はこうして立ってなどいない。全身の骨を叩き折られ、今頃は痛みのうちに転げまわっていただろう。

たとえ勝負事といえど越えてはならない一線がある。

しかし、ならばどうすれば甲龍を攻略できる――。

零落白夜が鈴音には通用しない。効果があるとしても、甲龍の本体に届かせる為の技量が一夏には足りない。――それでも、織斑一夏に諦めることなど赦されなかった。

「鈴」

「なによ？」

「悪かった。――本気で行くからな」

普通に考えればその実力差は歴然としていた。加えて鈴音はセシリアとは違い、余程のことがない限り、戦闘中は冷静なタイプだ。こういう相手は基本的に強い。

そんな相手との実力差をナニカで埋めるとするなら、それは心しか一夏に思い浮かばなかった。気持ちだけは誰にも負けない。その意志が絶望的な闘いにも一筋の巧妙を差す。

――根拠なんて在りはしなかった。しかし戦術も戦略も満足に持たない少年が勝つには最低条件としてそれだけは、相手を圧倒していなければならなかった。

努めて真剣に。

彼は彼女だけを見つめた。その艶やかな瞳の奥を見透かそうと、感覚を研ぎ澄ました。その気概に押されたのか、鈴音は少し曖昧な表情を浮かべる。

「な、なによ……そんなこと、当たり前じゃない……。と、とにかく、格の違いってのを見せてあげるわよ！」

甲龍が両刃青龍刀を一回転させて構え直す。白式は衝撃砲がその砲火を吹く前に距離を詰めようと加速体勢に入った。

奇襲は既に通じない。敵機は飛び道具まで装備している。

状況は笑えるほどに絶望的だ。けれどここで攻めなければ、あとは衝撃砲でじわじわと擦り減らされ、敗北するのが関の山。

思えば一夏はまだ一度も勝っていなかった。ならばそろそろ勝ち星というのを揚げてもいい頃合いではないか。――たとえ無茶をしてでも。

白式が跳ねた。

甲龍の元へ一直線に――

客席で見ていた誰かが芸の無い奴だと一夏を哂った。

そいつを莫迦だと鈴音は嗤った。

織斑一夏が客寄せマスコットでないことは彼女が一番解っている。

そう、一夏はけして道化などではない。ならばこの攻撃が――。

――無策で無謀な特攻などであるはずがない。

龍砲が放たれる。けして捉えられない不可視の弾丸が一夏を襲う。

それは知らない者の言うとおりなら一夏に直撃するはずだった。けれど、知っている者の想像通りなら――。

かわすだろう。

間違いなく。

――『白』が揺れた。

在り得ない方向に、在り得ない角度で。

吶喊してきた白式が――歪る。

瞬時加速。……それは理解できる。

――けれど。

この回数はなんだ。真上真下真後ろ真ん前。放った数と同じだけ、白式が曲がる。Gを気にもせずに、無茶苦茶な軌道を描きながら、それでもただ、真っ直ぐに此方へ来る。

それは連続瞬時加速、リボルバー・イグニッション・ブーストと呼ばれる技術だった。その理論自体なら、既に開発されている。けして不可能な代物ではない。

けれどこれは、素人が、何の予備動作もなく行っていいようなものでもない。専用の器材を用意して、然るべき環境でのみ行わなけ

ればこれは――。
ただの『自殺』と何も変わらない。
鈴音は当然そのことを知っている。
必然で手に入れた居場所だから。
一夏は当然そのことを知らない。
偶然で手に入れた居場所だから。

上げた悲鳴はどちらのものか。
気付けば駆け出していた。
その黄金も、龍砲も、警告も、二人の目には入らない。
ただ、この一瞬がすべてだった。この一度の交錯で、何もかもを終わらせなければ――ナニカ、とても大切なモノを失ってしまう気がしたから。
金属音を起点に、甲龍のシールドエネルギーが喰い潰されていく。
白式の全身を所構わず、不可視ノ魔弾が蹂躙していく。
終わること、留まることを知らない減少が、ついに互いに残り一〇〇を切った時――。
「っ――！？」

衝撃がアリーナ全体に奔った。
範囲も威力も桁違いな一撃が、天上に穴を開けた。

「な、なんだ？　何が起こって……」
状況が判らず、混乱したのは一夏と鈴音の二人。
『織斑、凰！　試合は中止だ、すぐにピットに戻れ』
アナウンスから滅多に聞くことのない織斑千冬の『焦り』を聞き、そこでやっと二人が事態の異常を覚った頃にはもう、ソレは来ていた。
ＩＳのハイパーセンサーが緊急通告を発信。

――警告！　ステージ中央に熱源。正体不明のＩＳと断定。ロックされています――
「なっ――」
アリーナの遮断シールドはＩＳを参考に安全を考慮してより強固なものが張られている。それを貫通するだけの攻撃力を持った機体が乱入、此方をロックしている。
それはつまり――。
「一夏――！」
「――あ、ああ！」
侵入者が現れたのだ。
このＩＳ学園に、正体不明機なんてものを持ち出して。
対策を話し合う時間など与えられなかった。
煙の中に光る何かを見た瞬間、奔った悪寒。一夏は鈴音の身体を抱きかかえてさらう。直後、先程までいた空間を熱線が通り過ぎた。
「――ビーム兵器かよ。……しかもセシリアのより出力高いだぜ、アレ」
センサーの簡易解析でその熱量を知った一夏が、呆然と呟く。
「ちょっ、ちょっと、馬鹿！　離しなさいよ！」
「お、おい、暴れるな。――マジでやばいぞ、鈴。心当たりは？」
「――――あるわけないでしょ。勝負の邪魔して、いったい何様よ、あいつ」
「同感だ――来るぞ！」
煙を晴らすかのようにビームの連射が放たれた。
それをかわすと、射手たるＩＳがふわりと浮かび上がってくる。
「なんなんだ、こいつ……」
その姿からして『異形』だった。深い灰色をした目の前のＩＳは手足が異常に長く、つま先よりも下まで伸びている。しかも首というものがない。頭と肩が一体化している。
何より特異なのはその、けして肌を見せることのない全身装甲だ。
通常、ＩＳは部分的にしか装甲を形成しない。それは防御の殆ど

がシールドエネルギーを介して行われる為に必要がないからだ。故に見た目の装甲というのはあまり意味をなさない。防御特化型のＩＳが物理シールドを搭載しているなどの差異はあるが、それにしてもただの一部も肌が露顕しないＩＳなどは聞いたことがなかった。

そしてその巨体が、侵入者が普通ではないことを物語っている。

腕を入れれば二メートルを越える巨体は、姿勢を維持するためなのか全身にスラスター口が見て取れる。頭部には剥き出しのセンサーレンズが不規則に並び、腕には先程の砲口が左右合わせて計四つ搭載されていた。

「――お前、何者だよ」

「■■■■■■■」

謎の侵入者が返した言葉を一夏は理解できなかった。念の為に鈴音を仰いだが、返ってきたのはお手上げのジェスチャー。……どうやら侵入者は底抜けの莫迦か、人語を解さぬ狂人らしい。

『織斑くん！　凰さん！　今すぐアリーナから脱出してください！　すぐに先生達がＩＳで制圧に行きます！』

割り込んできたのは常時、千冬と一緒にいる山田真耶の声だった。

――心なしかいつもより声に威厳がある。……常にそうなら生徒に舐められたりしないのにな、と一夏は少し不謹慎なことを考えた。

「――いえ、先生達が来るまであたしと一夏が喰い止めます」

あのＩＳは遮断シールドを突破してきた。ということは、今ここで誰かが相手をしなくては観客席にいる人間に被害が及ぶ可能性が否定できない。

表面上は冷静に、鈴音は返事を送った。その心中はけして穏やかではない。――まさかこんなタイミングで始めての『実戦』を行うことになろうとは……武装自体は問題ない。

しかし、シールドエネルギー値は既に限界間近だった。それでどこまで持つかは正直、解らない。けれどここには一夏がいる。

――彼だけは護り抜く。

それが出来なければ、自分がここに存在している意味が無くなっ

てしまう。
「大丈夫、一夏」
それは励ますための言葉だった。
不安で怯えている一般人を守るための言葉だった。
「――当たり前だろ、お前を残して逃げれるかよ。それよりそろそろ放すぞ」
「……ああ、うん」
けれどすぐに思い知らされる。
ここに一般人など――護るべき者などいるはずもないことを。
ちょっとだけ名残惜しく思いながら、鈴音は一夏の手を離れた。
『織斑くん!?　凰さん!?　だ、駄目ですよ！　生徒さんにもしものことがあったら――』
聞けたのはそこまでだった。敵ＩＳが身体を傾けて、突進。それを避けるために二手に分かれる。流れのまま放たれた甲龍の衝撃砲、直撃。――しかし、ダメージの程は不明。
むしろ物ともしていないようにも見える。
「――ふん。向こうはやる気満々みたいだな」
「ホント、迷惑な話ね」
白式と甲龍が横並びになってそれぞれ得物を構えた。
そこに在るのは護る者。
理不尽な暴力を打倒せんと立つ、意志の顕れ。
悪意に膝を屈さぬ戦士の姿だった。
「一夏、衝撃砲で援護するけどあくまで時間稼ぎよ。忘れないで」
「そうだな。――でも、倒しちまってもかまわないんだろ？」
「――勿論よ。やれるんなら、一刀両断しちゃいなさい」
雪片弐型の剣先が敵ＩＳの額を捉える。――それが合図だ。
「分かった。じゃあ、行くか」
即席のコンビネーションであるが、不安などある訳がない。
だってここにいるのは、彼と彼女なのだから。

／寂滅為楽

一般生徒の誘導は比較的速やかに行われているようだった。
青髪の更識という上級生は非常事態だというのに、笑顔を絶やすこともなく、学生達に的確な避難指示を与えている。
それが彼女の役割なのかどうかは知らないし興味もないが、たとえ独断だったとしてもその行動は称賛に値するはずだ。――ならばそれを後目に通路を逆走する私達は、きっと愚かなのだろう。
「――いいのか、セシリア・オルコット」
「勿論ですわ、箒さん」
人波に逆らいながら進む最中、零した言葉をセシリアは律儀に拾った。私にこんな風に接してくるのは、入学してもう二人目だ。
頼んだ訳でもないのに、彼女は私の在り様を心配する。
知り合ってまだ、一ヶ月少しの人間をどうしてそこまで思えるのか、理解が及ばない。……けれどそれは心地好いのだ。
そう認識してしまっている『篠ノ之箒』がいた。
「生意気だよ、キンパツ。……解ってんのか、自分の立ち位置が」
「友人を助けるために奔走する美少女、なんてどうでしょう？」
「はっ、そりゃ傑作だな」
あれだけ代表候補生であることに拘っていたのが、自身の欲求のままに行動している。それは紛れもなく人間だった。
私の隣に人間がいる。
身近な出来事さえも不確かな私にとっては遠く、それこそ無価値だと思っていたものがこうまで身近にいる。
名前も知らない連中なんて、朝の陽射しより印象が弱い。
その認識はこれからもたぶん、永遠に揺らがない。
――それ故に、少数たる例外は私をここまで駆り立てる。
理由のない高揚を感じ、気付けば私はＩＳを纏っていた。
漆黒色の振袖が風になびく。

簪の先端に付いた鈴がちりん、と音を鳴らした。
「――そうか。お前もか、蓮姫」
彼女は多くを語らない。
だからこそ今日は余計に判ってしまった。
――蓮姫は過去に見ないほど興奮している。
まるで求めていた物を買ってもらえることになった子供のように。
彼女はこれ以上ない昂りを覚えている。
「誰にも負けてないし、弱いなんて言わせない」
いっくんとオオトリの一戦を妨害したこと、それ事体が万死に値する。しかし、それを差し置いてなお、アレは私の獲物だ。
間違いない。滅多にない血流の滾りが、それを証明している。
――アレは人間なんかじゃなかった。
私達によく似た、けれど決定的に違う紛い物。
まるで私のような異物。
思えばそれは、同族嫌悪という感情だったのかもしれない。
胸の内に在るのは、圧倒的なまでの『相容れない』という確信。
それがナニカなんてどうでもいい。
「――気に喰わないなら、壊すだけだ」
「……箒さん？」
「行くぞ、セシリア。界を越えればすぐだ」
私は欲望と救済、どちらもこなす。

アリーナの客席に人影は無い。
まるでガランドウな空間に響くのはＩＳの駆動音とそして空気を震わす炸裂音だった。戦闘は一進一退。……まるで面白味に欠ける光景が目の前では展開されている。
「――冗談も過ぎるだろう、あの侵入者。同じ軌道に同じ動作……。二人が全快ならそれこそ一方的だぞ」
「だからこそ、極力削らせてから侵入したのでしょうね。……まあ、

下賤な鼠にしては、少しばかり知恵があるようですけど――不愉快ですわ」

障壁さえなければ今すぐにでも終わらせるのに。

ブルー・ティアーズを展開したセシリアは忌々しげに侵入者を仰いだ後、すぐに視線を此方に戻した。

「――さて、問題はいったいどうやってこのシールドを突破するかです。軽く解析を掛けてみましたが……やはり競技用として調整されているわたくしの機体では、直接な破壊は難しい。しかしこのまま燻っている訳にもいかない。状況は非常に切迫していると言っていいでしょう」

「知ってるさ、そんなこと。――アレがやったように火力を集中させて強引に突破でいいんじゃないのか？」

それが一番解りやすくていい。そう思っての提案だったのだが、蒼い雫から送信されてきたデータがその認識を容易く打ち砕く。

「――遮断シールドをレベル４に設定？　莫迦か、そんなことしたら一夏達が……」

「それが敵の狙いなのでしょう。フィールドに続く扉もすべてが閉鎖、揚句に情報網すら遮断されては最早、織斑先生とてお手上げですわ」

「つまり非難も救助も事実上不可能ってか？　……それじゃあ、私達も役立たずと変わらないじゃないか」

一夏達が善戦できる事情がこれだと言うのか。――敵性ＩＳは戦闘用ではなく、情報戦特化型。目的はおそらく一夏、白式の情報収集。

なら少なくとも二人が殺害されるという可能性はここで霧消する。

しかし、それは身の安全が保障されるという意味ではない。

むしろ殺されない程度なら許されるという認識自体がどうしようもなく危険なのだ。

「――ふざけた真似をしてくれます」

蓮姫で侵入者の姿を模倣するか。――けれどそれで障壁を破れる

保障などどこにある。侵入者は情報収集後、自爆する可能性だってあるのだ。

そんな狂信じみた行動をとる連中に、残念ながら私は心当たりがあった。

「『蜘蛛』の借りが高く付いたか……？」

「どうかしましたか」

「いや、何でもない。――しかしどうする」

このままでは一夏達が。

そう続けようとした――その時、蓮姫の視界が人影を捉えた。

「そうですわね……」

「――まて、セシリア」

言葉を紡ごうとした彼女を遮り、視線だけで人物の方向を示す。

それだけでＩＳならば認識できるはずだ。全方位視界が対象を補足したのだろう。

セシリアの表情が変わった。

（……どう思います、彼女）

（見た目は一応、この学校の生徒だな）

その少女はリボンの色から二年生だと解った。――小柄な体型に癖毛なのかやや外側に跳ねている亜麻色の髪。

先輩はなにやら熱心に遮断フィールドのエネルギー障壁を見つめていた。……システムクラックは三年の精鋭チームが担当しているはずだ。なら何故この人物はここにいる。

――敵か味方か。

意識せず、私は蒼い雫を模倣した。黒い雫の背中からフィン状の鉄塊が一つ、静かに飛翔する。それはある程度、距離をとった後、先輩に向けてその銃口を向けた。

「……箒さん」

「――解ってる。保険だよ、ただの」

責めるような口調のセシリアにそう返事をして、私は先輩の背後に歩み寄る。

それはあくまで確率の問題なのだ。
状況を前に軽率だとは思うが、何せ私達には時間がない。
「何してるんですか、先輩」
偶然を装うように私は声を掛けた。
「見て判らないかな、突破口を探っているんだよ」
返答はしっかりとしていた。振り向いた先輩の顔立ちは理知的な美形を思わせる。その佇まいは自信に溢れていて――とても、疚しいことをしているようには見えなかった。
「ふん、誰かと思えば篠ノ之嬢にオルコット嬢か。客観的に見た時、わたしがあやしいと言うのは否定しないが、それでもいきなり銃口を向けるのは止めてほしいな。この身は、ＩＳを装備しない限りは無力なのでね」
雰囲気の割には多く言葉を語る先輩だった。……その様子から安全だと判断したのか、セシリアも私の隣に来ている。私達の姿を見て、先輩は一瞬、眉根を寄せた。
「――成る程、一度じっくり見れば考えも変わるかもしれないと思ったが、やはり認識はそう簡単には変化しないものらしい。いや、此方の話だよ。それで質問はそれだけかな？　ならばわたしは作業に戻りたいのだが」
「――待ってください。先輩はどこで私達の名前を？」
「おいおい。自覚が足りてないのか、有名人。入学早々、クラス代表を巡って織斑一夏と対戦した女子生徒と言えば、話題として誰でも名前くらい知っているよ。それが二人とも専用機持ちで、さらに片方がかの篠ノ之博士の妹君となれば尚更だ」
――もっとも、わたしも間接的ではあるが参加したのだがね。
そう言って微笑を浮かべた先輩の顔を見て、私には思い当たる事があった。
「……アンタか、一夏に余計な知恵を与えたのは」
「理解してもらえたようだね、篠ノ之嬢。そうだ、自己紹介が遅れたね。時間が切迫しているので、簡潔にさせてもらうが、二年の田

端野埜ノ子だ。よろしく、二人とも」
――ナニカが引っかかった。
けれど、その具体的な形までは判らない。
ただ、私の中で二つの確信が浮かぶ。
こいつが敵だという直観と、そんな筈がないという実感が。
切迫した状況で会話を引き継いだセシリアを横目に結局、私は実感を信じた。何であれ今は味方が一人でも多い方がいい。そんなつまらない判断を下した。
「それで先輩はどうやって、この遮断フィールドを突破するおつもりですの？」
時間が惜しいとばかりにセシリアが本題を口にする。
眼下では既にまったく同じ攻防が七度目を迎えようとしていた。
「『束』を破壊するつもりだ」
「……よく知らないが、専門用語か」
「ああ、言葉自体は篠ノ之博士の造語だがね。聞いたことはないかい？
『万物には全て綻びがある。人間は言うにおよばず、大気にも意志にも、時間にさえも』
……完全と言う現象が否定される以上、物事は発生した段階から崩壊に向かって進む。ならば既存構成物質の密度が高い部分、つまりは情報や伝達系がもっとも『束ねられた』箇所を破壊すれば、おのずと崩壊が早まるのは道理だろう。始まりがあるのなら終わりがあるのはまた当然なのだからね」
説明を行いながらも田端野の作業は止まることはなかった。速くもなく、遅くもなく、壁に置いた手と目前に表示されたモニターを見ながら作業を進めていく。
「……本当にそんな作業で判るのでして？　専用の機器が必要なんじゃありませんの」
「本来なら。ただ、作業に従事してる三年生を見る限り、今回はこれが一番有効なんだ。――あのＩＳはおそらく情報戦を得意とする

機体なんだろう。だから時間が掛かってる。機械の領域で人間が勝てる訳なんて万が一にもありはしないのだから、どんなに面倒で、非効率でも……今はわたしの方が早い」

そんな彼女を見ていて一つ、違和感の正体に私は気付いた。

――こいつはどこか篠ノ之束に似ている。

背格好も話口調も違うのに、何故そんなことを思うのか。――それはおそらく、物事に取り組む姿勢が三年間見ていた姉によく似ていたからだろう。

ただ、田端野の系統と属性は私達とは真逆だ。探る者、使う者。

そんな言葉が彼女にはぴたりと当て嵌まる。暫し無言の時間が続いた。それは果たして数分だったのか、それとも実は数秒だったのか。機能的な手捌きは芸術染みていて、彼女の非凡さを窺わせた。

思わず見入っていた私にセシリアが苦言を呈す。

気付けば田端野も苦笑を浮かべていた。

「――不謹慎だが、そうも見つめられては、わたしも緊張してしまう。この程度の児戯、『篠ノ之』に見せるには値しないよ。それよりも、そろそろアタリが来そうだ。最後には結局、力技とは芸が無い話だが、分担を決めておくといい。破壊後、すぐに攻撃を仕掛けられれば、此方の優位で進められるだろうからね」

それは暗にもう少しで作業が完了することを仄めかした言葉だった。

頷き、蓮姫が再び姿を変える。それは黒き甲龍の姿だった。肩の横に付いたスパイク・アーマーが攻撃的な自己主張をしている。龍砲は使用可能。運用に問題はない。

『黒龍』は顕現した。

「――そうか。そうまでして、彼方はわたしに押し付けるのか。……いいだろう。なら、精々定められた役割に徹してあげる」

「……何の話だ」

「別に、ただの独り言さ。時々、無性に意味のない言葉を呟きたくなる。理由なんて特にありはしないよ。――さて、準備は整った」

遮断フィールドのある一点にレーザーポイントは穿たれた。同時、目前のディスプレイに情報が送られてくる。

――解除範囲、中心より約二メートル。展開時間約一・二九八三秒――

「今回は運が良い。けれどチャンスはこれ一度きりだ。逃せば『次』はないだろう。……大丈夫かい？」

「――問題ない。セシリアは私が開く間に侵入、先制攻撃で一夏達を援護。その後ろから蓮姫で続く」

「解りましたわ。……先輩はどうします？」

「わたしは遠慮しておくよ。――眠り姫を救うのが王子の役目なら、脇役は無粋な事などせずに裏方に徹するべきだろうからね」

「――意味は理解できますけど、性別が反対ですわよ、この場合」

「なに、問題ないだろう。男女の意味も価値も逆転したこの世界なら、な」

軽口はそこまでだった。

誰とも言わず無言になり、田端野は私とセシリアから距離を取る。力場展開翼が黒龍と蒼い雫の後部に広がった。瞬時加速は背後の座椅子を根こそぎ吹き飛ばしてしまうだろう。――これが終わればおそらく、ちーちゃんの説教と反省文が私を待っている。

何とも損な役回りだ。

誰かの為にとった行動で怒られるなんて、莫迦らしいにも程が在る。

かつての私なら、そんな非生産的な行為はしなかった。

けれど今の私は、そんな行動に意味を見いだせるのだ。

これが人間になるということなのだろうか。

……なら、存外、悪くない。

『偽・双天牙月』を抜き放つ。

構えは正眼。

漆黒の青龍刀が放つ鈍い煌めきは魔的なまでに美しい。

「――本当に悪平等だ。持つ者と持たざる者とではこんなにも違う。

性能の前に努力など無意味に等しい。……そうやってお前は何人凡人を喰らえば、気が済むんだ」

「さあな、そんなこと束に聞いてくれ」

尋ねられれば束は答えるだろうか。――いや、無理だろうな。

我ながら無責任な事を言ったものだ。

在り得ない話など語る価値すらないというのに。

「――――破っ！」

気迫と共に突き出された刃が赤い点へと突き刺さる。

起点より罅は広がった。

瞬間、割れるより速く、蒼い雫が障壁をぶち抜いて吶喊する。――無茶な真似をするものだ。セシリアにそんな行動をとらせる織斑一夏という男が純粋に羨ましいと思った。

――ああ、さよならだ。

イグニッション・ブーストの衝撃を全身に感じながら、私も後へと続く。

終焉の時は来た。

無粋な侵入者が裁かれる時は来た。

これより『もしも』など在りはしない。

目前の異形に残された答は一つだけだ。

◆

「くっ……！」

一夏の必殺の間合いによる斬撃はけれど、するりとかわされてしまった。

これでまた、チャンスを逃したことになる。

「一夏っ、止まらないで動き続けなさい！」

「分かってる！」

普通ならかわせるはずのない速度と角度から攻撃をしている。だというのに敵ＩＳは、全身に付いたスラスターでその連撃を避け続

けていた。――尋常な出力ではない。
零距離から離脱するのに一秒とかからない。さらに鈴音がどれほど注意を引いても一夏の突撃には必ず反応し、回避行動を優先する。お世辞にも連携は上手いとは言い難いだろう。
しかし片や天性の剣士、片や秀才の代表候補生である。この二人の猛攻を受け続けられる人間など国家代表か織斑千冬でもない限り在り得ない。
下手かどうか以前に、そういう戦力差なのだ。ＩＳにおいて、二対一とは余程の技量がなければそもそも成り立たないものなのだから。
（不味いな……）
シールドエネルギー残量がとうとう六〇を下回った。エネルギー無効化攻撃である零落白夜を発動できるのは、よくてあと二回だろう。……その後は想像したくない。
「くっ――一夏、離脱！」
「――――野郎……」
甲龍からの伝達に即時、白式は反応した。異形は攻撃を避けると反撃に転じてくる。
その方法は出鱈目だ。異常に長い腕を振り回す接近攻撃。――イメージは独楽。
自身の身体を主軸に高速回転を行い、そんな状態からビーム砲撃を行ってくるのだから迂闊に接近できない。
「ああもうっ！　ほんっと、面倒くさいわ、こいつ」
甲龍の両肩が発光し、一拍を置いて、龍砲は放たれる。――がしかし、異形の腕は慣性と自身の重量、さらに空気抵抗まで利用し、衝撃砲を叩き落とした。同じ事を既に六度、異形の射程距離から抜け出すことには成功したが、攻撃は未だ成功していない。
回転状態からの砲撃は有効射撃距離が通常の半分しかない。その事実が幸いしていた。適当な距離を取れば暫く、作戦を練る時間くらいは与えられる。

「……鈴、あとエネルギーはどのくらいだ？」
「――七〇少しってところよ。次に大きいのを一撃でも貰えば終わりね」
試合なら、と皮肉げに鈴音は嗤った。
そんな平穏な終わりを迎えられると言うのなら、諸手を挙げて大賛成だ。
けれど現実はそこまで甘くない。
「――厳しいわね。情けない話だけど私達の火力でアレのシールドをぶち破って、ダウンさせられる確率は現実的に一桁にも届かないわよ」
「零じゃないだけマシだ。……それに逃げるだけなら簡単だぜ。雪片で障壁を叩き切ってやればいい。――まあ、その後を考えれば在り得ないけどな。それでも逃げたいなら手を貸すよ。どうやらアレの目的は俺らしいから、鈴だけなら助かるぜ、きっと」
「――冗談。笑えないわよ、それ。あたしはこれでも代表候補生なの。それが尻尾巻いて退散なんて、コントにもならないわ。……それに、あたしアレ嫌いなの。誰だか知らないけどせめて装甲切り裂いて中身引き出してやるまでは絶対、止めないから」
せめて事後に犯人が特定出来る状態までは持っていく。
それが鈴音が妥協できる境界線なのだろう。
「そうか。じゃあ、お前の背中くらいは護ってやるよ」
「え？　あ。う、うん……。――ありがとう、一夏」
鈴音が零した言葉は確かに一夏の耳に届いた。それだけで思考が研ぎ澄まされる。再度集中力が高まるのが、解る。――これが織斑一夏の境界線だ。
――関わる人、すべてを守る。
高過ぎる理想だった。
今の一夏が背負うにはあまりに重い『願い』だった。

しかし、ここに妥協は赦されない。
可能か、不可能か。
選択肢など始めから無いこの道にそんな問いはただ、無粋なだけだ。
――この身が走狗であろうと一向に構わない。
異形はいつのまにか回転を終え、ただ佇んでいた。
無機質な紅の瞳が一夏を見据えている。
負けじと睨み返してやった。
「――そういえばアレ、さっきからあたし達が会話してる時ってあんまり攻撃してこないわよね。まるで興味があるみたいに聞いてる」
その様子を見ていた鈴音がぽつりと呟いた。
まるで意識してなどおらず、思ったことをそのまま口にしたような言葉。
――あるいはそれを待っていたのかもしれない。
「……。なあ、鈴。あいつの動きってナニカに似てないか？」
冷静を装って一夏は鈴音に声を掛けた。
警戒は続けている。
異形は不気味な沈黙を保ったままだが関係ない。
「何かって何よ？　……まさか、独楽なんて言うんじゃないでしょうね」
「流石の俺だってそれはないぜ。見たまんまじゃねえか。……何て言うかな、似てるんだあいつ。昔自動車メーカーが作った人型ロボット？　……うん、やっぱりそれに似てる」
攻撃を回避した後、異形は必ず回転攻撃を仕掛けてきた。それは白式と甲龍のどちらでも変わらない。寸分違わない行動を異形は何度も繰り返している。
剣を振るう一夏だからこそ、解る事がある。
生身の人間なら当然あるであろう、緩急や乱れ。それが異形にはこれっぽちも感じられない。――そんな人間がいるだろうか？
「……確かにそう言われれば、動きが機械染みてるわよね、あいつ。

……けれど、無人機なんて在り得ないわ。ＩＳは人が乗らないと絶対に動かない。そういうものだもの」

「……だよな。でも、アレって本当に人が乗ってるのかな？」

何処かの国が開発に成功して、利権の為に黙っているという可能性は零ではない。

――もしそうならば。

「なに？　さっきから妙に思わせ振りだけど、無人機なら勝てるって言うの？」

「ああ。人が乗ってないのなら、容赦なく全力で攻撃しても大丈夫だしな」

アレを完膚なきまでに消滅させる方法が、織斑一夏には在る。

おおよそ抑えてはいるが。

本来、白式の単一使用能力・零落白夜は対人で使うことが出来るような代物ではない。『対エネルギー消滅能力』――それを言葉通りに捉えるのならば、白式はこの世界に在るすべての物質に対してジョーカーと成り得る力を持っている。

エネルギーの広義を考えれば可笑しな話ではない。むしろシールドエネルギーのみ対応していると考える方が異常だ。ＩＳの本質はけして戦闘機などではないのだから。

その強すぎる力が一夏を勝利から遠ざけている。

しかし、異形が人間ではないとするのなら、その時、白式の真価は発揮されるだろう。そんな機会を一夏は待っていた。

そして今こそがその瞬間なのだ。

「……あんた、意味分かってる？」

本当にそれでいいのかと鈴音は問いかけた。

それは心配だった。無論、異形ではない。――もし間違っていた時、織斑一夏の心は耐えられるのかと鈴音は尋ねていた。

「ああ」

「言い切ったわね。じゃあ、そんなこと絶対にあり得ないけど、アレが無人機だと仮定して攻めましょうか」

決意の籠められた言葉は思考を覚醒させるには十分だ。
鈴音の目付きが変わった。
まるで感情を映さない瞳は異形に通じるところがある。
――けれど決定的に違うのは。
そこには代表候補生として、そして凰鈴音としての『誇り』が宿っているということ。
双天牙月の連結が解除される。投擲武器としての能力を捨て、スタンダードな青龍刀に変わった。同時、衝撃砲の砲門が開き、常時展開形態へと移行する。
「――はあ。これなら『崩山』でも持ってくるべきだったわ」
状況は依然厳しいままだ。
「一夏」
「ん？」
「どうしてほしい？」
けれど隣に立つ幼馴染はそんなことを微塵も感じさせない。
自分を信頼してくれる。
それだけで織斑一夏は戦える気がした。
「俺が合図したらあいつに向かって衝撃砲を撃ってくれ。最大出力で」
「甘いわね。イグニッション・ブーストだけで倒せるなら、ここまで苦労しないわ」
「――解ったのか？」
「当たり前。今までの一夏の戦い方を思い返せば、寧ろここで新技って方がよっぽど在り得ないもの。……それだけじゃ足りないわ。時間差で甲龍も畳み掛けるから、必ず成功させなさい」
「……了解。けど良かったのか、あいつきっと今の聞いてるぜ？」
「残念、聞かせてるのよ。――理解してかわせるものなら、かわしてみればいい」
どうせその時は二人とも終わりだものと鈴音は笑った。
その笑顔があまりに綺麗だったから、

「――勝つぞ」
失わせたくないと一夏は思ったのだ。
両腕を下げ、肩を押し出すような格好で甲龍が衝撃砲を構える。最大出力砲撃を行うため、補佐用の力場展開翼が後部に広がった。
白式がその射線上に躍り出る。
――警告、後方に高エネルギー反応確認。回避してください――
「莫迦なこと言うなよ、白式。それが目的だ」
瞬時加速は放出・収縮・再放出――以上の三段階における慣性エネルギーを使用する。そしてその速度は圧縮時のエネルギー総量に比例するのだ。
ならば何故、一度放出を行う必要があるのか。
それはＩＳの特性によるところが大きい。搭載量に差異があるといえどすべての機体は共通の燃料とエンジンで起動している。
そしてＩＳはエネルギーの相互交換を可能としているのだ。つまり、圧縮する際に利用するエネルギーは外部のモノでも構わない。
ドン、と背中に巨大なエネルギーの塊がぶつかるのを感じる。衝撃砲の弾丸だ。自身の身体が軋む音を聞きながら、織斑一夏は――加速した。
「――――はあっっ！」
右手の雪片弐型が強く光を放つ。中心の溝から外側に展開したそいつは、一回り大きいエネルギー上の刃を形成していた。
――零落白夜を使用可能。エネルギー転換効率九七・九四三八二七三九％――
その情報を聞くまでもなく、一夏は理解していた。初めて触れた時にも感じた一体感。世界自体を把握できるようなクリアーな五感。集中力が数倍にも跳ね上がったかのような高解像度の意識。そしてなにより――。
全身から湧き立つような力を織斑一夏は感じる。
（俺は……千冬姉を、鈴を、セシリアを、箒だって……！　関わる人を今度こそ……！）

今度こそ護ってみせる。

異形の光線が白式の装甲を抉る。――だからどうした。
シールドエネルギー総量はもう限界だ。――だからどうした。
織斑一夏はここで終わるかもしれない。――だからどうした！
関係ない。
そんな些細なことは限りなくどうでもいい。
今はただ――。
（こいつを叩っ切る！）
必殺の一撃は異形の右腕を切り飛ばした。
その反撃で白式は左拳を胸部に受ける。絶対防御起動。しかし、反動までは相殺できない。何かが折れたような音を一夏は聞いた。
さらに接触面から熱源反応まで確認。
どうやら敵は零距離でビームを叩きこむつもりらしい。
けれど、計算通りだ。
「……止めたぜ？」
「上出来よ、一夏っ！」
鈴音の操る甲龍が疾走する。双天牙月の片割が左手を粉砕し、残る一太刀が異形の頭部を切り飛ばした。――連撃は終わらない。
紅蓮の輝きの直後、異形が弾ける。
甲龍最強の武装・龍砲が仇名す逆賊に終わりを与えようとしている。
それはまさしく天帝の雷だった。怒号と共に放たれる一撃が異形の胸部に大穴を穿つ。そこから除いたのは火花を散らす金属片。
「――とうとう人殺しになったかと思ったけど、まさかアタリとはね」
覚悟はしていた。いや、しているつもりだった。
けれどまだ、凰鈴音は少女だったらしい。――止めを与えた相手が人間ではないことに彼女は安堵した。

「一夏大丈夫？」
「ああ、無茶苦茶痛てぇけど……生きてるから大事ない」
「……莫迦、心配したんだからね」
「ごめん。――でも、何にしてもこれで終わ――」
「――■■■

まいと蓮姫は立っている。

「――決めた。
お前は壊すだけじゃ足りない。
……完膚なきまでに殺し尽くす」

そこに明確な意思を持って、
篠ノ之箒は異形に宣戦布告する。

◆

人を恐怖させる物の条件は三つ。
一つ、怪物は言葉を喋ってはならない。
一つ、怪物は正体不明でなければならない。
一つ、怪物は不死身でなければならない。

異形はまさしく『怪物』と形容するに相応しい相手だった。
人間に限りなく似ているのに、在り様は真逆。
恐怖を持たず、挑みかかる相手を前に出来ることなど人間には少ない。
セシリア・オルコットも表情には出さなかったが、確かに恐怖を感じていた。どんなに偉そうなことを言おうと、実践を経験していないのでは自分は素人と変わらない。
それは理解していた。
ただ――そんな気持ちはもう、久遠の彼方に消えてしまっている。
今、思うことは一つ。
自身の目の前に立つ、篠ノ之箒だけだ。
確かに、自分は彼女より先に飛び出したはずだった。
当然だ。なにせ、障壁を破ったのは正確には彼女なのだから。
――だというのに。

侵入と同時に一夏の危険を察知して、援護しようとした時には既に、篠ノ之箒は彼女の前にいた。

そんなことは在り得ない。

ＩＳの展開速度は人間の反射神経の限界を越えない。

つまり〇・一秒以下の行動をＩＳは行うことが出来ない。

その絶対の法則を篠ノ之箒は覆した。

最初は一夏との試合で、そして現在、この場で。

「箒さん――」

声を掛けようとしたところで、彼女からの秘匿通信にセシリアは気付いた。

（――単一使用能力？）

やはりワンオフ・アビュリティーかと思うと同時に、何故これを今自分に見せるのか、その意味をセシリアは求めた。

結果として彼女は知る。

箒が異形のビームによる攻撃を防ぐことに成功したのは、いわゆる身体強化――フィジカル・エンチャントとの類ではない。より高度で応用範囲の広い、そして代償も深刻な、肉体改造である。

アマルガム・ピコマシン――篠ノ之博士開発のソレは言葉通りナノマシンの百分の一の『小ささ』を持つ超極小金属体だ。理由は記載されていないが、篠ノ之箒は機体にだけではなく、自身の体内にも無数のＡＰを埋め込んでいる。

ソレを媒体にすることにより、一時的に箒は自身の肉体を蓮姫に作り替えるのだ。

要するに、肉体補助用に体内に埋め込まれている金属を兵器として露出するのである。部分的な変化は不可能、常に全身を変化させる『しかない』この単一使用能力は限定的にステータスを最大三倍にまで引き上げる。

それは箒の主観において三十秒間。

つまりセシリアの時間軸において十秒の間のみ、彼女は超法外的な存在に変貌するのだ。

この能力の難点が、使用限界時間後に訪れる極度の肉体疲労。
つまり先日のクラス対抗戦におけるリタイアの状態である。
そこまでを読み取ったところでセシリアは箒を見た。
一見、何事もないように立ち振る舞うその姿。しかし、彼女は既に体感時間にして九秒――現実時間にして三秒をこの能力に使用している。
よってのこり七秒の能力行使後、箒は『強制起動停止状態』に陥るのだ。――まるで、自身を部品のように書いてある文章には思うところがあるが、一応の事情はセシリアにも理解できた。
この場における彼女の役割とは奇襲。
人間には予測できても機械には予測できない、認識外からの攻撃行為。発想の自由さが人間の最大の長所であるならば、機械に真似できない発想で狡猾に裏をかく。
それが現在、人間であるセシリアのみが可能な援護なのだ。
本当は反対したかった。
しかし……蒼い雫は――セシリア・オルコットは、この場では無力。
（……情けない）
怪物を御せるのはやはり怪物しかいないと納得できてしまう自分があまりに惨めで情けない。――もっと強くなりたいと彼女は思った。
せめて大切な人を護れるくらいには強くありたいとセシリアはこの時、思った。
（埋め合わせはあとできっちりしてもらいます）
――だからこの瞬間だけは、わたくしは道化になりましょう。
そして、僅か七秒間の超常の闘いは始まりを告げる。

∞

人は迷わずに生きていけるのだろうか。
人は躊躇わずに何かを成せるだろうか。
人は苦しまずに答を得られるだろうか。

――不可能だ。
そんな問いかけはこれっぽっちも現実的じゃない。

そんなモノを人とは呼ばない。
そんなモノが人とは呼べない。

迷いから解放され、常に心安らかな悟りの境地にいる人間がいるとすれば、そいつは、きっと――死人だ。真の安楽など生きている限りはけして得られない。
『究極的な悟りの境地』は『死』と同一だ。

――それゆえにこの名は『寂滅為楽』

空っぽの伽藍が語る偽りの極致。
死者の名を語る不届き者が描いた理想。

――忘れないで。

シノノホウキの抜け殻は――。
そうまでして生きていたかったのだということを。

――目前の異形についての、戦術面における分析。情報源は、戦闘経験を持つ鳳鈴音と織斑一夏。
長距離における光線兵器。一撃は予備動作含みコンマ三秒以下。

連撃はコンマ八秒以内に四回を確認。未視認標的に対しては攻撃せず、無人機であることからプログラム制御化にあると思われる。威力、遮断フィールドを貫通。熱量から三倍時のブルー・ティアーズに相当。的中率、自身が防いだモノを除けば障壁破壊時のみ。約二〇％未満と推測。

近距離における戦闘方法。光線兵器を撒き散らしながらの回転攻撃。風圧と装甲により龍砲の叩き落としが可能。ただしその間、光線兵器の射程距離は長距離時における約半分となることが確認済み。

全身を覆うフル・スキンにＡＰシステムによる回復機能有り。衝撃砲、雪片弐型による零落白夜、共にダメージを与えつつも、致命傷には至らず。

事前分析の結果、異形との戦闘における蓮姫の勝利条件。一、コアもしくは全身装甲の完全消滅。二、ＡＰシステムによる同化行動。成功率は順番に八九・三四八二七七一％、三四・五七四二九四一％……以上、報告終了――

それが蓮姫から、対決に及ぶにあたって篠ノ之箒に与えられた情報だった。

「――鈴音、一夏を連れて距離を取れ。後は私とセシリアが始末をつける」

「アンタ、私の名前……」

「いいから、早く！」

ここからは情理を抜きにした道理と合理の対決となる。

ならば異形が追い詰められた際、既に戦闘能力を失った白式と甲龍を狙うのは必然。

人が乗らぬＩＳなど機械に等しく、姉妹にかける温情すらない事を蓮姫は知っている。故の撤退指示、白式と甲龍は特に反抗もせず従った。

舞台はこれで整った。与えられたチャンスは主観より残り二七秒。現実時間より七秒。勝率予想は悪くない。行動内容は原則第一条件に従う。異論はなし。

よってこれより。
蒼い雫と連携しての、敵性ＩＳ殲滅作戦を開始する。
先手を打ったのは蓮姫。
――単一使用能力・寂滅為楽を発動。筋力・二倍、視神伝達速度・二倍、出力・二倍。発動時間、主観より七秒――
倍速を持って、蓮姫は黒式へと姿を変えた。そのまま箒は異形に向かって、偽・雪片を振る。火花が散り、衝撃が腕へと伝う。
異形は刀を受け止めた。やはり、零落白夜でなければ切り裂けない程度に異形の装甲は厚い。しかし、箒はけして一人では戦っていない。
残る腕を一夏の時同様に振り上げる異形。
そこにセシリアのブルー・ティアーズの光線が殺到する。
溶解した隙を逃さず、黒式は黒龍へと姿を変えた。偽・雪片は偽・双天牙月へ変わり、間を置かず、『偽・龍砲』が火を噴く。
オリジナルの二倍の出力を持つ、偽・龍砲が異形を貫いていく。
けれど、それでも敵は倒れない。
――タイムアップ。起動限界まで残り主観二十秒――
約二・三秒間の奇跡は終わりを迎えた。途端、異形の動きがおそろしく速くなったように箒には思える。……いや、逆だ。
箒が遅くなったのだ。流石は機械仕掛けというべきか、異形の速さは蓮姫の速さに対応出来ている。アリーナの客席から見た時とでは随分と印象が違う。
どうやら過小評価していたようだと箒は結論した。
「――油断するな、セシリア」
「ええ、下賤にしては良い動きですわ」
――けれど、私達の敵ではありません。
セシリアはまるで当然のように勝てると言う。戦闘経験ならまだしも、ＩＳ運用時間ならば箒と対して変わらない彼女になぜ、状況が見えていない。
暫しの思考の後、それが虚勢だと箒は気付いた。――そう、セシ

リアは自身の身の内にある恐怖と必死に折り合いをつけようとしている。

当然か、誰もが自分のように死人をやっている訳ではない。

怖いに決まっている、恐ろしいに決まっている、生きたいに決まってる――。

これは自分一人の闘いでは無いことにようやく箒は認識した。

蓮姫が提示した勝利条件。それが彼女一人での結果だなどといったい誰が決めたのか。より徹底的に、より鮮烈に勝つことを望むのならば。

――思考の固定など以ての外。

「遠距離と近距離、両方から叩く！」

黒い雫がインターセプターを構え舞う。後を六基の黒翼が追従する。

「蓮姫、能力発動。十秒だ」

再び、禁忌の銀色がその身を包む。高濃度圧縮粒子として肉眼で確認できるサイズになったＡＰはショートブレードとその持ち手を保護するように周囲に渦巻いた。

先程は偽・雪片単体だったから貫けなかった。ならば――目視出来るまで強化を重ねたこの剣はどうだ。

空気を裂くようにインターセプターは飛んだ。

それは過たず、異形の腰元に突き刺さる。――龍砲の折、確認したが敵のコアは胸元に無い。首を刎ね飛ばされてもなお、動いたことから後に残る候補はそこだけだ。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットと篠ノ之箒の奏でる輪舞曲で！」

蒼と黒、総勢一二基のビットが異形の周囲を旋回しながら、攻撃を加えていく。

その姿はまさにロンド。

異なる戒律を挟みながら、何度も繰り返される狂気の調。

……それを。

――異形は防いだ。

表情の無い貌がにやりと嗤ったような幻想を箒は視た。

一度目の一斉射撃を連続瞬時加速でかわすと、異形は回転を始める。記録に在った接近攻撃だ。――しかし、これは寧ろ……。

「……邀撃、だと？」

忘れていた。

箒もセシリアさえも――ブルー・ティアーズは全方位攻撃を可能とする特殊武装だが、けして全自動砲撃を可能とする装備ではない。操縦者自身が座標を特定し、攻撃の命令を下して初めて光線は発射される。それが相手の隙や思考の合間を突くというのなら。

無人機である異形に死角など存在しない。

回転と共に撃ち出される光線は全くランダムに見えて、しかし一片の無駄も隙もない。人智を超える演算により計算つくされた弾道は飛来する光弾のすべてを撃ち落とす。

「――近付けない」

それどころか、光線を四方八方へと飛ばすことで黒い雫がこれ以上、接近できないよう牽制まで異形は行ってみせた。

「まだ、終わりではありませんわ」

けれど、そこで攻撃は終わらない。

防ぐのが異形ならば責め立てるのは人間。

蒼い雫の真価はこれからだ。

不意に異形の回転が鈍った。

まるで関節を動かない方向に無理矢理歪げたような、鈍い音が響く。

たとえすべてを予測できても、セシリアのブルー・ティアーズにはその先がある。

フレキシブルの弾丸は光線と接触する直前、その軌道を変えた。

それが異形に関節構造上不可能な機動を強制する。どんなに優秀だ

ろうと所詮は機械。
「わたくしの奏でる旋律が、彼方如きに理解できるとお思いで？」
繊細な動作を必要とし、常に気を配り続ける彼女の歪曲ノ魔弾の前には児戯に同じ。
しかし、それでも異形は箒の射撃だけは撃墜し続けた。ここに来て冷徹に判断を下したのだろう。――ダメージを容認するとは機械といえど大胆な戦術だ。
「――時間切れか」
不意に身体が重くなる。
起動限界時間まで残り主観十秒。
奇跡はあと四秒弱しかない。
「なら、そろそろ終わりだ」
――それだけあれば十分だ。
この三十秒にも満たない間に行われた戦闘経験はそのデータすべてが箒を勝利へと導く糧となる。装甲の裏側で、蓮姫は動き続けているから。
「お前がダレカなんて私は知らない。どんな目的があったのかも知らない。――けどな、いっくんはお前のモノじゃない。私のモノでもセシリアのモノでも鈴音のモノでもない。でもさ、拠り所にしたのはこっちが先だから、あいつを連れていかれちゃ困るんだよ」
――一夏は莫迦だけど。
だから笑っていてほしいんだ。
それがきっと『篠ノ之箒』が望んだことだから。
――単一使用能力・寂滅為楽を発動。筋力・三倍、視神伝達速度・三倍、出力・三倍。発動時間、主観より十秒――
三度紡がれた言霊は終焉を約束するものだ。
世界がモノクロームに変わる。――ふわりと気負いなく蓮姫はその一歩を踏み出した。それは篠ノ之箒からすれば何気ない一歩。

鈴音から見れば、まるで消えたかのような超瞬時加速。
自分をいきなり『鈴音』と呼んだ事もそうだが、彼女はいつも唐突で混乱させられる。極めつけが目の前のこれだ。さっきからビデオの早送りのような高速移動など、いったいどんな冗談だ。
「……あたしを除者にするってどういう料簡よ」
――本当に冗談が過ぎる。
鳳鈴音はまだ戦える。
一夏が守ってくれたのだ、ダメージなんて在りはしない。
「大体ね、アンタいきなり出てきて目立ち過ぎよ――！」
双天牙月を腰だめに構え、甲龍が力場展開翼を広げた。
――その間。
瞬時に内側に入り込んだ黒式の偽・雪片弐型が異形の片腕を切り飛ばす。受け止めることなどできはしない。単純計算にして雪片の一太刀三度分の斬撃を、ただ一度に集約するこの一閃を防ぐ術など目前の無人機には存在しない。
瞬きの暇すら許さず、繰り出された異形の拳を黒龍のパワータイプマニプレーターが粉砕する。同時、スパイク・アーマーがスライドし、覗いた紅蓮の輝きが異形の両肩を消し飛ばした。
「[redacted]！」
異形がまたも咆哮を上げる。無人機ＩＳの緊急再生機能が起動し、特殊金属粒子の散布が始まる。しかし、それよりも速く黒い雫のインターセプターが両足を切断した。
異形が突進する。聞こえた呻き声から有効性を確信し、さらに己の胴を叩きつける。
言葉が通じたならアレはこう叫んでいただろう。
落ちろ、と。
その怨嗟を完全に無視し――。

「お前が墜ちろ」
その顔面を殴りつける。まるで人間同士の喧嘩のように呆気なく、よろめいた異形から半歩の距離を取り、慣性を利用した蓮姫の回転蹴りが、無人機の腹部に減り込んだ。
「鈴音！」
「オーケー！　飛んでけ――」
手足の欠損した異形の肢体が空を舞った。後方から急接近した甲龍が双天牙月を持って、それを叩き上げる。粉々と宙に散らばる部品。
その中に視えた異彩を放つ球体を――。
「――閉幕ですわ」

セシリアのブルー・ティアーズが。
鈴音の龍砲が。
そして黒い雫のスターライトＭＫ？が。

真っ白な世界の中、最早、欠片一つ残さずコアを消滅させたのを篠ノ之箒は見た。
――タイムアップ。操縦者起動限界到達。よってこれより強制睡眠に入ります――

４／鳳鈴音（下）

世界が茜色に染まっている。
そんな錯覚を教室に在った私は覚えた。
誰かの声、何かの音。
確かなはずのモノは曖昧で――。
そこはまるで夢現。
「……遅かったじゃない」

窓の外を見つめて少女は言った。
服装は最近お気に入りだというタイトなトップと動きやすそうなパンツ。
長くて綺麗な髪の毛が風で左右に揺れている。
「そう言うなよ、委員会だったんだ」
紡がれたのは少年の言葉だった。
まだ幼い――そう、まるで目の前の少女と同じくらい。
声変わりもまだ終わらぬ、そんな年頃の少年の声が二人だけの教室に残響する。
「なによ、だから許されるって思ってる訳？　甘いわよ、■■。女の子を待たせるなんてもう全然ダメ。男の風上にも置けないわ」
「そこまで言われるのか、俺は！？」
「当ったり前よ。……いい？　これからはどんな用事があってもあたしを優先しなさい。どうしても何かある時は逐一、あたしに許可を取るの。じゃなきゃ、許さないから」
鋭角的な瞳で私越しに少年を見据え、少女はそう言い放った。
そして得意げにふっと小さく笑みを溢す。
「そうして■■があたしだけを見てくれるなら、いつか料理を御馳走してあげる。料理はそうね――酢豚なんか……、好き？」
「あ、ああ。そりゃ、好きだけど」
――じゃあ。
「料理が上達したら毎日あたしの酢豚を食べてくれる？」
そう言って少女は笑った。
夕焼けの中で、二人の世界で――。
どこまでも幸福そうに微笑んだ。

◆

鈍い痛みの波が襲ってきて、追憶は現実によって塗り潰された。
今のはなんだろう。
……決まってる。記憶だ。
誰かの過去、誰かの想い――。
それは誓いだった。
何人たりとも、触れることさえ赦されない。
少女の聖域だった。
それを――私は犯した。
知り得るはずのない幻想を覗き見した。
どうしてあんなモノを私は観たのか。
知っている、けど理由にはならない。
興味がないと言えば嘘になる。
でも、これは私が知っていいようなモノではなかった。
……ああ、なんて悪平等。
誰かの幸福も、不幸も。
痛みも、優しさも――。
私は共有できてしまう。
――そんな資格が、私にあるはずもないというのに。

◆

ガチャリ、とドアが開く音がした。
早朝。閉ざされた窓から差し込む光の中で微睡んでいた私は現実へと引き戻される。
ここはどこかの病室だった。
おそらくは昨日、意識を断絶されている間に運び込まれたのだろう。
ぼんやりと靄がかった意識の中、周囲を見回す。
視界に入ったのは大きな窓と私が腰かける小さなベット。部屋全

体を白基調で統一した個室に存在するものといえば、あとは少し開いたドアくらいだ。
「……あれ、けど……？」
今ここには私一人しかいない。
確かに私は、誰かが部屋に入ってくる音で目を覚ましたというのに。
「はろー、久し振り。……元気だったぁ？　箒ちゃんっ」
不意に、誰かが私を背後から抱きしめた。……完全な意識外からの強襲、自身の存在を相手に感じさせない、神がかった絶技。そんなことが可能な知り合いは、二人といない。
それは、小声ではあるものの、最後に会った三月の夜とまったく変わらないセリフで、つい懐かしいような気がして――。
「ああ、私は元気だよ、姉さん」
意趣返しにそう言ってやると、ビクリと篠ノ之束は身を震わせた。動揺しているのか、私を抱きしめる腕は強く――――痛い。
「……箒、ちゃん？」
「悪いがまだ、『私』だ。抱きついて感傷に浸るより先に説明する事があるんだろう？」
二ヶ月前のあの場所ならともかく、学園は国連が運営する施設だ。当然、監視カメラや盗聴器は付いているだろう。束のことだからすべて無力化したのだろうけど――それでもあまり時間は残っていない。
「アレはお前のお気に入りか？　それとも飽きて捨てた内の一つか？」
「うーん、たぶんその中間だと思うなぁ。だって二日前までは確実に実験して遊んでた気がするもん。けど、昨日壊れちゃったって事は、廃棄処分も兼ねて最後の実験をしたってことなんだろうね」
言って、束はふわりと笑みを溢す。……まるで確信を得ないこの口調。おそらく、束はあの異形をもう、覚えていない。
興味を失った対象は姉の頭の中では存在すら許されないのだ。

それにしても実験、か。

いったい、あの襲撃で何を得たのだろう。

ちょっとだけ考えてすぐに思考を止めた。……無意味だ。常人どころか、そこにすら至れない私の欠落した感性では誰の意図も理解できない。

「――それにしても意外だなぁ。箒ちゃんさ、こんな少しの間でもう、二人もオトモダチ作っちゃったんだね……。あーあ、知り合いの数ならもう負けちゃったよ」

本当に嬉しそうに、けれど残念そうに言う。

それはまるでシュレディンガー。

「ついでだから教えてあげる。今回の目的はね――いっくんのためのプロモーションっていうのが表向き。あとで新聞でもテレビでも見ればいいよ。大成功だったから」

とある科学者が語った、夢のように斬新で、残酷な響きを持って束は自身の創り上げた物語を語っていく。

「そして本当はね――観たでしょ、箒ちゃん？　自分のじゃないダレカの記憶」

夕焼けの中で交わされた約束、微笑んだ鳳鈴音――。

「……やっぱり、アレは」

「そう、蓮姫の単一使用能力・寂滅為楽と特殊装甲武装・彼方は切っても切り離せない、弐式聯合の機能だからね。これまで箒ちゃんの世界には束さん以外に人間がいなかった。そしてわたしは読み取られないように設定していた。だから、今までは自分の記憶以外に観ることがなかった。――それだけの話だよ、箒ちゃん」

人間に系統と属性があるように、ＩＳにも系統と属性は存在するという。そしてそれは相性に影響するのだが、蓮姫は探る者であり、使う者なのだ。つまり私と蓮姫はデータの上では最低の相性なのである。

篠ノ之でありながら抱えるこの矛盾。

「――つまり蓮姫は対象にしたモノ全てを模倣する。ＩＳの性能、

搭乗者の経験、過去、技術……時間を掛けてゆっくりと、けれど確実に、それらは箒ちゃんの一部になる」

その答こそ、たった今、束が語った事実なのだ。

なんてことだろう。けれど、それに私が口を挟むことはできない。だって意味がないもの。

私は束がいなければ生きることさえ、できなかったのだから。

そうか、と短く呟いた。

同情も嫌悪もないこの響きは嫌いじゃない。私は欲しい恩恵なんてないし、同情なんてまっぴらだ。だから束の対応は正解だろう。

すくなくとも私にとっては……。

「箒ちゃんはさ、ずっと昔の――事故に遭う前の自分に会いたいって思ったりする？」

ふと、束はそんなことを聞いた。

「いや、別に」

「……そうだよね。……わたしもさ、矛盾してるってことには気付いてるんだ。ほらぁ、前に話したでしょう？　事故に遭う前、束さんは箒ちゃんと全然お話できなかったって」

「――ああ」

「だからさ、今こうして箒ちゃんに抱き付いて、心配して、お姉ちゃんみたいにお話できることが、何より幸福で――だからこそ、思っちゃうんだよ」

――仲直りしたいって。

平静な声で可笑しなことを言ってくる。

私は会話の奇妙さに、つい笑みを溢してしまった。

「おかしなひと。篠ノ之箒はこうして目の前にいるのに。こうしてお話できているのに」

――それでも彼方は過去が欲しいんですか。

それが最上の皮肉と知っていて、それでも私はそう言わずにはいられない。

この気持ちはなんだろう。

解っている。嫉妬だ。
「……むぅ。そう言われると束さんは何とも返し辛いなー。ぶいぶい」
誤魔化し方まで、あの日の夜と一緒なんだなと思うと、なんだか妙に嬉しかった。
「――良いんじゃないか」
だからなのか。
「……え？」
「私は別にどうとも思えないからさ、束の好きにして良いんじゃないか？」
そう言えてしまう自身の異常さには気付いている。
けれどそれがいったい、どうしたというのか。
きっと、これは私なりの過去への挑戦なのだ。
ただ、拒絶するだけ拒絶して――ある日いなくなってしまった『篠ノ之箒』への挑戦。たぶん、そんなところだ。
「いいの？」
「全然構わないね。むしろ一気にやっちまったら？」
「……はは、昔も今も変わらず強がりだよね、箒ちゃんは。声、震えてるよ」
そんな訳ない――と、私は震える肩を抱いた。
抱擁の感触はより一層、強くなる。
「申し出は嬉しいんだけど、こういうのは計画的にやらないと怖いからねー。まだ暫くは箒ちゃんの自由意思に任せておくよ。だいたい、今日来たのってそのお話のためだから。ダメだよ、安易に性能に頼っちゃ。あの程度ならさ、使わなくても簡単だったでしょ？」
「――そうだな」
「もっと箒ちゃんが信用した人間を利用しなきゃ。いっくんの白式、キンパツのブルー・ティアーズ、オオトリのシェンロン。操縦者はともかく、どれも一級品の私の玩具だよ」
人を使えと言いながら、機械を信用しろと喋るこの矛盾。

そのギャップがきっと人間と篠ノ之束の間にある溝なんだろう。
それは目眩がするほど、広く、深く、暗い――。
「……ひとつ、教えてくれ」
「ん、なにかな？」
「織斑一夏を巻き込んだのも、それが理由か？」
解らずとも聞かずにはいられない。これもまた矛盾。……まったく世の中は道理が捻れ曲がってばっかりだ。
「そうだね。入学祝って意味もあったけど、これは正直、束さんのお節介って意味がほとんどかな？　ちーちゃんといっくんってね、見てると本当に歯痒いんだよ。二人とも家族が大切過ぎて、だから大きなことを言えない。本当は気になって気になって、狂おいしいくらい互いのことが心配なのに、自分よりも相手を優先しちゃって結局なにも言えない。そんなの許せないじゃん？　うん、赦せない。束さんの大切な人達にそんな苦労を強いる状況も――そんな原因を作っちゃったわたし自身も」
――だから閉じ込めた。
たとえ迷惑だと言われても、この先どんな危険に織斑一夏が遭遇する可能性があったとしても、家族が離れ離れになるくらいなら、そっちの方がいい。
束の独白は私に顔も知らない両親という存在を思い出させる。
彼らも私達姉妹に会いたいと思う事があるのだろうか。――そういえば一夏にも両親がいないという。……結局、篠ノ之束の行為は持たざる者の嫉妬なのかもしれない。
どんなに頑張っても、どんなに結果を出しても――満たされない、この空費感は。
無限にも等しい。
……ああ、だから。
――だから束は空を目指したんだろうな。
そこには果てがないから。どこまでも行ければ、どこへでも飛べれば、自分の嫌いじゃない世界があると思ったから。

そうしてその虚空を支配して、次は宇宙と進めていけば、きっと死ぬまでの間くらいは退屈しないに違いない。

なんて悲しい人。本当に欲しい者はたった三つしかないと理解できているはずなのに、それだけじゃ不安で、仕方なくて、どうでもいいものの為に、何もかも失った。

それで良かったのか、と声は尋ねた。

プラスチックのように味気ない、乾いたオトは再び孤独に戻った姉の身体を震わせた。悪寒はとまらない。その瞼の熱さの意味も知らぬまま、天才は孤高の存在で在り続ける。

束は頷いた。

「いつも、もしかしたらって恐れてた。明日にはダレカいなくちゃうんじゃないかって、そんな可能性を否定できない自分が恐ろしかった。当たり前のように寝て、目覚めた時、ダレカが消えちゃってたらどうすればいいの？

世界は綱渡りに似てるってわたしは思うんだ。他人よりもデキが良かったからなのかもしれないけれど、わたしの日々は少しの幸福と圧倒的なまでの死への恐怖しかなかった。けどだからこそ生きてるって実感もあったのだけど。覚えておいて、箒ちゃん。

虚ろな日々を知っていれば、それだけ幸福が愛おしくなる。けれど、そうなればもう、人は抜け殻ではいられない。それにさえ慣れてしまったら、あとは死と直面した瞬間しか生きていられなくなっちゃうから」

生よりも死に焦がれれば終わりだと束は言った。

……自身が目指す終着点はそこだからと。

何処までも行く。何処までも飛ぶ。

――――――その為に。

「いっくんは道連れか」

「違う。それだけは違うよ、箒ちゃん。そんなことだけは在り得ない。この狂ってしまいそうな孤独だけは、いっくんには似合わない」

「……なら束は大丈夫だろ。いっくんをここに連れてきたあたり、

まだ救いがいがある。――それにどうしてもおかしくなりそうになっても大丈夫だ」

その時は私を――。

自分では持てない生の実感を他人に求めるのは、悪いことじゃない。それくらいの価値ならまだ私にもあるはずだ。

救いの主が決定的な死神だったとしても、私は後悔だけはしない。

「――いっくんは子供だからな。いつでも空をみている。いつでもまっすぐにしている。だからその気になればどこへだって行けてしまうんだ。そう――もしかして連れて行って欲しいのかもしれないな」

それはここ数年でダレカが見た幻想だったのかもしれない。

呟くと同時、確かにそこにあったはずの重さは消えていた。

振り返るがそこに篠ノ之束の姿はない。

まるで最初からいなかったかのように、そこには何も無かった。

「……空に憧れる者ほど空には近付けない、か。皮肉だな」

――どう思う蓮姫？

彼女には初めから私達が安全だということがわかっていた。篠ノ之束の策謀は完璧だ。誰もが犯人を確信しながら、それを立証できない。それを完璧と言わずして何と言う。

だというのに、束はこうして私のお見舞いなんかに来た。『篠ノ之箒』という存在が、完璧であるはずの天才に予想外のリスクを背負わせたんだ。

それが何故かお前らには判るまい究極よ。

結局どこまで人型に迫ろうと、人情を理解できないのでは異形の域をでることはない。何百と数があったとしても、それはたった一つの存在に劣るのだから。

その事実だけが私を誇らしげな気分にさせる。

望むのならば近付きたい。

考えは浮かばないけれど、私にはまだ限りが残されているのだから。

そんな優越感を胸に抱きながら、私は瞳を閉じた。
……ああ、また眠くなる。
次の夢はなんだろう。
どんな物語を私に見せてくれるというのだろうか。
「――おやすみ、箒ちゃん」

◆

足を進めるたび、サクリと足元の白砂が澄んだ音を立てる。
遠くから聞こえる波の音に誘われるまま、俺はどこともつかぬ砂丘の上を一人歩いていた。足の裏に直接感じる砂の感触と熱気。海から届く塩の匂い。それに心地好い涼風と、じりじりと照りつける太陽。
ここがどこで、今がいつなのかはわからない。
俺はなぜか制服を着ていて、そのズボンの裾を折り返した状態で素足のまま砂浜を歩いていた。手にはいつ脱いだのか靴がある。
ふと、歌声が聞こえた。
とても綺麗で、とても切なげな、その歌声。
俺はなんだか無性に気になって、声の方へと足を進める。
足元の砂が軽快に鳴る。
そうして暫く歩くけば、少女はそこにいた。
波打ち際、僅かにつま先を濡らしながら、その娘は踊るように歌い、謡うように踊る。そのたびに揺れる黒い髪。輝き、眩いほどの白色に浮かぶ黒一点。
それと同じワンピースが、風に撫でられて時折ふわりと膨らんでは舞った。
なぜだか声を掛けようとは思わず、近くにあった流木へと腰を下ろす。その木は随分と前に打ち上げられたのか、樹皮は剥げ落ち、色は白くなっていた。
歪な椅子に座って、俺は呆と少女をみつめた。

風が心地好い。
小波の音を聞きながら、俺は飽きもせず、女の子を眺め続ける。
その唄は、その踊りはなぜか俺をひどく懐かしい気持ちにさせる。
「――ああ」
そうして気付いた。
これは神楽舞だ。
厳密な部類では神道というよりも土地神伝承に近い。現世に帰った霊魂とそれを見送る神様とに捧げられる舞。元々は古武術だった『篠ノ之流』が剣術へと変わった理由――。
気が付くと少女の唄は終わっていた。
踊りもやめて、彼女はジッと空を見つめている。
不思議に思って、座っていた木から離れて少女の隣へと向かう。
波打ち際までやってきた俺を、涼しい水の調が濡らした。
「どうかしたのか、■」
声を掛けると少女はハッと此方に振り返った。髪型は今も昔も変わらぬポニーテール。肩下まである黒い髪を結ったリボンが白色なのは、やはり神主の娘だからだろうか。
未成熟な肢体ながら、その眼光は威圧的で、どこかしら日本刀を思わせる。
「どうしてお前がここにいる、■■」
「おいおい、気付いてなかったのかよ。さっきからずっとここにいたぜ、俺は」
なんだと……、とやや唖然としたように少女は呟いた後、再び空に視線を映した。
つられて俺も空を眺めてみるが、そこには特に何もない。しいてあげれば大きな入道雲くらいなものだ。
「――成る程、システムエラーではないな。そうすればこれも■■の計画の内か……。相変わらず、悪卒な真似をする。どうしてそんなにも他人を信じられないのだ、彼方は。
……少々、名残惜しいが、仕方ないな。私の舞台はまだもう少し先

の話だ」
「え？」
隣に視線を戻すと、もうそこには■の姿はなかった。
左右を見るが、もう人影は見当たらない。唄も、聞こえない。
在るのは波の音だけだ。
仕方なく木の椅子に戻ろうと身体を反転させる。
すると――そこに、『紅』が、いた。
太陽の光を反射する深紅の装甲に身を包んだその機体は、ただそこに在るだけだというのに俺を圧する。理屈ではなく、本能が理解した。
これは白と並び立つ者。
弐式聯合の片割。
名を――。
「まだ、知る必要はないぞ、一夏」
声に振り向くことはできなかった。
――突然に、空が、世界が、眩いほどに輝きを放ち始める。
その真っ白な光に抱かれて、目の前の風景が徐々に遠くぼけていく。
夢の終わりなんて言葉がふいに浮かんだ。
そんな消えゆく夢幻に俺が掛ける言葉があるとするなら――。
「またな、箒」
この小さな幼馴染に対する別れの挨拶くらいだろう。
「……うん、またね」
――ああ、笑った……。

◆

感触は柔らかい。
そしてちょっといい匂いがした。

「おはよう、一夏」
傍らで声がした。
首だけを横に動かす。
そこにいるのは、ずっと昔から知っている幼馴染の女の子だった。
会わなかった期間は、たった一年と少しの筈なのに、まるで別人のように彼女は綺麗になった。けれどその本質は――そうやって屈託なく笑うその姿は小学生の時から変わっていない。
「――鈴、無事か？」
「うん。もう、莫迦なんだから。……心配したんだからね」
声はかすかに震えていた。
「はは、そういうの。すげー似合わねえぞ」
「……もう、ホント、馬鹿」
分かりやすく頬を膨らませて、鈴はそっぽを向いた。
その様子を見て、思わず俺は苦笑してしまう。
「あー、そういえば試合、無効だってな」
「まあ、そりゃそうでしょうね……」
言いながら、ベット脇に腰かけた鈴はリンゴを淀みない動作で剥いていく。
上体を起こした俺は痛みに少し顔をしかめた。
「無理しないの。骨折とかはなかったみたいだけど、全身打撲で数日は地獄よ？　はい、リンゴ」
「くそ、またかよ……」
もう二週間程前となった模擬戦の折の地獄を思い出しながら、リンゴを齧った。時期は外れているが、シャキリといい音をそれは病室内に響かせた。……旨い。
「――なあ」
「――なに？」
「勝負の決着ってどうする？　次の再試合って決まってないよな」
「そのことなら、別にもういいわよ。――それよりも今度、買い物

に付き合って」
「……唐突だな、そりゃ遠回しな勝利宣言か？」
「違うわよ、ただのお願い」
「……まあ、別にいいけどさ」
鈴がそう言うならきっとそうなのだろう。そこに疑問を挟む必要を俺は感じなかった。
そうして暫し、鈴と今後の対応について話し合う。今回の異形との戦闘で得たデータの提出、軽い取り調べ――。怪我人には中々ハードなスケジュールになりそうだった。
なんでもこういう類には暗黙の約束なんてものがあるらしく、つい一ヶ月前までは善良な一般市民だった俺が、そんなことを知るはずもない。
元々、といっても一年程だが、そっちについては専門家の鈴に詳しい話を聞いておく。その過程、約束という単語で俺は一つ思い出した。
「そうだ」
「ん？　どうしたの――」
「いや、ほら、この間言ってた約束の話。『料理が上達したら毎日あたしの酢豚を食べてくれる？』だっけ。どうよ？　上達したか？」
「え、あ、う……」
なぜかしどろもどろになって、鈴は左へ右へ視線をやったあと、うつむいた。心なしかその顔は赤い。
「なあ、ふと思ったんだが、その約束ってもしかして違う意味なのか？　俺はてっきりタダメシを食わせてくれるんだとばかり思っていたんだが」
「ち、違わない！　違わないわよ！？　だ、誰かに食べてもらったら料理って上達するじゃない！？　だから、そう、だから――」
いきなりまくし立てられ、俺はちょと気圧される。
「確かにそうだな。いや、箒に『それ、毎日味噌汁を――とかいう話じゃないか。意味は知らないけど』って言われてさ。違うならい

いんだけど。深読みしすぎだな、俺」
「――――」
「鈴？」
「へぇっ！？　そ、そうね！　深読みしすぎじゃない！？　あは、あははははは！」
笑い出した鈴は心なしか泣いているようにも見えた。けれどそれはきっと俺が聞ける話ではないだろう。本人が避けたい話題を追及する必要はないからな。
なんとか話題を変えようと、そういえば気になっていた話を俺はふることにした。
「こっちに戻ってきたってことは、またお店やるのか？　鈴の親父さんの料理、旨いもんな。また食べたいぜ」
「あ……。その、お店は……しないんだ」
「え？　――なんでだ？」
「あたしの両親、離婚しちゃったからさ」
――あんなに仲がよさそうだったのに、どうして……。
理由が俺には解らなかった。冗談ではない。鈴の表情はさらに暗く沈んでいるのを見て俺は――何を言うべきか迷った。
「あたしが国に帰ることになったのも、そのせいなんだよね」
「――そうだったのか」
やっと口から出たのは、そんな温かみも何もない事務的な反応で――こうやって誰かが辛い瞬間に何もできないことが俺には歯痒くてたまらない。
今にして思えば、あの頃の鈴はひどく不安定だった。何かを隠すように明るく振る舞うことが多く、俺はそれが妙に気になっていた。
「一応、母さんの方の親権なのよ。ほら、今ってどこでも女の子が立場が上だし、待遇もいいしね。だから……」
無理して明るく喋ろうとして、また声のトーンが沈む。
「父さんとは一年会ってないの。たぶん、元気だとは思うけど」
俺は鈴にどう声を掛けていいかわからなかった。鈴の両親が離婚

したという事実は、俺の心にも暗い影を落としていた。……だって、俺にはその感情が理解できないから。

気付く前にすでに失っている人間が、いったいどんな言葉を相手に掛けられるというのだろう。悲しくとも思えない人間が――。

家族が別々になってしまう。それは絶対にいいことじゃない。けれど、そうせざるを得ないくらい、何かがあったのだろうか。

気前のいい親父さんの顔を思い出す。活動的なおばさんの顔を思い出す。

どうして――。どうしてなのだろうか。

けれど、それを鈴に聞くことはできない。

なにより辛いのは彼女なのだから。

「家族って難しいよね……」

「――そうなのかもな」

「ごめんね。一夏にこんなこと――私、莫迦だよね」

そう言って俯いた鈴を――俺は、抱き寄せた。

驚いたように息を呑む声が聞こえるが知ったことか。

「一夏……？」

「今度どっかに遊びに行こう」

それが欠けている俺が言えた精一杯の言葉だった。

「……変なの。それならもう、約束したじゃない」

「相変わらず、肝心なところで抜けてるな、鈴は。誰が一回だけなんて言ったよ。誰が、二人だけなんて言ったよ。そんな寂しいこと言うな。セシリアだって、箒だって、千冬姉だって、五反田だって――みんないるじゃないか。ここにはさ」

その孤独は永遠に消えない。いや、消す事なんて出来ない。

だって、それは個人が背負うべき過去で、けして忘却など赦されない記憶なのだから。

だから――それに負けないくらいの幸福を創ろう。

「悲しみに耐えきれないなら、これからをそんなこと思い返す暇もないくらい楽しい日々にしようぜ。そうすればさ、ちょっとは楽に

なるんじゃないか？」
　たとえ、いつか思い返す日が来ても、その瞬間までは幸福でいてほしい。
　そう願うのは罪だろうか。
　そう思う事は赦されないだろうか。
　そんな訳、ないだろう。
「――一夏、ありがとう」
　鈴は笑った。綺麗に微笑んだ。
　……ああ、良かった。
「でも、できればあんたと二人っきりの方が――」
　鈴が言葉を続けようとした時、保健室のドアが思いっきり開け放たれる。
「一夏さん、具合はいかがですか？　わたくしが看病に来て――あら」
　つかつかと部屋に入ってきたセシリアの足が、言葉が、止まる。
　ベットの左右端に分かれて、視線を逸らす俺達二人を見つけたからだろう。
「……どうして彼方が。……一夏さんは一組の人間、二組の人にお見舞いされる筋合いはなくってよ」
「――何言ってんの。あたしは幼馴染みだからいいに決まってるでしょ。あんたこそただの他人じゃん」
「わ、わたくしはクラスメイトだからいいんです！　それに、今は一夏さんの特別コーチでしてよ！」
　どうやらセシリアがお見舞いに来たようだった。……突然、鈴と喧嘩を始めたが。
　まあ、ちょうど良いタイミングだったのかもしれない。多少強引ではあるけど、鈴が、いつもの彼女に戻った。
「じゃあ、明日からはあたしが特別コーチになってあげる。代表候補生だし」
「そ、そんなの駄目ですわ」

「なんで、いいじゃん。一夏もそれでいいでしょ？」
「だ、駄目ですわよね！？　一夏さん！」
二人が同時に俺に振り返る。また、困る質問が来たものだ。いったい、俺にどう応えろっていうんだよ。――少しばかり考える。
妙な沈黙が支配する中、俺が出した答えは一つ。
「これからもよろしくな。鈴、セシリア」
一拍をおいて、二人からの集中口撃が始まった。……けれどこれでいいんだ。どちらかを選ぶなんて質問自体が間違っている以上、これが俺の用意できる最上の答えだろう。
「この優柔不断！」
「在り得ない鈍感ですわ！」
うるさい、俺の勝手だろう、なんてことを呟いた。
こんな平和な光景がずっと続くことを願いながら。

滅為楽・了

1／寂

／境界式

α

いつもと何も変わらない、変わるはずのない彼女の日常は――ある日、唐突な終わりを迎えた。呼び出しは緊急を要するものだ。
この施設の事実上、トップに君臨している彼女を呼び出せるものがいるとすれば、それはきっと……。面会人など迎えるはずもなかった扉を開く。

足音一つ立てずに部屋に入ってみれば、そこにいたのは女性だった。年齢は自身が指揮をする部隊の副隊長と同じくらい。その表情は険しく、まるで永遠に解けない難問に挑む賢者のように曇っていた。

この人がこんな貌をするなんて。その見たこともない形相に一瞬、彼女は気圧される。女性は険しく厳しい眼差しで彼女を見据えた。

「お、お久しぶりです！　教官」

慌てて敬礼をする。恐ろしいまでの閉塞感。

室内が真空になったのではないか、と錯覚するほどの束縛。死をおそれない戦士であるはずの彼女さえ、この人物に死への畏れを感じるほどの。

「ラウラ・ボーデヴィッヒ少佐、命令だけ伝える。今年ＩＳ学園に入学しろ。以上だ」

重い声は、やはりどこか苦悩の響きがあった。

まるで自身の言っている言葉の可笑しさを自覚しているような声。

「……私が、ですか」

言外に何故かと問いかけてみるが、答は無い。

「……不服か」

「いいえ」

もしかすればこの人も理由を知らないのではないかと彼女は思った。――少し考えれば思い当たる事がない訳でもない。この場所を知っているだけでも少数なのだ。

そして自分に対するメッセンジャーとしてはこれ以上の人物など存在しないだろう。

「話はそれだけだ」

「部隊の者とは」

「また次の機会になるだろう。何せ時間がないのでな。――では、頼むぞ」

そう言って女性は歩き出した。

あくまで敬礼のまま、彼女は見送る。

「私もそこの配属だ。よろしくたのむぞ」
「は、光栄です」
「ではな」
そう言い残して女性は部屋を出た。
最後に浮かべた笑みの理由がラウラ・ボーデヴィッヒには解らなかった。

β

解放されて、彼女は弱々しい足取りで帰路についていた。
「……どうしよう」
呼吸のリズムがおかしく、目眩がする。
おそらく、原因はさっきの父親との食事のせいだ。
随分と久しぶりで、やさしいなと思って油断した。まさか、こんな——こんなふざけた案件を押し付けられるなんて……。
わかっていた。きっとまた嫌味を言われて、貶められて、笑われるだけっていうのは。でも、それでも……信じたいと思ってしまった自分がいるのだ。
予想通りの結果だったけれど、それでも涙は流さず、彼女は屈辱の時間を耐えて、こうして自身の家へと帰ろうとしていた。
けれど今日はその道が果てしなく遠い。
巧く身体が動いてくれない。
ふとショーウインドを見れば、自分の顔色が蒼白になっている事実に気付いた。
それが病気や薬物ではなく、ごく自然な緊張という動作の結果起きた異変だと理解できると不思議と可笑しさが込み上げてくる。
「——どうかしたの」
そんな自分は最早、不審人物以外の何者でもないだろう。愛想笑いの一つでも浮かべて誤魔化そうと、顔を上げた彼女は——悲鳴を

上げた。
そうして恐れた。自身が行えと命じられた作戦のあまりの不可能さを身体に教え込まれた気分だった。本能的に後ろに下がる。
ターゲットの姉に該当する人物は余裕を崩さず近寄ってきた。
まるで道化を眺めるような気楽さを持って彼女に近付いてきた。
「――どうしよう、わたし、どうしよう――――」
喘ぐ呼吸のまま、彼女は踵を返して走り出す。
それを、女の細腕が引き留めた。
驚いて彼女は顔を上げる。そこに在るのは優しげな微笑。
「君がシャルル・デュノアだね」
女の声は緩やかでありながら嘘を、否定を赦さない。
彼女――シャルロットは全身が凍りつくような畏れを、この時初めて体験した。
「ほら、落ち着いてよ。そんな顔じゃ、お家に帰れないよ」
家に帰れない、という単語が手品めいた鮮やかさでシャルロットの意識を縛る。
それは嫌。家に帰れないのは厭だ。自分一人だけど、今はあそこだけがシャルロット・デュノアの休める場所なのだから。
助けを請う瞳でシャルロットは女を見上げる。よく見れば女は冬だというのに、まるで夏着のように薄いドレスしか纏っていなかった。それは――そう、アリス。
不思議の国のお姫様。
「助けてほしい？」
催眠術じみた魔をもった声がする。
シャルロットは自分が頷いている事さえ気付かなかった。
「そう、じゃあ、助けてあげる。その変わり――」
――キミには一つ協力してもらうよ、シャルル・デュノア君。
だがその前に――彼女はひとつだけ問うた。
「彼方は、なんですか……？」と。
その質問に女は初めて興味が湧いたような笑みを浮かべた。

γ

だがその前に――騎士はひとつだけ問うた。
「貴様は何者だ」と。
蒼い襲撃者は笑みを浮かべ応える。
「重複心象――――■■」
言葉は路地裏に残響した。

2／重複心象　01

もしあの時、あの瞬間。
違う道を選んでいたら。
わたしは今、笑っていただろうか。
それとも、泣いていたのだろうか。
すべては仮定の御伽噺。
繰り返せない、人生だ。
だからこそ尊い人生だ。
そう言って微笑む先達を嘲笑い。
今日もわたしはぐるりと廻る。

――明日の彼方は昨日の彼方。
――今日の彼方は何時の彼方？

／0

六月頭、日曜日。
彼女は久しぶりに学園の外に出た。
今日はとてもいい天気で、見上げれば空はどこまでも蒼い。雲一つない空はやさしく、太陽の陽射しもうるさくない。
夢みたいに白くて暖かい陽射しのせいだろう。街はなんとなく蜃気楼のようにぼやけていて、数度訪れただけの大通りに彼女は自身の祖国の姿を重ね見た。
梅雨入りしたこともあって連日雨が降り続いていたのだが、今日はそれが嘘のように思える。――明るい一日になりそうだった。
彼女は流行モノの洋服を着て、喫茶店に入った。
最近は喫茶店ぐらい利用する。

こんな一日のおかげだろう、いつにもまして@クルーズは混みあっていた。

明かりは窓からの陽射しだけ、それが暑くもなく眩しくもないとくればどれだけ理想的だろう。本職には及ばないものの、それなりにポイントを押さえているこの店の接客は、遠い昔の幼馴染みの姿を彼女に夢想させる。

そんなセピア色の思い出が脳裏を過るから多少の失礼は赦せてしまえるのだ。

――テーブルは空いていなかった。

数秒の停滞の後、自身の失敗に気付いたメイドの一人が謝罪の言葉を口にしようとするのを手を翳すことで彼女は止めた。

一部の隙もない、命令することになれた人間だけが出せる雰囲気に理由も解らぬまま、メイドは口を閉ざす。

そうして店内を一瞥すれば、申し合わせたようにカウンター席がひとつ空いた。

かまわない、と短く告げて彼女は席に腰かける。

隣に座っているのは二十代の女性だった。雑誌を読みながら、時折苦い表情を浮かべて紅茶を啜っている。メニューを手に取り、紅茶とケーキのセットを注文した。

メニューを脇の棚に戻す時、さりげない動作で小型無線機を回収する。

それを耳に引っ掛ければ準備は完了だ。

「お久しぶりですわ」

『……ええ、セシリア・オルコット。まさか、こんな手段を使うとは想定外でした』

まるで隣に座っているチェルシー・ブランケットと同じような苦い声で本国イギリスのＩＳ整備部門担当責任者は応えた。もっとも無線越しにいるであろう女性はチェルシーのように店員の行動に一喜一憂するような類の人間ではないが。

責任者とはテストパイロットになってからもう、二年ほどの付き

合いがあった。当然、その性格は知っている。典型的な役人気質。面倒を拒み、自身で思考する努力を放棄した――要は事務能力だけが人並み以上に優れている、女性はそんなつまらない人間だった。

ただ、それは彼女が下した判断であって、責任者に対する周囲の判断ではない。

事実、その性情は日常生活を送るに当たってはむしろ有益であり、最低限のノルマさえこなしていれば何も言ってこない責任者には感謝すらしていた。

しかしソレは今回の案件に関しては有害だった。

だからこそ、彼女は無理を押してまでこの場所へとやって来たのだ。

「此方の要件はＢＴ兵器搭載型試作二号機『サイレント・ゼフィルス』の稼働実験データもしくは『星を砕く者（スターブレイカー）』の設計図を回してもらいたい、それだけです」

『何度も言っているでしょう、その要求には応えられません。――ブルー・ティアーズはＢＴ兵器の実働データをサンプリングする事です。実弾装備のデータは任務対象外です。だいたい、どうして急に実弾装備が必要なのですか』

「彼方、先月の報告書を読んでないんですの。ブルー・ティアーズの自己防衛能力の強化と織斑一夏のＩＳ、白式に対する反応実験のためと書いてあったでしょう。というより、あれだけのモノを見ていながら、よくそんなことが言えますわね。危機管理能力が欠如していらっしゃるんじゃなくて？」

そもそも、彼女にしてみれば先月の無人ＩＳ乱入事件後の本国の対応は、稚拙で異常としか言いようがなかった。敵機はモンド・グロッソ（※二十一の国と地域が参加して行われるＩＳの世界大会）で正式に採用されている遮断フィールドを貫通する火力と、同時に四機の第三世代型相当ＩＳと戦闘を行なえるほどの戦闘性能を有していたのだ。

その映像と戦闘時の実働データを提出させておきながら、当面の

対応は現状維持、実弾の武装は任務対象外――どう考えても納得できなかった。

『セシリア・オルコット。いいですか、ＢＴ兵器の実戦データ収集が彼方の任務です』

「それなら使用機体がブルー・ティアーズだろうとサイレント・ゼフィルスだろうと同じだと思いますが。――それに、わたくし以上に巧く動かせる人間なんておりませんわ」

『それを判断するのは上層部であって私でも彼方でもありません。いくらＢＴ兵器稼働率が最大値を記録したとしても、常識的に考えて個人に二機ものＩＳが譲渡されるなど在り得ないでしょう』

「それを理解しているからデータが欲しいと言っているんです。現場の状況を正しく判別して上層部に進言できないようなら退きなさい。――わたくしは、彼方の保身の為に命を投げ出せるような安い仕事をしている訳じゃなくてよ」

元々、ブルー・ティアーズは実験・試作機だ。まだ開発が始まったばかりの第三世代型ＩＳ故にエネルギー効率も悪い。それは彼女も理解していた。

ＢＴ兵器を実用段階に持っていくための蒼い雫であり、テストパイロットだ。

人もＩＳも代わりなど効かない。だというのにどうしてこうも無関心でいられるのか。彼女には理解できなかった。――可能性を否定するのは勝手だ。

在り得ないと言って、何もしないのは簡単なのだ。

けれどそう楽観していて、いつかナニカあった時、ＢＴ兵器だけでどこまで対応できるのか。自身が無関係でいられるなどと、そんな楽観思考は彼女にはできなかった。

そして渦中にいるだろう自身の友人を――織斑一夏や篠ノ之箒を見捨てるなんて真似も彼女にはできそうもない。甘かろうが関係なかった。

それが結果として祖国から預けられた専用機を守ることにも繋が

るのだ。
なのに何故、それを否定するのか。
セシリア・オルコットは理解できない。
失われたモノは還ってはこない。
なんであろうと、永遠に――還ってはこないのだ。
――だからこそ、護る為の力を欲したというのに。
『そこまで仰るのなら、予定より若干早くはありますが『スターダスト・シューター』のデータと『ブリリアント・クリアランス』のデータをＩＳ学園に滞在しているスタッフの元へ送りましょう。これ以上となると流石に私の独断では不可能です。最も交渉の余地があるとは思えませんが。そこまで言うのなら一応、打診はしておきます』
「……どうしてもサイレント・ゼフィルスは送っていただけないと」
『今すぐには不可能ということです。――――――少し待ってください』
そこで奇妙な空白の時間があった。
まるでナニカを探しているような、そんな静寂。
『……一つ、尋ねます。セシリア・オルコット』
「なんでしょう」
『――対策は完璧ですか？　盗聴の心配はありませんか』
責任者のその言葉に彼女は隣に座るチェルシーを見た。
――問題ありません。現在、常客のすべてがオルコット家の者です。
そう英語で走り書きされた紙がすぐに手元にあった皿とテーブルの間に挟まった。この文字の大きさと筆圧なら、おそらく監視カメラにも映るまい。
念を入れ、小型無線と蒼い雫の間に疑似エネルギー経路を精製する。
現在飛行パワードスーツ『インフィニット・ストラトス』を盗聴できる機械は理論上、この世界には存在していない。

「ええ、こちらは大丈夫ですわ」
『そうですか。――機密になりますが、彼方なら一応問題はありませんので報告します。サイレント・ゼフィルスですが、先程から問い合わせを行なっていますが、開発部門から返信がありません。また、ブルー・ティアーズの為に取り寄せておいたシールド・ビット『エネルギー・アンブレラ』についてもデータにプロテクトが掛かっています』
「それは……」
『おそらく、開発計画自体が凍結されたのか。それとも――』
――強奪でもされたのか。
可能性の話ですが、と責任者は続けた。あくまで事務的に淡々とそんな話をする女性をを彼女は空恐ろしく思った。――不思議な静けさだ。
まるで嵐の前のような、そんな感覚。
それまでは穏やかだった白い陽射しに急に暑さと眩しさを覚え始めた気がする。故郷に視えた街並みは無骨なビル群に、懐かしく思えた店内は紛い物のメイド喫茶に変わって、しまった。
ああ、と彼女は声を漏らす。唐突に夢想は終わってしまった。当たり前のように周囲を塗り替えた現実は、計画の失敗を彼女に教えていた。
「……そう、ならば今回は見送ることにしますわ。ただ――『その話』は、詳しい情報が入り次第教えてくださいな」
『了解しました。今度からは逐一、報告します。だから今回のようなことはこれっきりにしてください、セシリア・オルコット』
通信が途切れる。トーン音が鳴らない様子をみると当初の計画通りに無線機は破砕処理されたようだ。耳に引っ掛けていた機器を指先の部分展開で直径三センチ程のスクラップに変えた後、ソレを鞄に放り込み、セシリアは紅茶を口にした。
僅か数分の会話だったが、ルール違反をしているという自覚があったからだろう。喉は異常に乾いていた。少し熱めの紅茶が嚥下し

ていく感覚が妙に心地好い。
「お嬢様。手筈通りに撤収を始めておりますが、私達はどのように？」
まるで計ったかのようなタイミングでチェルシーが声を掛けてきた。
――相変わらず、人の心の機微に鋭い幼馴染みだと思う。
昔からそうだ。十八歳とは思えない落ち着いた雰囲気を身に纏っていて、幼馴染みと言うよりはお姉さんの印象の方が強かった。
母のような憧れで、目指す目標で――そして彼女が護らなければならない一人。
あんな話をした直後なのに、どうしてこんなにも穏やかなのか、と考えて、なんとなく理由が見つかった。
――きっと、チェルシーが私を信用していつでも味方でいてくれるからだろう。
自分を待ち続けている誰かがいる事に安心するから、彼女は頑張れるのだ。
「――そう言われると、まったく考えてませんでしたわ。あーあ、こんなわたくしからぬ真似をしたというのに、収穫は微々、厄介事の気配はする……なんだか災難続きです」
チラリとセシリアはチェルシーの方へと目線を向けた。
にこりと柔らかな笑みを浮かべる彼女は何時ものメイド服ではなく、黒のミニスカートに白ブラウス。アウターに薄手のパーカーコート。分かってはいたがメイド服ではない。……悪戯めいた名案がセシリアに浮かんだ。
「そうですわ、チェルシー。今からショッピングに行くので付き合ってくれませんか」
「……構いませんが、お嬢様」
ゆっくりと人差し指を唇に持っていく。
「お静かに。彼方がメイドだとばれてしまいますわ、チェルシーお姉様」

茶目っ気のある笑みを浮かべてセシリアはそう言った。
幼馴染みは少しだけ驚いたようだが、すぐに笑顔に戻ってしまう。
その表情はお世辞のしようがないくらい綺麗でけれど嫌味ではなく人を包み込むような優しさに満ちていた。
「――分かりました。行きましょう、セシリア？」
同性さえドキリとさせる魅力を持って、チェルシーはセシリアの名前を呼んだ。

2／重複心象　02

◆

「おはようございます、鳳鈴音代表候補生」
「お、おはようございます……」
――年齢は二十代後半。その女性は切れ長の目に鋭いエッジの眼鏡をかけ、ばっちりとスーツを着こなしていた。
雰囲気だけを見るのなら、織斑千冬に近くなくもないのだが、いつもどこかに苛立ちがあるような神経質そうな顔立ちが二人の違いを決定的なものにしている。
「な、なにか御用でしょうか……、楊候補生管理官」
厭な予感が、鈴音の背中をざわめかせている。
六月頭、日曜日。
久々に何の予定も入っていない純粋な休日だった。中国代表候補生に課せられるＩＳの機動訓練、その今週の規程時間も消化し、先月末に発生した無人ＩＳ乱入事件の報告書も書きあがったとなれば、鈴音がこなすべき仕事は既にない。
なにより最近は梅雨のせいか雨の日が多かったのだが、今日は雲一つない晴天だった。朝、カーテンを開けると共に視界に飛び込んできた、見渡す限りの青空――そんなものを見てしまえば今日はもう、遊ぶしかないと思っても罪にはならないだろう。
理屈では説明できない高揚感に後押しされ、未だ夢の中の同居人、ティナ・ハルミトンを後目にまずは朝食を、と鈴音は部屋を出た。
そうしたら目前に候補生管理官が立っていたという訳だ。数秒前の事実は最早、過去なのだろう。そんなことよりも――。
（本国にいるはずの管理官がなんで日本にいるのよ？）
――どうして休日の早朝にこんな重役が自分の元を訪ねてくるのか。数秒の思考の後、それが愚考だと鈴音は結論した。答えは最初

から解っている。仕事だ。
　楊麗々は右手で眼鏡をくいっと上げた。
「彼方の申請書にあった『甲龍』の機能増幅パッケージ『崩山』の用意が完了しました。早速、実装と量子変換、それに試運転を開始します。付いて来なさい」
「――え。もう、ですか？」
　驚きの声が漏れてしまったのは仕方のないことだと鈴音は思う。なにせ、その申請書を出したのは僅か三日前だ。今月中に、そもそも受理されればいい方だと考えていた代物のために態々、候補生管理官自らが出張ってくる――その事実が驚きだった。
「別に、驚く類の話ではありません。先月、あれだけの戦闘を行なったのですから、何かしらの対策を講じなければなりませんでした。そういった意味で、彼方の申請書は適当でまた、都合がよかった。それだけの話です」
　賢者とは年齢や性別によらない。その良い例が鈴音の目前を歩く候補生管理官だった。本人は仕事をしただけと主張するだろうが、しがらみや面倒事に左右されず自身の仕事を遂行できる者を世間では一流と呼ぶのだ。
「そうですか。でも、あたしまだ朝ご飯も食べてないんですけど……」
「二度同じことを　言わせないように。――それくらいは知っています。工作室に簡易ではありますが、朝食を用意しました」
　それが結果として鈴音のためになるのなら、彼女は余計な口出しをせず、従うくらいの従順性は持ち合わせている。ただ、この事務口調はなんとかならないのだろうか。
　楊麗々の態度はあまりに頑な過ぎる。
　これでは礼を述べるタイミングも見つけられない。
「……それで、今回のパッケージは前回より強化できた？」
「ええ、不可視という特異性は結果的に消滅してしまいましたが、砲門の倍増、破壊力の増加には成功しました。今度の龍砲は拡散衝

撃砲です。感覚に慣れておくように」
「了解」
代表候補生だけあって、鈴音の切り替えは早い。送られたデータを端末で確認しながら適度に疑問点を挙げていく。
仕上がりは上々、あとは自身がどれほど効率よく運用できるかだ。
ＩＳの運用方法を考えている時の鈴音の視線は鋭い。猫科の動物を思わせる瞳が爛々と輝いている。その様子を見て、楊麗々はフッと笑みを浮かべた。
無論、鈴音に悟られるような無様は晒さないが。
「予定通りに工程を終えられれば午後からは休暇に入れるでしょう。故に迅速に、そして確実に結果を示しなさい。彼方には期待している」
「は、はあ……ありがとうございます。けど、いいんですか。あたしは別に一日掛けでも構いませんけど」
「……私だって人間です、休暇を潰される苦痛くらいは理解しています。それに、あまり一点突破型の人間になられても後々、対処に困る。特にこの時期の経験は彼方の将来の上で重要な要素になりえるでしょう。そういった日々の成長を見守るのも、候補生管理官の仕事です」
何なら織斑一夏と遊びに行ってきなさい、本人としては冗談交じりの言葉だったのだが無表情がいけなかったらしい。鈴音は青ざめた表情で俯いた。
「あの、何度も言ってますけど、あたしは一夏にそういうことは……」
「――勘違いをされても困るので言っておきますが、私は彼方に美人局をやれと言っているのではありません」
確かに、ソレを望む声がまったく無い訳ではない。鳳鈴音は代表候補生として、甲龍の稼働データをサンプリングする一方で、そういう目的を持って本国からＩＳ学園に送られたという側面もあったことは否定できない。

ただ、候補生管理官である楊麗々がそれを肯定するのかと問われれば答えは否だ。

彼女は公人である。しかし、人間を辞めたつもりは毛頭無い。たとえ結果としてそうとなったとしても進行のプロセスの段階から自身の部下にそんな真似をさせることを断じて許すつもりはなかった。

「そもそも織斑千冬が彼の担任である時点で既に計画そのものが破綻していると言ってもいいでしょう。無意味に付き合うほど、私も彼方も暇ではない」

ブリュンヒルデの前でそんなことが出来るものか。世界と一個人、全体の九割と一割、世界の頂点という栄光を前に躊躇なくそれを捨て去ることができる人間などどう考えても尋常ではない。アレは篠ノ之束同様、人の皮をかぶったナニカなのだ。

楊麗衣はそう結論する。――それに個人的ではあるが、彼女は鈴音の経歴に傷をつけるような真似は控えるべきだとも考えている。

鈴音は自身を非才と称している部分があるが、それは間違いだ。どうして上層部も彼女もそんな評価をしているのかは知らないが断言しよう、ＩＳとはそれまでの四年間日本で義務教育だけを受けていた一介の女子学生が僅か一年と少しで代表候補生になれるような容易い世界ではない。

いくら彼女自身が努力したといっても、それだけでは説明できない事実にどうして誰も気が付かないのか。――鳳鈴音は大器なのだ。

来年は流石に不可能だろうが、五年後のモンド・グロッソ、それに彼女が出場していない確率の方が低いと楊麗衣は思う。例外があるとすれば織斑一夏の元に嫁いで子育てでもしている可能性くらいのものだ。……そう、何より鈴音には他の中国代表候補生にはない絶大なアドバンテージが存在している。

始めから織斑一夏、ひいては織斑千冬と知り合いというその一点。それこそが鈴音の現在の地位を不動のものとしている。彼女だから三日で申請書を通したのだ。

挙げるべき有効点があるとすれば、鈴音は無意識化でこそ活躍す

るという部分だろう。彼女は自身が意図しないところでこそ、国家のために働くという稀有な美徳がある。

織斑一夏の専用機白式との公式試合初対戦、その後の無人機ＩＳとの初戦闘、ひいては撃墜。イギリス代表候補生セシリア・オルコットとの個人的な交友関係。さらには篠ノ之博士に通じるであろう肉親、篠ノ之箒との個人的パイプ――。

掲げるだけでも既に四つ、僅か一ヶ月で累積されたこの功績。

幸運だけでは説明が付かない鈴音の性情こそ、楊麗衣が最も評価する部分なのだ。

ＩＳ操縦者とは国家の象徴である。そして象徴とは実像だ。けして偶像などではない。

――私の才能を信じてないくせに神様を信じてるなんて、偶像崇拝もいいところだよ。

私は実像だ、とＩＳ開発者は言った。限りなく人間である存在だとその力を持って証明したのだ。ならばＩＳ代表操縦者の候補生とは誰よりも人間でなくてはならないのだ。

その人間性と実力を持って世界に覇を唱えられる存在でなければならないのだ。

故に現在、鈴音は最も代表操縦者に近い。

その賛辞の意味を込めたからこそ、自ら彼女の元を訪れたのだ。

「……それにこんな事を言うのは失礼かもしれませんが、子供である内は子供らしい方が私としては好ましい」

仕事は大切だが、一時の輝きを無特にするような真似は感心できない。

彼女はまだ少女なのだから。

他者に望まれ、自身が望み、それが許される内くらいはそう在ってほしい。

「わ、わかりました……努力します」

「よろしい。――では、無駄口はここまでです、鳳鈴音代表候補生」
気付けば工作室の前だった。
――まずは実装から始めましょう。
候補生管理官の言葉に、
――はい、と代表候補生が返答した。

そうして在りし日は過ぎていく。
新たなる波瀾に控えて、
今はただ穏やかに、日々は過ぎていく。

2／重複心象　03

γ

静寂と闇に支配される室内。
使用済みの注射器が床に散乱している。
ナイフを取り出すと、それを自分の顔に撫でるように彼女は当てた。
皮膚が切れ、真っ赤な血が溢れ出す。
■■によく似たその顔を傷付けることに、言いようのない愉悦を感じた。
ナイフの側面に月が映る。
黄金色、堕ちた猟犬。
鋭い吊り目は濁っていた。
「――ああ、」
少しやり過ぎた。
これでは怒られてしまう。
……誰に？
「――なんだ、誰もいないじゃないか」
そんな人はもういない。
彼女を気にかけてくれる人など、暫く前にいなくなった。
ここにいるのは彼女独り。
……最初から。
いつしか嘘は現実を塗りつぶし、虚空は真実という名になった。
秋に降ったにわか雨を、覚えているのは彼女だけ。
けれどもう、忘れてしまう。
「――ああ、」
それが酷く恐ろしいことに思えたから――。
彼女は鎧を纏うことにした。

肌の上に直接何かが広がっていく感触。
突然身体が軽くなる無重力感。
右手に重みを感じると、装備が発光して形成されていく。
世界の知覚精度が急激に高まる清涼感。
それらすべてがわかる。
知りもしないのに、習ってもいないのに、わかる。
送られてくる情報から見る世界はまるで――。

――まるで理不尽の塊だった。
響いた絶叫が自身のモノだと気付いたのは数分後のことだった。
理由もわからずにベットに倒れこんで、間をおいてそれが過呼吸のせいだと理解した。
……狂ってる。
どうしようもなく、狂ってる。
「――ねえ、そう思わない……？」
呟いて振り向いた。
歪な笑顔を浮かべて。
蒼の襲撃者は白の守護者と対峙した。

2／重複心象　04

1／重複心象

勘違いに端を発した学園生活も気付けば二ヶ月が過ぎていた。
ながらく職業不明だった姉が担任になっていたり、六年ぶりに再会した幼馴染みの口調がすっかり変わっていたり、入学数日で入試主席と喧嘩になったり、中国から知り合いが転校して来たり、はたまた同級生三人と謎の侵入者を撃退したり、と息をつく暇もない。
織斑一夏の一五歳の春は、そんな慌ただしさの中で始まった。
今日は久しぶりの休日で、五反田の誘いで学園の外に繰り出して、気が付くと、世界は茜色に変わろうとしていた。――そんな一日だった。
ゲームセンターの前で弾と別れた俺は、ふと思いたって学園まで歩いて帰る事にした。幸い距離はそんなに遠くなく、二駅ほどしか離れていない。
午後五時三七分、商店街から聞こえる懐かしげな童謡に耳を澄ましながら、一人歩く。
昇龍の気魄は夢幻だった。譲れぬ覚悟で臨んだエアホッケーは、報われることもなく、俺に連勝十六という結果だけを与えた。そこには得点の半分以上が自殺点という対戦相手ながら憐みすら覚える弾のセンスの無さを挙げなければいけないだろうが、それと同時に運動能力の違いもまた指摘しなければならないだろう。
今日という一日に感じたのは強烈な違和感だった。
中学校時代は当たり前だった、ゲームをして、遊んで、夕方に家に向かって帰るというこの行為に既視感なんてものを抱いてしまうくらい、俺は日常から離れていたのだ。
確かに密度の濃さでは小学校も中学校も劣ってしまうだろう。けれどそこで順位付けをしようとすること自体が可笑しいことに俺は

気付いている。

……なんというか、見えたのだ。

弾の視線の動きが、筋肉の脈動が――そしてそこから予測された円球の軌跡が、俺にははっきりと視えていた。三ヶ月前には判らなかったこの感覚。

円球はセシリアの放つ弾丸より遅く、鈴の穿つ砲撃より容易く、そして箒の贋作よりも粗末だった。――そんなことを思ってしまった。

ポケットから学生証を取り出す。携帯を義務付けられたそのカードに書かれているのは特殊国立高等学校ＩＳ学園一年一組所属、の文字。最近はクラス代表操縦者専用機所持、なんて能書まで加わった。――それが今現在、織斑一夏の過ごす日常だった。

ＩＳ、正式名称インフィニット・ストラトスは本来宇宙用に開発されたマルチフォームスーツなのだが、今のところは地上で、それも各国が軍事力として配備している。

その特徴は既存の概念のすべてを過去へと堕とす圧倒的なスペックと外装以外は開発者しか解らないという徹底された秘匿主義、そしてなによりＩＳは女性にしか動かせない。

そんな数多の欠陥を持って世界を変えた絶対の力、それを俺は動かせた。

『ＩＳを使える世界で唯一の男』

その名を冠する覚悟はやっと最近固まり始めたところだ。偶然だろうとなんだろうと、与えられた以上は逃げるつもりはない。

――今度こそ護って見せる。

その為の努力は続けている。

……けれど、そう簡単には上手くいかないのだ。

ここ最近、どうも伸び悩んでいる気がする。そりゃ、一朝一夕で強くなれるだなんては俺も思っていない。剣道と一緒で、日々の基礎固めこそが勝利を呼び寄せるのだとは理解している。その甲斐あってか、知識としては未熟なところはあっても操縦と格闘スキルに

関しては早々、負けることはなくなった。
けれど話は専用機持ち――つまり幼馴染二人や友人となると変わってくるのだ。まあ、時間的にも経験的にも劣っている事は認めよう。そう、代表候補生の名は伊達じゃない。酔狂では名乗れないし、そもそも選ばれない。
次代を継ぐ資格を得た強者に対抗できたのは正直、最初だけだった。
そして肝心なことに俺はまだ、一勝だって挙げちゃいない。
その理想の気高さと困難さは知っていた。
けれどやっぱり心のどこかに甘えがあったのだと思う。
織斑なのだからと無根拠な自身が何処かに在ったのだ。
それを掲げられるのは俺ではなく、千冬姉であり――そして我が姉はそんな偶像には、これっぽっちの興味も示さない。
要するに理想と現実のギャップに悩んで陰鬱な気分になっちまったから、一人の時間を作って折り合いを付けようとしている訳だ。
カアと鳴いた鴉の音が俺を思考から呼び戻す。
なんだか随分と可愛い声だった。
視線を戻すと歩いていた橋の下、川沿いに広がる砂利道にしゃがみこんでいる女の子を見つけた。
白い制服を着た女の子が、呆と水辺に視界を彷徨わせながら座り込み、片手で石ころを玩んでいる。
……その制服には見覚えがあった。というよりアレはＩＳ学園の制服だ。カスタマイズ自由なんて無秩序を許しているくせに、調子に乗ると生活指導の対象にされるなんていう二律背反を形にしたようなソレを女の子は珍しくまったくの無改造で着こなしていた。
小柄な体型に癖毛なのかやや外側に跳ねている黒色の髪、此方からは背中しか見えないので女の子が同級生か先輩かすら窺い知れない。
――と、不意に女の子が手に持っていた石を放った。
スナップの効いた一投、水面を刎ねる。

……六、七、八。
計九つ。水際を叩いて石は沈んだ。
その様子をボウと俺は見ていた。
何度も何度も女の子は石を投げる。
一度で沈んでしまう時もあれば、十回も続いた時もあった。たまに二つ一緒に投げて、空で跳ねあわせるなんて変則技も披露した。
そうして暫く石を投げ続けた女の子は突然と立ち上がった。
西日が一層、強く差し込む。
振り返った女の子の顔を俺は見ることが出来なかった。口を開いてナニカ言っているが聞こえない。走る車のエンジン音が何故か大きかったからだ。
ごめん、と言って一歩を踏み出そうとすると、人影が数歩前に出た。
「……」
リボンの色ですぐに分かった。女の子は先輩、二年生だった。
しかも、見覚えのある顔をしている。
いや、見覚えがあるなんてものじゃない。
「ち、千冬姉……？」
その顔は昔の千冬姉に異常に似ていた。
「いや、」
女の子が口を開く。
その顔には薄ら笑みを浮かべていて、千冬姉とは似ても似つかない。
「わたしは田端野埜ノ子（タバシノノネ）だよ、織斑一夏」
アナタと同じ声で、ダレカはそんな事を言ったのだ。

2／重複心象　05

「――――――先、輩？」

呆然とまるで在り得ない幻想を視るように、俺は呟きを漏らした。

「――――なにやってるんですか、先輩？」

続く言葉は要領を得ない、おそらくまだ混乱しているからだろう。

それも当然だ。

俺にとって田端野埜ノ子とは学園で知り合った先輩であって、けして家族ではない。

織斑一夏の家族は世界でただ一人、織斑千冬その人だけだ。

例外なんて在り得ない、在ってはならない。――そもそも何故、目の前の人物は先輩を名乗るのか。俺の記憶にある先輩は容姿も体型も、その性格さえも千冬姉とは似つかない少女だった。そして先輩の髪は亜麻色であって黒色ではないはずだ。

「ふむ。見て判らないかい、考え事をしていたんだよ。最近、調子が悪くてね。ちなみにこの髪の毛は気分転換に理髪店で染めてきたんだが――どうだい、似合うかな？」

「……意味が解りません」

世の研究者というのは物事に行き詰まると髪を染めるのだろうか。俺が知っているのは先輩と束さんの二人くらいだが……ああ、束さんも染めてやがる。しかも紅、真っ赤。

「……本当に？」

ならば目前の人物はやはり田端野埜ノ子先輩本人だというのだろうか。

一度深く呼吸をおこなってリズムを整える。

感情が昂っていては真面な判断など出来るはずもない。

そして気付いた。そんなことを今更思い出してしまうくらい俺は取り乱していたのだと……もしも彼女が先月の事件に連なる襲撃者

だとすればこれ程御しやすい獲物はいまい。
新たに見つかった課題を胸に、再び俺は先輩を視界に収めた。
よく見れば眉毛なども記憶とは微妙に違い整えられた跡がある。
……なら、やはり彼女は先輩なのだ。
そう思うと妙にホッとしている自分がいた。……けれど、それにしてもよく似ている。女性はメイクで化けるっていう話はよく聞くが、実例を見たのは初めてだ。
髪を染めて顔のパーツを整えるだけで、あの先輩がこんなにも千冬姉にそっくりな顔になるとは意外だ。本当に、人は見かけによらない。――まてよ。
「……まさかとは思いますけど、なにか悪いことでもしましたか？」
こう、研究意欲が余って各国のコンピュータにハッキングしたとか。ちなみに束さんはその後、二千少しの弾道ミサイルを日本に向けて発射してしまったという黒歴史を持つ。
「――流石に失礼だよ、織斑一夏。意外性に関しては認めよう、キミのその反応は想定の範囲内さ。しかし、面と向かってそう言われればいくらわたしでも腹が立つ。そもそも、わたしが織斑千冬先生に似ていることはそんなにも悪いことかな？　確かにあちらの方が先達だが、何もわたしはこの顔を模倣して産まれる事を望んだ訳ではない。わたしという自我にこの顔が付随したのは完全な偶然さ」
本当は染めるだけのつもりだったと先輩は続けた。――まさか最近の椅子があんなにも気持ち良いものだなんて知らなかった。気付けば睡魔に絆され、寝ぼけて対応する内に、こんな事態になったのだ。……軽く疑ってしまうような話だが事実らしい。
小学生かアンタは、と心の中で呟いた俺はけして悪くないと思う。
「それにしても無意識下とはいえ、織斑先生に取って代わろうとするなんてね。我ながら浅ましい話だよ。一介の学生とブリュンヒルデとでは天と地ほどの差があるというのに。――莫迦だね、嗤ってくれて構わないよ」
「いや、何もそこまで言わなくても……」

何故だろう、不思議と先輩は夢見るような表情だった。
微かに――密やかに息を？んだように見えた。
「さて、無駄話はこれくらいにしておこう。わたしはこのまま学園に戻るが、キミはどうする？」
「え……ああ、はい。俺もこのまま戻るつもりですけど」
「そうか、なら戻りがてら語り合おうじゃないか。このまま話し合うのも風情が在って、いいと思うが何せ、キミは男、わたしは女だ。暗くなってから帰っては邪心する輩もいるだろう。そういう非生産的な行為に無駄な労力は使いたくないのだが、いかがかな？」
随分と遠回しな言い方だが、つまり俺は一緒に帰ろうと言われているらしい。
相変わらず小難しげな先輩だが、相談相手には丁度いいかもしれなかった。
その豊富な語彙能力を持ってすれば、俺のつまらない悩みにも何かしらの回答を与えてくれるかもしれない。少なくとも同級生に相談するよりは抵抗がない。
「じゃあ、俺でよければ」
「そうか。ふふ、そう言ってもらえるとなかなか嬉しいな」
そう言って先輩は俺の腕を取った。流石は先輩、日本人が不得手とする行為にも躊躇がない。この人に大和撫子なんてものを説いても聞いてもらえなさそうだ。寧ろ説明時間の何倍の時間と何倍のボキャブラリーを持って、徹底的に否定されてしまうだろう。
いきなり身体を密着させられても対処に困ってしまうのだが、とりあえず今は変に話を拗らせないためにもされるがままになっておこう。
……まあ、今の先輩は千冬姉にそっくりなので正直、そこまで苦手意識はないのだが。それは何故か、黙っておこうと思った。
「――そうだ。此間の乱入者のＩＳ機動パターンをプログラミングすることに成功したんだ。今度、是非とも実験に付き合ってくれないか？　なに心配なんかいらないよ。ＩＳの絶対防御を持ってすれ

ば操縦者が死亡するなど在り得ないんだからね」
「お断りしときます。……というよりそれじゃ講師でもなんでもなくて只、先輩の私情に俺が付き合うだけですよ」
「――何か不満かね？」
「死んじゃいます」
あの緩急や乱れのない超高速機動と回転攻撃を人間がやったら、慣性で全身を複雑骨折しちまうぞ。
事件そのものには関わっていたのに無人機ということまでは知らないという微妙すぎる立場の先輩が提案した人道限界の実験を断りながら、俺達は学生寮を目指すのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4273u/

ＩＳ／空の境界

2011年10月26日08時13分発行